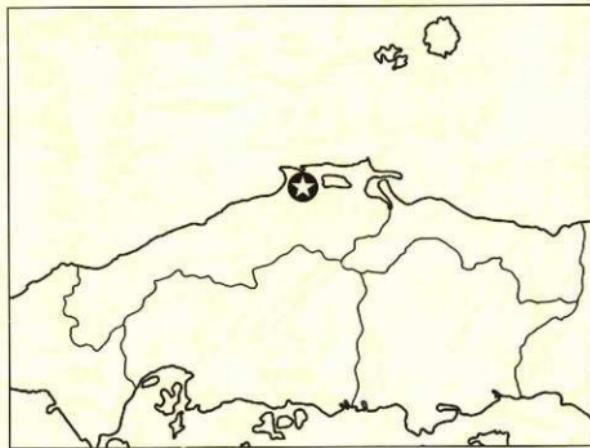


平成11年度古志遺跡群範囲確認調査報告書

# 古志本郷遺跡 下古志遺跡

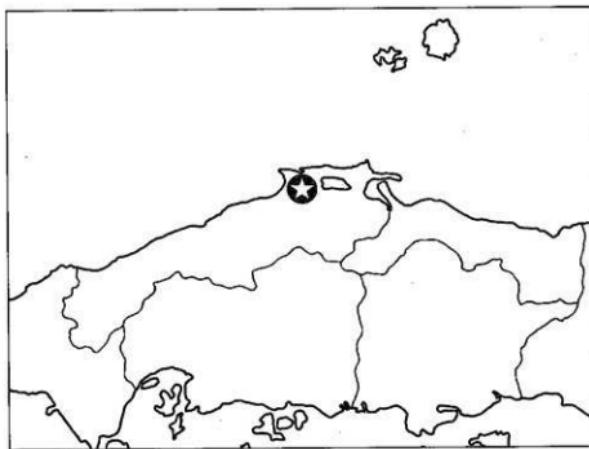


2002年3月

出雲市教育委員会

平成11年度古志遺跡群範囲確認調査報告書

# 古志本郷遺跡 下古志遺跡



2002年3月

出雲市教育委員会



古志本郷 1 T 大型柱穴



下古志 1 T S D O 2 遺物出土状況

卷頭 2



下古志 2 T 大溝 (SD04・05)



下古志 3 T 大溝

## 序

從来から周知の遺跡である古志本郷遺跡では、平成10年度に島根県教育委員会が行った発掘調査により、奈良時代の神門郡家ではないかと考えられる遺構・遺物が発見され、神門郡家の比定地として一躍脚光を浴びることとなりました。

また平成7年度からの出雲市教育委員会が行った発掘調査により新たに発見された下古志遺跡において、A・D～F区より弥生時代の集落を囲むと考えられる大きな溝状遺構が何条も発見され、弥生時代の拠点集落である可能性が浮上して参りました。

これらの相次ぐ発見により、古志遺跡群の重要性が取り上げられることとなり、出雲市教育委員会では、平成11年度に国庫及び県費の補助を得て、古志本郷遺跡の郡家建物跡と下古志遺跡の大きな溝状遺構の範囲確認調査を行いました。

その結果、古志本郷遺跡では平成10年度調査時に検出した建物と連続すると考えられる建物の柱跡を発見し、今回の調査地まで建物が連続することが判りました。

また下古志遺跡ではA区からD区へまたそれ以南へと大きな溝状遺構が続いていることが判り、集落の範囲を確定する好資料を得ることができました。

以上今回の調査において多くの貴重な成果を得ることができました。これらの成果が、弥生集落研究・風土記研究・郷土史研究などの資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、快く土地を貸与下さった地権者の方々、ご指導いただきました関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成14年（2002）3月

出雲市教育委員会

教育長 多久 博

## 例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が平成11年度に国庫及び県費の補助を得て実施した古志遺跡群範囲確認調査の報告書である。現地調査は平成11年度に、報告書作成は平成13年度に行った。
2. 調査は、古志本郷遺跡に1トレンチ(以後「T」と省略)を、下古志遺跡に1~3Tを設定し、実施した。
3. 各トレンチの地番は次のとおりである。

古志本郷 1 T　出雲市古志町794-2外

下古志 1 T　出雲市下古志町740-1

下古志 2 T　出雲市下古志町692-1

下古志 3 T　出雲市下古志町705

4. 発掘調査は、平成11年(1999)11月10日~平成12年(2000)2月10日までの、3ヶ月間にわたり実施した。
5. 調査組織は、次のとおりである。

調査主体　出雲市教育委員会

事務局　平成11年度　大田　茂(文化振興課　課長)・川上　稔(同　課長補佐)

平成13年度　板倉　優(芸術文化振興課　課長)・川上　稔(同　文化財室長)

調査員　米田美江子(平成11年度文化振興課・平成13年度芸術文化振興課　嘱託員)

調査補助員　平成11年度　佐藤三鈴・羽木伸幸・竹田章乃・石橋弥生・永瀬周子(以下文化振興課　臨時職員)

平成13年度　小村睦子・滝尻幸平(以上芸術文化振興課　臨時職員)

調査指導　田中義昭(元島根大学法文学部教授)

椿　真治(島根県教育庁文化財課)

6. 調査及び報告書作成に当たっては、次の方々から有益なご助言・ご指導をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略)

内田律雄・守岡利栄・勝部智明・松尾充晶(以上島根県埋蔵文化財調査センター)

中村唯史(三瓶自然館)

7. 発掘調査及び整理作業・浄写については、以下の方々のご協力を得た。

発掘調査　安食　勉・鎌田　悟・岸　邦夫・坂根幸子・岡藤俊也・滝　彩子・長島節子・藤原一男

整理作業　矢田愛子・鞠口令子・石川桂子・森山博美

井上喜代女・村田理恵(以上いなか舎)

8. 調査にあたっては、土地所有者(石橋　章・江戸栄治・武田　博・勝部圭吉氏)をはじめ、地元の方々から多くなご協力を賜った。また古志本郷遺跡採集石器においては、山根　馨・里司父子両氏が大切に保管されていたところ、快く借用させていただいた。記して感謝いたします。

9. 本書で使用した方位は、磁北を示す。
10. 本書で使用した遺構・遺物の省略記号は、次のとおりである。

S D : 溝状遺構	S K : 土坑	S E : 井戸	P : 柱穴
S X : 性格不明遺構	S : 石器		
11. 本書で使用した遺物番号の左側は挿図番号、右側は同図内の番号を示す。
12. 遺物の写真撮影及び本書の執筆・編集は米田が行ったが、第4章においては同主事坂本農治が石器実測・観察の協力を、第5章においては渡邊正巳氏(文化財調査コンサルタント)から玉稿を賜った。
13. 出土遺物及び実測図・写真は、出雲市教育委員会で保管している。

## 目 次

序	
例　　言	
目　　次	
挿図目次	
写真図版目次	
第1章 位置と環境 .....	1
第2章 調査の経緯と経過 .....	6
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第3章 調査の概要	
第1節 古志本郷遺跡 (1)古志本郷 1 T .....	9
第2節 下古志遺跡 (1)下古志 1 T .....	15
(2)下古志 2 T .....	31
(3)下古志 3 T .....	37
遺物観察表 .....	47
第4章 古志本郷遺跡採集石器 .....	61
第5章 下古志 2 T における微化石分析－渡邊－ .....	62
第6章 まとめ	
第1節 古志本郷遺跡 .....	73
第2節 下古志遺跡 .....	76
写真図版	

## 挿 図 目 次

- |   |  |
|---|--|
| <p>第1図 古志遺跡群と周辺の主要な遺跡</p> <p>第2図 古志遺跡群及びトレンチ配置図</p> <p>第3図 古志本郷1T造構配置図及び上層断面図</p> <p>第4図 SK01~03穴測図</p> <p>第5図 SK04実測図</p> <p>第6図 SK05穴測図</p> <p>第7図 SK06実測図</p> <p>第8図 SK06Ⅰ・Ⅱ期別穴測図</p> <p>第9図 古志本郷1T出土遺物実測図</p> <p>第10図 下古志1T造構配置図及び上層断面図</p> <p>第11図 SD04出土遺物実測図</p> <p>第12図 SX01実測図</p> <p>第13図 SX01出土遺物実測図</p> <p>第14図 柱穴列実測図</p> <p>第15図 柱穴列出土遺物実測図</p> <p>第16図 SD02土層断面図及び遺物出土状況図</p> <p>第17図 SD02層位別造物出土状況図</p> <p>第18図 SD02出土遺物実測図1</p> <p>第19図 SD02出土遺物実測図2</p> <p>第20図 SD02出土遺物実測図3</p> <p>第21図 SD02出土遺物実測図4</p> <p>第22図 SD02出土遺物実測図5</p> <p>第23図 SD02出土遺物実測図6</p> <p>第24図 SD02出土遺物実測図7</p> <p>第25図 SD02出土遺物実測図8</p> <p>第26図 下古志1T造構外出土遺物実測図</p> <p>第27図 下古志2T造構配図図及び土層断面図</p> <p>第28図 SE01実測図</p> <p>第29図 SE01出土遺物実測図</p> <p>第30図 SD04・05出土遺物実測図</p> <p>第31図 SD04・05出土遺物実測図</p> <p>第32図 下古志2T造構外出土遺物実測図</p> <p>第33図 下古志3T造構配置図及び上層断面図</p> <p>第34図 SD03穴測図</p> | <p>第35図 SD03・04・06出土遺物実測図</p> <p>第36図 大溝穴測図</p> <p>第37図 大溝出土遺物実測図</p> <p>第38図 SX01遺物出土状況図</p> <p>第39図 SX01出土遺物実測図</p> <p>第40図 SX02出土遺物実測図</p> <p>第41図 SX04遺物出土状況図</p> <p>第42図 SX04出土遺物実測図</p> <p>第43図 aIxP1実測図</p> <p>第44図 P1~P3・P5・P12出土遺物実測図</p> <p>第45図 下古志3T造構外出土遺物実測図</p> <p>第46図 石器採集地点位置図</p> <p>第47図 古志本郷遺跡採集石器実測図</p> <p>第48図 下古志2T試料採取位置図</p> <p>第49図 No.1地点・No.2地点の花粉ダイアグラム</p> <p>第50図 No.3地点の花粉ダイアグラム</p> <p>第51図 No.1地点の珪藻ダイアグラム・珪藻総合ダイアグラム</p> <p>第52図 No.2地点の珪藻ダイアグラム・珪藻総合ダイアグラムとNo.1地点のプランツ・オーバルダイアグラム</p> <p>第53図 古志本郷1TⅠ期及びⅡ期柱穴跡配置図</p> <p>第54図 古志本郷GIx及び1T柱穴配置図</p> <p>第55図 郡庁建物復元図</p> <p>第56図 下古志遺跡大溝配置図</p> |
|---|--|

表1 下古志遺跡1T~3T検出大溝及び関連大溝一覧表

## 写 真 図 版 目 次

- 卷頭 1 古志本郷 1 T 大型柱穴  
下古志 1 TS002遺物出土状況
- 卷頭 2 下古志 2 T 大溝 (SD04・05)  
下古志 3 T 大溝
- 図版 1 古志本郷 1 T (西) プラン検出状況  
古志本郷 1 T (東) プラン検出状況  
下古志 1 T (c) 中世期武器 プラン検出状況
- 図版 2 下古志 1 T (d・e) プラン検出状況  
下古志 1 T (e・f) 完掘状況  
下古志 1 T (b・c) SD002より下古志 A区 SD28を望む
- 図版 3 F古志 1 T (b・c) SD02A'土層断面  
下古志 1 T (b・c) SD02B-B'上層断面  
下古志 2 T (c・d) プラン検出状況
- 図版 4 下古志 2 T (a) 土手状造築  
下古志 2 T (b) 大溝 (SD04・05) 完掘状況  
下古志 3 T (a) プラン検出状況
- 図版 5 下古志 3 T (a・b) プラン検出状況  
F古志 3 T (b・c) プラン検出状況  
下古志 3 T (c・d) プラン検出状況
- 図版 6 下古志 3 T (d) 大溝土層断面  
古志本郷遺跡石器採集位置  
下古志遺跡上空より古志本郷遺跡を望む
- 図版 7 下古志 1 TS002出土遺物
- 図版 8 古志本郷 1 T から古志本郷 G区を望む  
古志本郷 1 T (東) 完掘状況  
古志本郷 1 T (東) 完掘状況
- 図版 9 古志本郷 1 T (西) 完掘状況  
古志本郷 1 T (西) 完掘状況  
古志本郷 1 T (西) SK05・SK06-II期根石検出状況
- 図版 10 古志本郷 1 T SK06-II期根石検出状況  
古志本郷 1 T SK06-I期完掘状況  
下古志 1 T (b・c) SD02調査状況
- 図版11 下古志 1 T (b・c) SD02 1層-1 遺物出土状況  
下古志 1 T (b・c) SD02 1層-2 遺物出土状況  
下古志 1 T (b・c) SD02 1層-3 遺物出土状況  
下古志 1 T (c・d) SD02 1層-4 遺物出土状況  
下古志 1 T (c・d) SD02 4層遺物出土状況
- 図版12 下古志 1 T (c・d) SD02 1層-5 遺物出土状況  
F古志 1 T (c・d) SD02 7層遺物出土状況
- 図版13 下古志 1 T (c・d) SD02 7層遺物出土状況  
下古志 1 T (c・d) SD02 完掘状況  
下古志 1 T (a) SX01遺物出土状況
- 図版14 F古志 1 T (a・b) 柱穴完掘状況  
F古志 1 T (b) SD01及UP1・P2完掘状況  
下古志 1 T (a) P5~P7完掘状況
- 図版15 下古志 1 T 調査風景  
下古志 1 T (a) SD03・SX01・P3完掘状況  
下古志 1 T (f) SD04完掘状況
- 図版16 下古志 2 T (d) 32-1出土状況  
F古志 2 T (d) SD01完掘状況  
F古志 2 T (c) 完掘状況
- 図版17 下古志 2 T 調査風景  
下古志 2 T (a・b) 完掘状況  
下古志 2 T (a・b) 完掘状況
- 図版18 下古志 2 T (b) 大溝 (SD04・05) 完掘状況  
F古志 2 T (a・b) SD06・SD07完掘状況  
F古志 2 T (a) SD08完掘状況
- 図版19 F古志 3 T (b・c) SD03完掘状況  
下古志 3 T (b・c) SD03露出上状況  
下古志 3 T (c・d) SD04完掘状況
- 図版20 F古志 3 T (d) SD06完掘状況  
下古志 3 T (d) 大溝上層断面  
F古志 3 T (d) 大溝完掘状況
- 図版21 F古志 3 T (a) SX01遺物出土状況  
F古志 3 T (a) SX04遺物出土状況  
F古志 3 T (a) PI遺物出土状況

图版22	古志本部1 T出土遗物(1)正面 古志本部1 T出土遗物(2) 下古志1 TS004出土遗物	下古志1 T 迹槽外出土遗物(4) 下古志1 T 迹槽外出土遗物(5) 下古志1 T 迹槽外出土遗物(6)
图版23	F古志1 TSX01出土遗物(1) 下古志1 TSX01出土遗物(2) 下古志1 TSX02出土遗物(1)	图版31 F古志1 T 迹槽外出土遗物(7) 下古志1 T 迹槽外出土遗物(8) 下古志2 TS001出土遗物
图版24	下古志1 TS002出土遗物(2) 下古志1 TS002出土遗物(3) 下古志1 TS002出土遗物(4) 下古志1 TS002出土遗物(5)	下古志2 T 迹槽外出土遗物(1) 下古志2 T 迹槽外出土遗物(2)正面
图版25	F古志1 TS002出土遗物(6) F古志1 TS002出土遗物(7) F古志1 TS002出土遗物(8)	图版32 下古志2 T 迹槽外出土遗物(3) 下古志2 T 迹槽外出土遗物(4)正面
图版26	下古志1 TS002出土遗物(9) 下古志1 TS002出土遗物(10) 下古志1 TS002出土遗物(11) 下古志1 TS002出土遗物(12)	下古志3 TS003-S004-S006出土遗物正面 下古志3 TS004·大溝出土遗物(1)
图版27	下古志1 TS002出土遗物(13) F古志1 TS002出土遗物(14)正面 底面 下古志1 TS002出土遗物(15)	图版34 F古志3 T 大溝出土遗物(2) 下古志3 T 大溝出土遗物(3)正面 下古志3 T 大溝出土遗物(4) 下古志3 TSX01出土遗物(1)
图版28	F古志1 TS002出土遗物(16) F古志1 TS002出土遗物(17) 下古志1 TS002出土遗物(18) 下古志1 TS002出土遗物(19) 下古志1 TS002出土遗物(20)	图版35 F古志3 TSX02出土遗物(1) 下古志3 TSX02出土遗物(2) 下古志3 TSX04出土遗物(1)正位 下古志3 TSX04出土遗物(2) 下古志3 TSX04出土遗物(3)
图版29	下古志1 TS002出土遗物(21) 下古志1 TS002出土遗物(22) 下古志1 TS002出土遗物(23) 下古志1 TS002出土遗物(24)	下古志3 T 柱穴出土遗物(1)正面 下古志3 T 柱穴出土遗物(2) 下古志3 T 迹槽外出土遗物(1)
图版30	下古志1 T 迹槽外出土遗物(1) 下古志1 T 迹槽外出土遗物(2) 下古志1 T 迹槽外出土遗物(3)	图版37 下古志3 T 迹槽外出土遗物(2) 下古志3 T 迹槽外出土遗物(3) 下古志3 T 迹槽外出土遗物(4) 古志本部遗物采集石器

## 第1章 位置と環境

古志遺跡群は、古志本郷遺跡・下古志遺跡・田畠遺跡などから形成され、出雲平野の南丘陵寄り、神戸川が丘陵部から平野部へ流れ出た左岸に位置する。古志本郷遺跡は神戸川に沿った南北に延びる自然堤防上、下古志遺跡は古志本郷遺跡とは別と考えられるその西側に位置する自然堤防上に所在する。

出雲平野は、斐伊川とこの神戸川による冲積作用によって形成された平野である。約6～5千年前頃の縄文時代から徐々に沖積作用が働き、それによって形成された自然堤防、その後背湿地となる沼沢地が至る所に広がった景観は、風土記の時代までも続いているようである。

縄文時代から弥生時代にかけて急激な沖積作用により、早くから自然堤防の発達していた矢野遺跡では、平野中央部では希である縄文時代後・晩期から集落が形成され、古墳時代初頭まで連続として遺跡が続いている。そこから南に位置する蔵小路西遺跡では縄文時代晩期の生活跡が見つかっている。そのまた南に位置する菅行寺遺跡からは旧河河道らしき跡から縄文時代晩期の遺物が出土している。また海岸砂丘上に立地している上長浜貝塚からは縄文時代早期末の遺物が出土しており、丘陵部に位置する三田谷I遺跡からも縄文時代後・晩期の遺物が出土している。また三田谷I遺跡では平成9年度調査で、縄文時代後期の丸木舟が埋没湖沼から検出されている。

弥生時代前期の様相は今ひとつ不明であり、矢野遺跡・三田谷I遺跡といった縄文時代から続く遺跡から、また神戸川左岸に立地する古志本郷遺跡<sup>31</sup>・田畠遺跡・浅瀬遺跡、斐伊川左岸に立地する中野美保遺跡・中野西遺跡<sup>32</sup>などから若干の遺物を確認しているに過ぎない<sup>33</sup>。

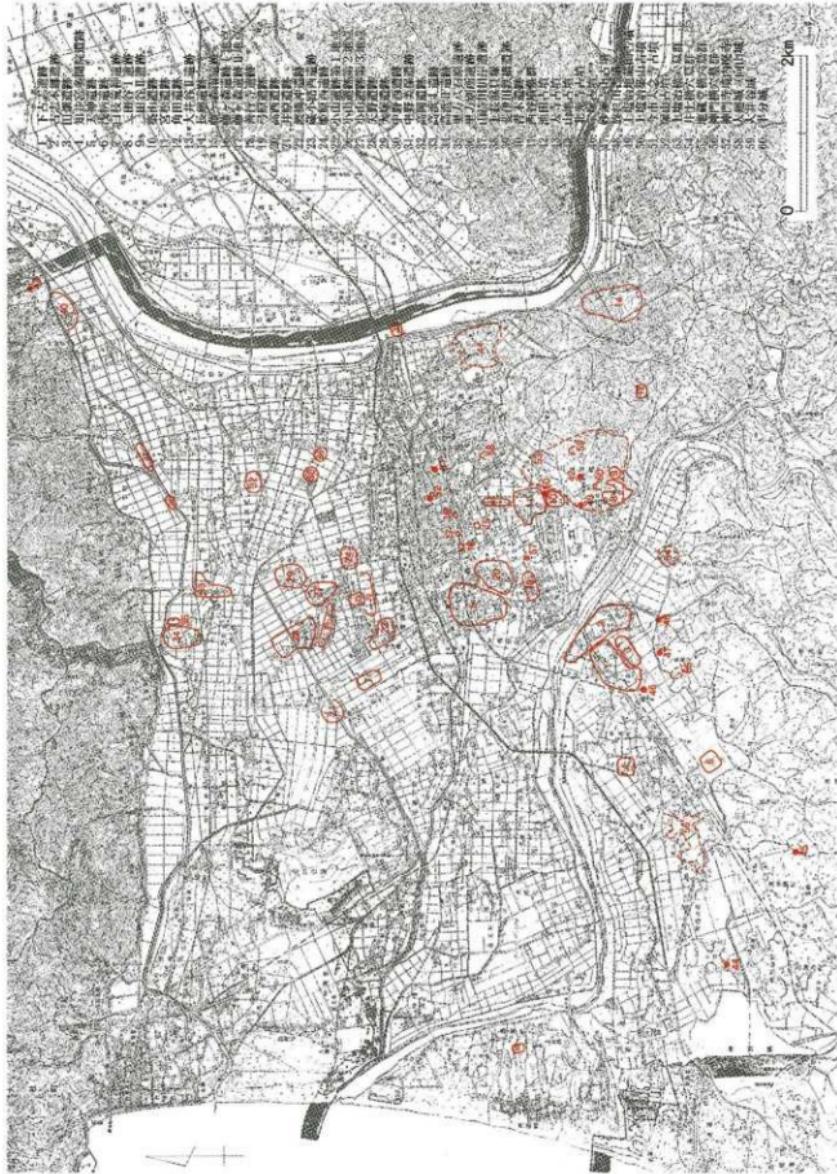
出雲平野に遺跡が急増するのは弥生時代中期中葉からである。自然堤防上に立地する古志本郷遺跡・下古志遺跡・田畠遺跡・知井宮多聞院遺跡・天神遺跡・白枝荒神遺跡などは、ほぼ同時期から集落を営んでいる。中でも、古志本郷・下古志・田畠・犬神遺跡では多重環濠集落の様相を見せ、出雲平野における集落の在りように一石を投じている。また斐伊川左岸標高40mの丘陵地で発見された長廻遺跡は低地に多くの集落が営まれている時に、問題提起をする遺跡として存在する。また後背湿地に立地する藤ヶ森南遺跡ではほぼ同時期の水田跡を検出している。

弥生時代後期後葉、西谷丘陵に築かれた四隅突出型墳丘墓は<sup>34</sup>、この出雲平野に巨大な権力者の存在を、また権力者を中心に集落が発展してきたであろうことを想像させる。

これらの遺跡に連れて集落を築くのは、山持川川岸遺跡・姫原西遺跡などである。しかし前記した集落も後記した集落も、一部を除き古墳時代初頭にはほぼ姿を消してしまう。

これ以後の出雲平野は前期末に大寺古墳・山地古墳、中期に北光寺古墳・池田古墳・西谷15・16号墓など、築かれた古墳は少ない。このように一時衰退したかのように見えた出雲平野も、後期になると今市大念寺古墳・妙蓮寺山古墳・上塩治築山古墳などの大型古墳を含む多数の古墳・横穴墓が築かれるようになる。

この時期の集落としては古墳時代前期に入ると、先に姿を消した集落とは立地を異にして新たな集落が築かれる。欠野遺跡の西に位置する井原遺跡<sup>35</sup>、斐伊川左岸に立地する中野西遺跡などである。



第1図 古志遺跡群と周辺の主要な遺跡

中期には、三田谷Ⅰ遺跡の丘陵部分、出雲平野西部の浅柄遺跡で集落が営まれる。

律令期の出雲平野は、天平5年(733)に作成された「出雲國風土記」に記載されているように、島上山より西流して神門水海に入る「出雲大川」即ち斐伊川と、琴引山より流れ神門水海に入る神戸川に挟まれた肥沃な土地に恵まれる。神門水海は現在の高松・長浜地区周辺を覆う地域を占し、「齒の松山」とよばれた「圓の長浜」によって潟湖を形成していた。弥生時代中期に集落が急激に増加したのは、このような肥沃な土地が現れたためであろう。低湿地である高岡遺跡・藤ヶ森南遺跡・中野美保遺跡<sup>注1</sup>からは、水田跡が検出されている。

出雲平野は「出雲國風土記」によると、神門郡と出雲郡にあたる。神門郡家に比定されているものには、墨書き土器・縁釉陶器・円面鏡・腰帶の金具・大型掘立柱建物跡群などを検出した古志本郷遺跡、墨書き土器・縁釉陶器・大型の掘立柱建物跡などを検出した天神遺跡などがある。また神門寺境内廃寺は神門郡新造院の、矢野遺跡は八野郷の比定地である。

中世には、鳴ヶ堀城・大廻城(向山城跡)・大井谷城・半分城などが築城されたほか、平野部では、矢野遺跡・蔵小路西遺跡・渡橋沖遺跡・下古志遺跡などで館跡が検出され、当時の状況が明らかとなりつつある。また平野部から谷奥深い大井谷Ⅱ遺跡では、寺院関連の遺跡ではないかと考えられる遺構・遺物が検出されている。

注1 島根県教育委員会で調査したG区検出溝状遺構から、平成11年12月指導会中に出土したのを同行していた筆者も実見した。

注2 平成12年度出雲市教育委員会により発掘調査を行った。

注3 出雲市教育委員会により今年度(平成13年度)発掘調査中の角田遺跡では、弥生時代前期後半の溝状遺構(幅3m、調査長6m)が検出された。また古墳時代末～平安時代の溝状遺構からも前記土器が数点出土しており、周辺に弥生時代前期の集落が存在する可能性が考えられる。角田遺跡は南丘陵が平野部へ延びた先端に立地しており、早くから地盤が安定していたと考えられる。

注4 島根県教育委員会により今年度(平成13年度)調査中の中野美保遺跡から、低湿地に小型(復元長15×13m)の四隅突出型埴丘墓が発見された。

注5 平成12・13年度出雲市教育委員会により発掘調査を行った。

注6 島根県教育委員会により今年度(平成13年度)調査中の地点で水田跡が検出されている。

## 参考文献

出雲市教育委員会編

『出雲市遺跡地図』1993

『遺跡が語る古代の出雲—出雲平野の遺跡を中心として—』1997

西尾克己・大國晴雄『出雲平野の古墳』『出雲市民文庫9』1991

『出雲市天神遺跡』1972

川上 稔『古志地区遺跡分布調査報告書』1988

川上 稔『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』1989

川上 稔・湯村 功・松山智弘『簸川南地区広域営農地地農道整備事業に伴う 沢谷15・16号墓発掘調査報告書』1993

川上 稔『古志本郷遺跡』『出雲市埋蔵文化財調査報告書 第4集』1994

岸 道三『善行寺遺跡』『出雲市埋蔵文化財調査報告書 第7集』1997

川上 稔・松山智弘『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う 矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』1991

川上 稔『上長浜貝塚』1996

川上 稔『山持川川岸遺跡』1996

川上 稔・岸 道三・米田美江子『出雲市駅付近連続立体交差事業地内 天神遺跡第7次発掘調査報告書』1997

米田美江子・三原一将『山遺松寄下小山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 白枝荒神遺跡』1997

松山智弘『市道本郷新宮線道路改良工事に伴う 古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』1998

岸 道三『JR山陰本線・私鉄一畑電鉄連続立体交差事業地内 藤ヶ森遺跡(I地点・II地点)発掘調査報告書』1997

藤永照隆『西谷墳墓群測量調査報告書』1998

米田美江子『出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 藤ヶ森南遺跡』1999

米田美江子『堺治299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 三田谷I遺跡』2000

三原一将『出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高岡遺跡』2000

三原一将『市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田畠遺跡』2000

園山 薫『西出雲駅南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 浅柄遺跡』2000

藤永照隆『西谷墳墓群—平成10年度発掘調査報告書—』2000

坂本豊治『中野美保遺跡』『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集』2001

米田美江子・三原一将『一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下古志遺跡』2001

速藤正樹『大井谷II』『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書III』2001

高根郡教育委員会編

足立克己『姫原西遺跡』『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1』1999

間野大丞『藏小路西遺跡』『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2』1999

大庭俊次『渡橋沖遺跡』『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告3』1999

今岡一三『三田谷I遺跡(VOL. 1)』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』1999

熱田貴保『三田谷I遺跡(VOL. 2)』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』2000

鳥谷芳雄『三山谷I遺跡(VOL. 3)』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VII』2000

平石 光『古志本郷遺跡I』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VIII』1999

勝部智明『古志本郷遺跡II』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX・X』2001

平石 充「長瀬遺跡」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X II』2001

「斐伊川放水路 発掘物語 P A R T 5」1999

「斐伊川放水路 発掘物語 P A R T 6」2000

「はるる～とQ 2 No. 2」2001

「はるる～とQ 2 No. 3」2001

中野美保遺跡 現地説明会資料

#### 参考文献

加藤義成『修訂 出雲國風土記研究』1981

「西谷墳墓群」「古代の出雲を考える」1980 出雲考古学研究会

「山陰平野の集落II－矢野遺跡とその周辺-」「古代の出雲を考える5」1986 山陰考古学研究会

山中義昭ほか「矢野遺跡の研究」「山陰地域研究 第3号」1987 島根大学山陰地域総合センター

山中義昭ほか「矢野遺跡の発掘調査」「研究成果報告書」1989

渡邊貞平ほか「西谷墳墓群の調査(1)」「山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究」1992 島根大学法文学

部考古学研究室

## 第2章 経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

出雲市教育委員会では平成7～9年度(1995～97)にかけ、一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴い予定地内の発掘調査を行った<sup>21</sup>。その結果、A・D～F区より弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の集落を閉むと考えられる大溝(環濠)が何条も検出された。折しも、加茂岩倉遺跡(加茂町)からほぼ同時期の銅鐸が発見され、加茂岩倉遺跡に関わりを持つ拠点集落として、注目を浴びることとなった。

出雲平野では、天神遺跡第7次調査において既に環濠と考えられるような大溝を数条検出しているが、大溝が埋没した時期の遺構が全く検出されておらず、その位置づけは不鮮明である。これに比べ、下古志遺跡の大溝は、A区では北東から南西方向に延び、そこから300m東方に位置するD～F区では北西から南東方向に延びるためと、B・C区で空白地帯を有するため、A区とD区で検出された大溝は一連の溝状遺構で、繋がることが想定された。

下古志遺跡の周辺地域は現在水田耕作地帯であり、開発による宅地化が進む前に、下古志遺跡環濠集落としての範囲確認調査を行うことは必須の課題となった。

古志本郷遺跡は、弥生時代集落として周知の遺跡であったが、島根県教育委員会が斐伊川放水路建設事業に伴って平成7年度(1995)から行っている発掘調査<sup>22</sup>で、今まで全く調査の手が入っていなかった遺跡北部地域でも調査が行われた。その結果、平成10年度(1998)に調査されたG区からは、奈良時代の楕円柱穴直径1mの柱穴で構成された柱間3mの大型建物跡2棟(I・II期)が検出され、墨書き器・円面鏡・腰帶金具などの出土遺物などからも検討がなされ、神門郡家の郡庁跡の一角である可能を示唆され<sup>23</sup>、遺跡は神門郡家の比定地として急浮上した。

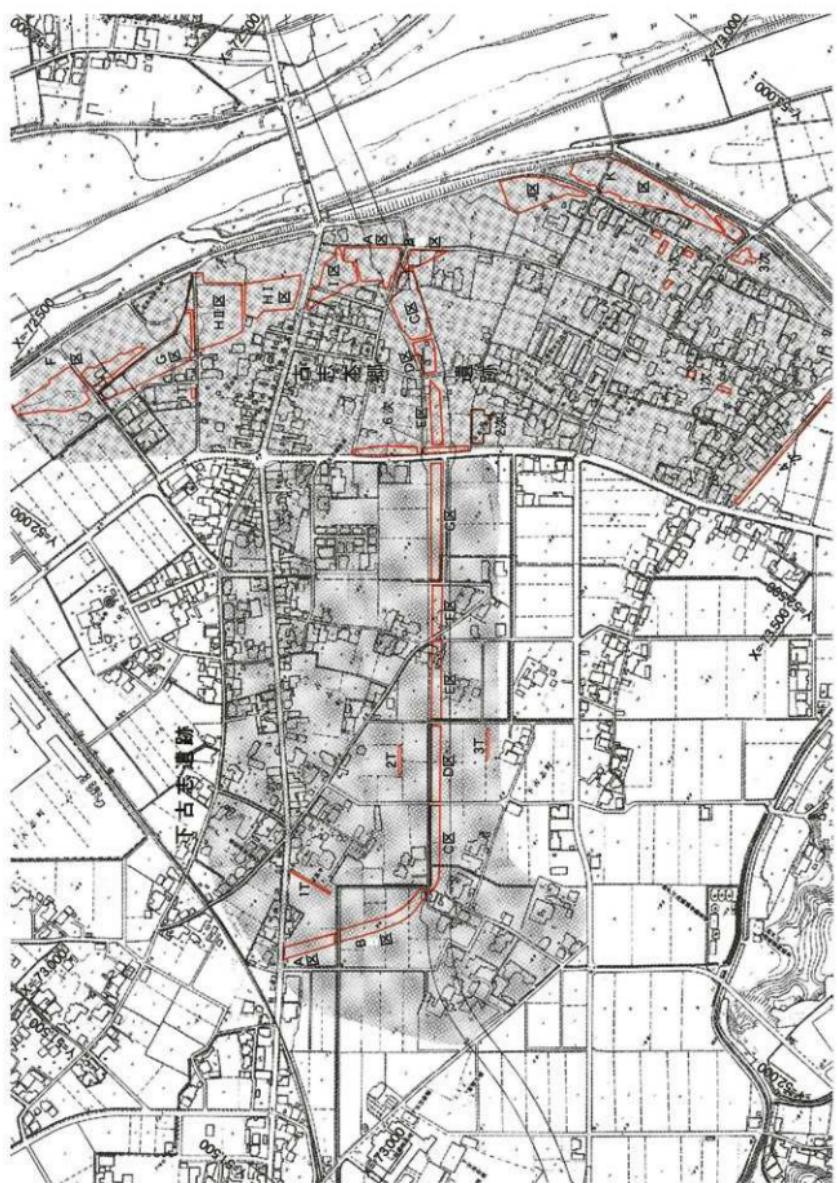
郡庁跡は、調査区範囲外へと延びており、対角を確認することが必須の課題となった。地域郷土史家の方々からの要望もあり、平成11年度(1999)の国庫及び県費の補助金による学術調査は、これら2遺跡の範囲確認調査を行うこととなった。

### 第2節 調査の経過

調査は、水田耕作地を借用する関係で、稲の刈り入れが終了した秋から冬にかけて行うこととした。土地所有者の方々から、快い承諾を得、平成11年(1999)11月10日から古志本郷1Tより取り掛かった。島根県教育委員会調査G区の南西約40mに17×5mのトレンチを設定し、排土捨て場の関係上東半分をまず着手した。郡庁跡と考えられるような柱穴は検出できず、埋め戻し、12月14日から西半分に着手した。その結果、直径150cm前後、深さ70～90cmを測る奈良時代の柱穴が3基(SK04～06)検出できた。調査を進めるとそのうちの1基(SK06)は2基の柱穴が重複したものであることが判明した。

島根県教育委員会調査G区で検出された2棟の大型建物跡の一端であることを確認し、埋め戻しをして、平成12年(2000)1月20日終了した。

下古志1Tは、11月17日に下古志遺跡A区の東約80mに1×60mのトレンチを設定し、古志本郷1T



第2図 古志遺跡群及びトレンチ配置図（6千分の1）

と平行して調査を開始した。大きなプランが確認できる箇所は部分的に幅を広げた。その結果、北東から南西方向に延びる幅280cmの弥生時代終末期の溝状遺構(S D 0 2)が検出できた。溝の延びる方向を確認するため、プランはトレント幅を1m広げ2mで確認したのち、トレント幅1mのみを掘り下げた。断面V字状を呈する深さ130cmを測る溝であることが判明した。溝の方向及び形態などを考慮すると、下古志遺跡A区出土の大溝(S D 2 8)と繋がると考えられ、この大溝は、北東—南西方向に100m近く延びることが確認できた。

S D 0 2からは6コントラクション分もの土器が出土したため、平成12年1月12日までかかり埋め戻して終了とした。

下古志2Tは、古志本郷1T・下古志1Tの掘り方に目途の立った12月2日に下古志遺跡D区の北約60mに1×37mのトレントを設定し、調査を開始した。その結果、西半部の後世の窪み地の下位から、北西から南東方向に延びる幅380cmの溝状遺構(大溝)が検出できた。掘り下げると深さ75cm残存しており、断面はW字状を呈する。溝の方向及び形態などを考慮すると、下古志遺跡D区出土の大溝と繋がると考えられる。平成12年1月14日に埋め戻して終了とした。

下古志3Tは、平成12年1月12日下古志1Tを埋め戻し後、下古志遺跡D区の南約50mに1×40mのトレントを設定し、調査を開始した。その結果、東寄りから、北西から南東方向に延びる幅300cmの溝状遺構(大溝)が検出できた。掘り下げると断面逆台形を呈する深さ120cmを測る溝であることが判明した。溝の方向及び規模などを考慮すると、下古志遺跡D区出土の大溝と繋がると考えられ、この大溝は、北西—南東方向に約120m延びることが確認できた。2月10日埋め戻し、全調査を終了させた。

注1 詳細は、「一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下古志遺跡」2001年を参照されたい。

注2 詳細は、「古志本郷遺跡I」と「II」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI」と「X I」1999・2001を参照されたい。

注3 島根県教育委員会「斐伊川放水路 発掘物語 PART 5」1999

## 第3章 調査の概要

### 第1節 古志本郷遺跡

#### (1) 古志本郷1T (第3~9図)

当該トレーンチは、駐車場として利用されていた場所で、表面には10~20cm厚さでバラスが敷き詰めてあった。東側半分はその上に盛土をして作られた花壇があり、花の移植も行った。バラス層下には10~20cm厚さの2層(暗褐色灰土)が堆積し、その下から黄褐色砂の地山及び包含層である3層(暗灰褐色土)、5層(暗褐色土)が確認された。

東側半分では、N-65°-E方位に浅くだらだらと延びる幅1.2~2.0mの溝状の落ち込みが、古い造構を切っており、2層が堆積している。壁面が自然消滅しているため、詳細は不明であるが、出土する遺物が近現代の陶磁器類である。またほぼ同時期の柱穴状の落ち込みが数基この溝状の落ち込みを切って存在する。

西側半分では、調査区中央N-60°-E方位に検出長6.4m、幅1.8m、深さ40~50cmの平面長方形を呈し、東側の立ち上がりが二股に分かれているSX01が存在し、古い造構を切っている。底には敷き固めたような約10cm厚さの締め固められて堅い⑤層(褐色灰土)が堆積している。出土遺物は、前記した東側半部から検出された2層堆積の溝状の落ち込みと同じく近現代の陶磁器類であるが、後述する造構を切っているため朱塗りを施した土師器の壺の小破片、須恵器の鉢の破片なども混入している。

以上の近現代の落ち込みの下から、次の造構が検出された。以下、主な造構の詳細と出土遺物について述べる。

#### S K 0 1 (第4図)

トレーンチ東寄り中央、標高8.4m強で検出した。上位及び西端は、前記した2層溝状落ち込みにより切られている。平面長楕円形を呈し、長径2.6m、短径0.8m、最深75cm(底面標高7.65m)を測り、N-75°-Eに位置する。縦断面図より、東寄りの底面と2段掘り状となる東隣の平坦面の2回を底面とする柱穴の堀方と考えられる。平面形が長楕円形を呈するのは、柱を建てる時に斜めに入れ込むため、または柱を抜き取る時に斜めに柱を倒したため、このような堀方が残ったものと考えられる。

出土遺物は皆無で、時期は特定できない。

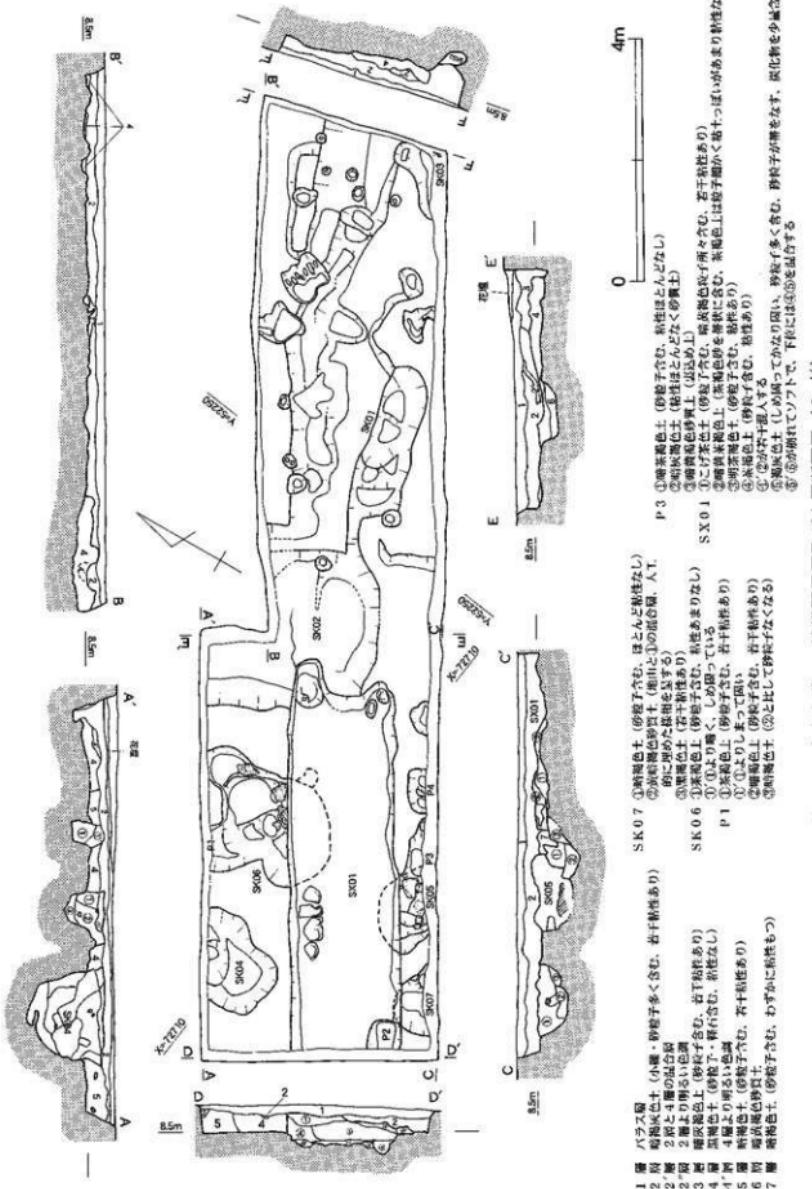
#### S K 0 2 (第4図)

トレーンチ中央北寄り、標高8.7mで検出した。SX01及び2層堆積溝状落ち込みに切られ、北側は調査区外へと延びるため、平面形態は不明である。検出長2.8m、幅2.5m、深さ30~60cm(底面標高8.1m)を測り、軸はN-30°-Wに位置する。南側は立ち上がり、北側へ一段と高くなつて延びていく。

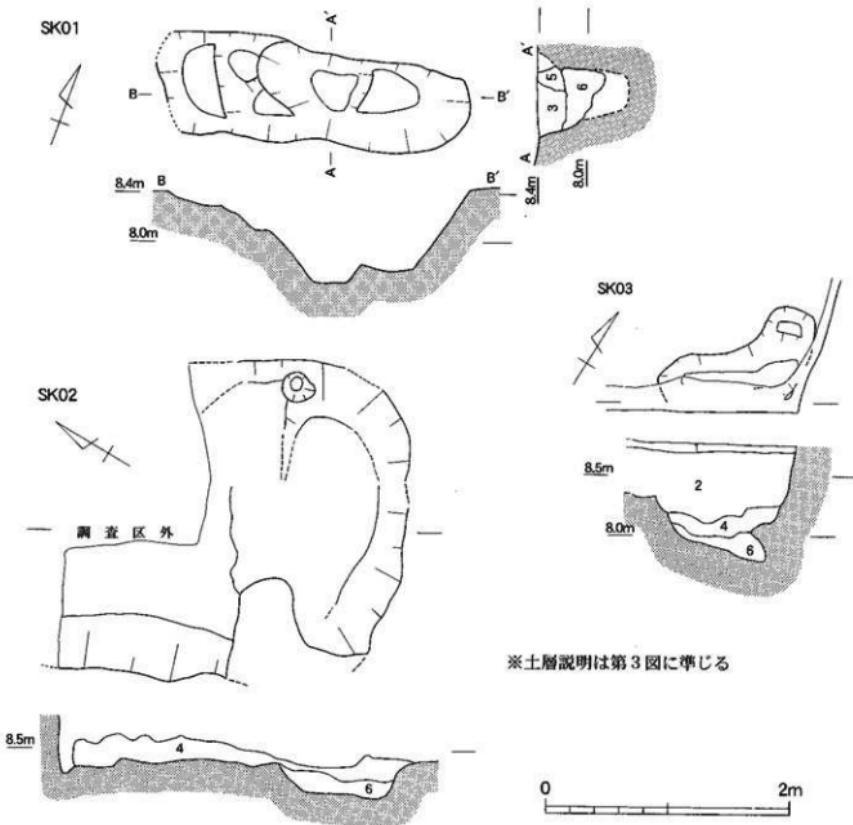
出土遺物は皆無で、時期は特定できない。

#### S K 0 3 (第4図)

トレーンチ東南コーナー、標高8.2mで確認した。上半は2層に破壊され、下半が検出された状況であった。また半分以上が調査区外へと延びるため詳細は不明であるが、土坑状を呈している。検出長1.1×0.7m、検出深45cm(底面標高7.8m)を測る。



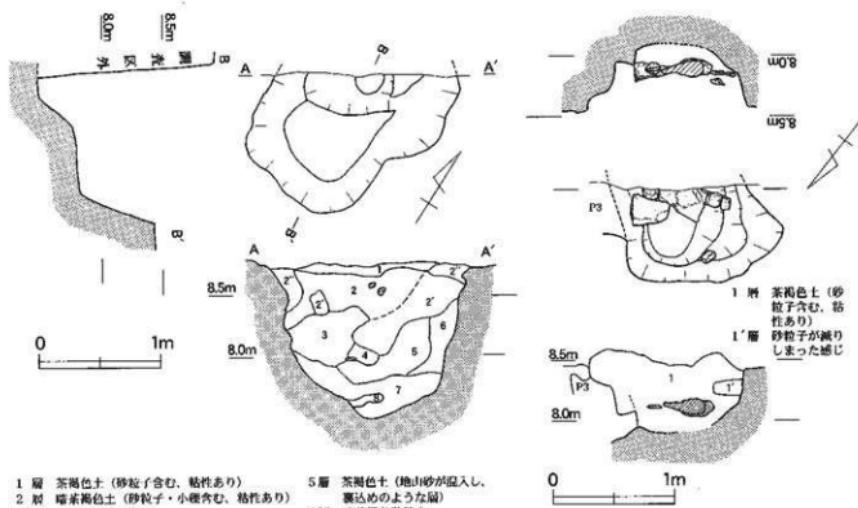
第3図 古志本郷1丁遺構配置図及び土層断面図 ( $S = \%$ )

第4図 SK01～03実測図 ( $S=1\%$ )

出土遺物は、土師器小皿と考えられる口縁部の小破片が1点のみである。淡橙黄褐色を呈し、粉っぽい胎土である。中世の遺構であろう。

#### SK04 (第5図)

トレンチ北西、標高8.8mで検出した。北側は調査区外へと延びるが、平面楕円形を呈すると考えられ、検出長1.4×1.1m、検出深1.25m（底面標高7.5m）を測る。平面形態からは中央底面に柱を据えたものと考えられ、大きな堀方を掘って柱を据えたものか、または柱を抜き取る時に大きな堀方を掘ったものかは不明である。5層は地山砂混入土、6・7層は砂質土である堆積状況から、柱を抜き去った後、人工的に埋め戻されたものと考えられる。



第5図 SK04実測図 (S=1/100)

第6図 SK05実測図 (S=1/100)

出土遺物は、弥生土器の小破片1点と土師器壺の小破片1点のみである。前者は混入したもので、後者は、朱塗りを施し、胎土の粉っぽい土器である。奈良・平安時代の遺構と考えられる。

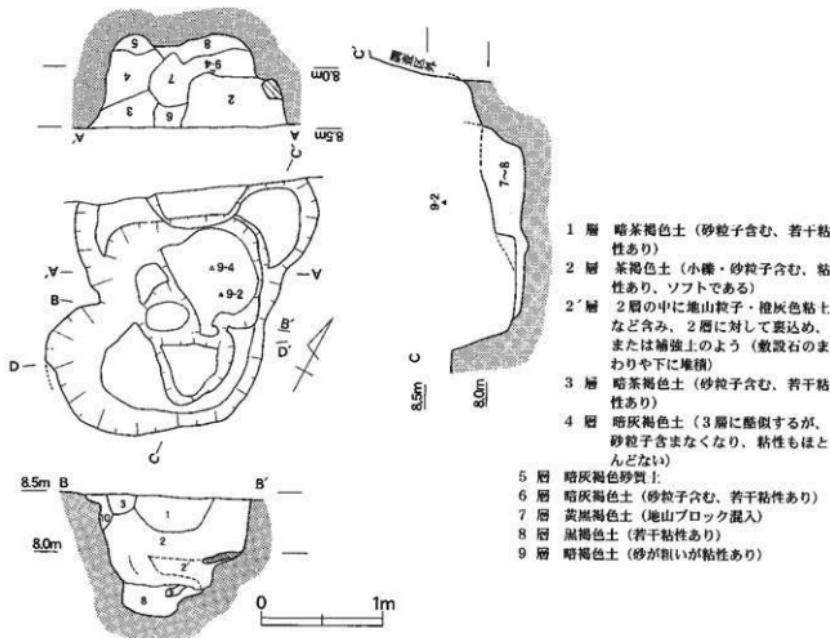
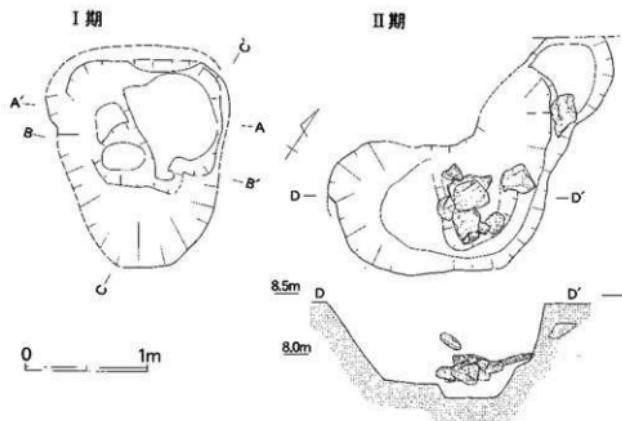
#### SK05 (第6・9図)

トレンチ南西、標高8.5mで検出した。北側はSX01に上位を切られ、東側はP3との重複のため不明となり、南側は調査区外へと延びるが、平面梢円形を呈する考えられる。検出長1.3×0.8m、検出深60cm（底面標高7.9m）を測る。遺構中央部分で平石を検出した。上面8.2mレベル、下面8.0mレベルにはば合わせて敷設したものである。南側調査区外へと広がるが、柱の根石と考えられる。

出土遺物は、土師器の高台付き壺の破片1点（9-1）のみである。形骸化した高台で、底面以外に朱塗りが施してあり、胎土は粉っぽい。奈良・平安時代の遺構と考えられる。

#### SK06 (第7～9図)

トレンチ北西、標高8.5mで検出した。南側はSX01に上位を切られ、北側はP1に切られ、北側東は調査区外へと延びるが、平面長梢円形を呈する。検出長2.7×1.4m、深さ1.0m（底面標高7.45m）を測る。当該遺構は、土層断面A-A'を観察すると2層が3～8層部分を切っている状況を呈し、2層底面に角石が出土しているのがわかる。これはふたつの遺構が重複していると判断できる。また遺構南東部分で上面7.9～8.0mレベル、下面7.8～7.9mレベルに敷設された角石を検出した。先記したやや北側で検出した角石1点は、敷設角石の方向へ傾斜して出土しているので、これらから移動したもの

第7図 SK06実測図 ( $S=1\%$ )第8図 SK06 I・II期個別実測図 ( $S=1\%$ )

のと考えられる。

以上より当該遺構は、角石を底面とする新しい遺構と最終掘り込みを底面とする古い遺構の重複遺構であると判断した。区分するときは、古い遺構をSK06-I期、新しい遺構をSK06-II期と記する。

第8図にはSK06-I期・SK06-II期の平面図を掲載した。SK06-I期は復元想定径1.8×1.5m、深さ1.0m（底面標高7.45m）を測り、N-33°Wに軸をもつ。SK06-II期は長軸2.5m、短軸0.7~1.1m、深さ85cm（底面標高7.65m）を測り、角石敷設付近でほぼ南北軸からN-33°Wへ逆L字状に屈曲する。それぞれ最深部と敷設角石に位置する柱穴痕と考えられ、敷設角石は柱の根石と思われる。

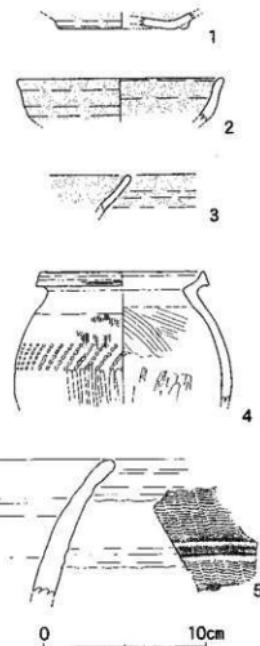
出土遺物は、弥生土器3点、須恵器の小破片4点、朱塗りを施した胎土が粉っぽい土師器の坏8点である。そのうち実測可能なものの3点(9-2~4)を掲載した。弥生土器は、I期裏込め土と考えられる層位から出土しており混入品である。須恵器及び土師器はB-B'ラインより南半部からの出土がほとんどで根石付近のレベルから上位出土であり、II期の遺物であると考えられる。I・II期ともに奈良・平安時代の範疇であろう。

また前記してきたSK04は深い掘り込みをもつ柱穴、SK05は礫を敷く柱穴であることと、出土遺物も同じであることより、SK04とSK06-I期、SK05とSK06-II期は同様の建物を成す柱と考えられる。

#### その他の遺構・遺物（第3・9図）

トレチ南東に位置するSK07・P2・P3、SK06を切るP1などはややしっかりした遺構ではあるが、出土遺物もほとんどなく詳細は不明である。ただしSK07の1層がSK06の2層と同一層の可能性があり、SK07はSK06-II期の補足的な柱穴の可能性もある。

9-5は遺構外出土遺物で、トレチ東半部の2層より出土した須恵器壺の口縁部である。



第9図 古志本郷1T出土遺物実測図(S=1/3)  
(1 : SK05  
2~4 : SK06  
5 : 遺構外)

## 第2節 下古志遺跡

### (1) 下古志1T (第10~26図)

当該トレチは北から10m単位で便宜上a~f区と区分けして調査を行った。

当該トレチは正蓮寺直ぐ脇の水田耕作地で、地表面から15~25cmの現耕作土(1層)が堆積し、その下には旧耕作土である2層、その金床土と考えられる3層が堆積している。その下に遺物包含層である4~6層が堆積し、これらを切るか切られるかで新旧の遺構を確認することが可能である。

c·d区にかけて遺構の空白地帯があるが、4層を覆土とした(第10図B-B'土層断面)南北方向に併走する何本かの細い溝状遺構(図版1)を確認している。中世期の畠跡跡と考えられる。d~f区北半部はプラン及び土層断面のみを確認して調査を終えた。

以下、主な遺構の詳細と出土遺物について述べる。

#### S D O 1 (第10図)

b区、標高8.2mで検出した溝状遺構で、P1·P2を切っている。検出長5.0m弱、幅20~35cm、深さ5cm強~15cm強(底面標高8.15~8.05m)を測り、N-12°-Eの方向で南から延びるがP1付近ではほぼ南北に湾曲し、P2を切りながら東へ屈曲し、調査区外へと延びていく。

出土遺物は、弥生土器の小破片数点と土師器の小破片が10点程で、前者は混入品と考えられる。土師器壺の破片には、胎上が堅緻で粉っぽく朱塗りを施すものがみられる。奈良・平安期と考えられる。

#### S D O 3 (第10図)

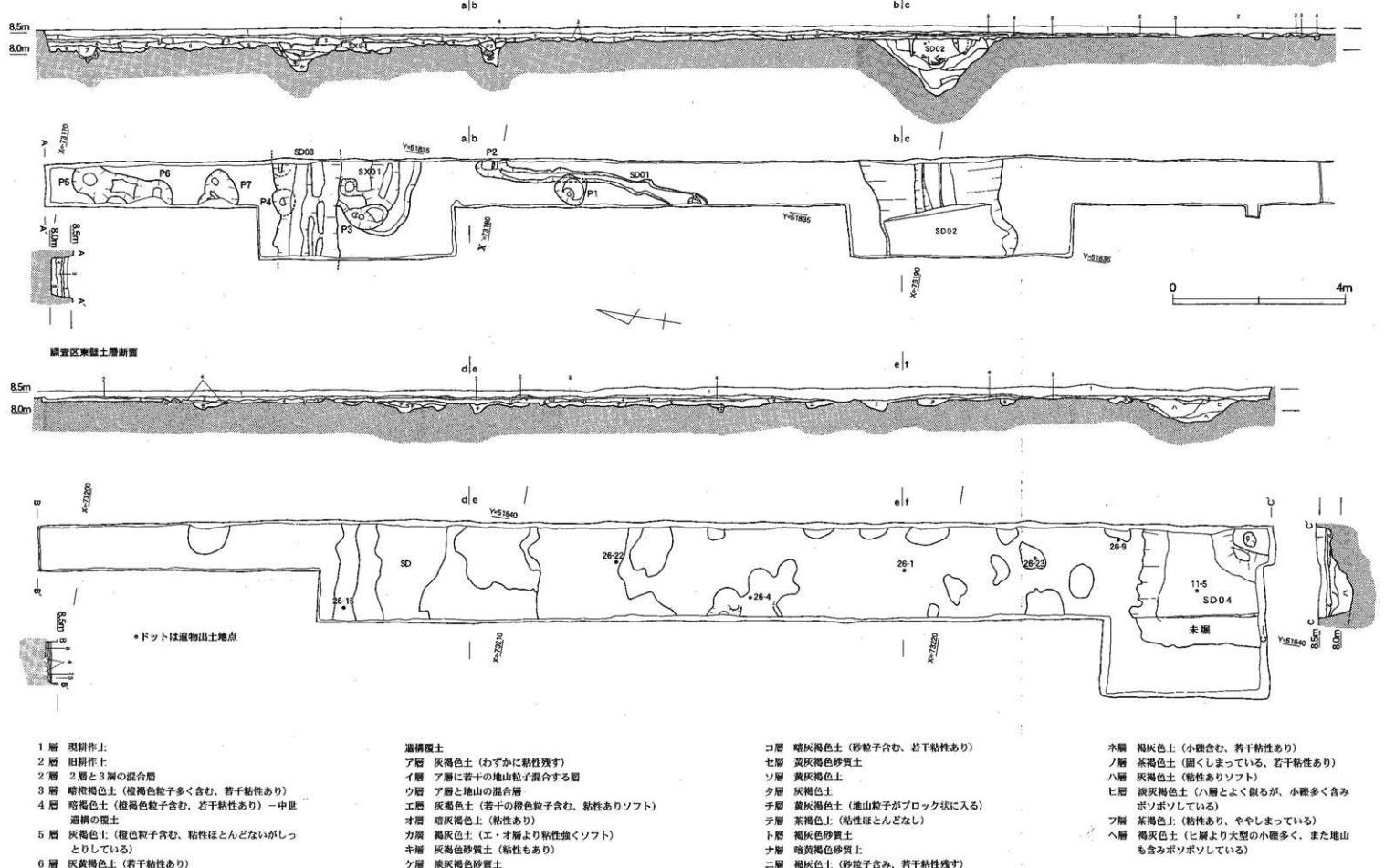
a区、標高8.2m弱で検出した溝状遺構で、南に位置するS X 0 1 及び北側に位置する柱穴を切っている。検出長2.15m、検出幅1.3~1.6m、底面幅25~30cm、深さ65cm(底面標高7.55m)を測り、ほぼ東西に延びている。北側は急傾斜の立ち上がりを呈するが、南側は段をもつため、断面南広がりの逆台形状を呈する。上半部と下半部とで堆積状況が異なっている。上半部は粘性のある若干ソフトな土層、下半部は砂質土である。湧水はしなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器・弥生土器の小破片が1袋分で、実測可能なものは皆無である。後者は重複しているS X 0 1からの混入品と考えられる。土師器壺の破片には、朱塗りの痕跡がみられるもの、底部糸切りのものがあり、須恵器壺蓋にはかえりのあるものがみられる。以上より奈良・平安期と考えられる。

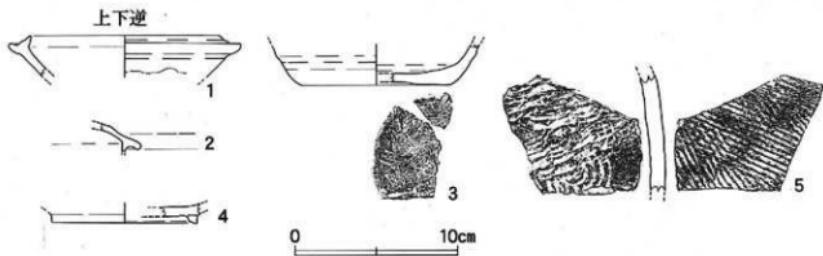
#### S D O 4 (第10·11図)

f区、標高8.25m強で検出したL字状を呈する溝状遺構である。それぞれがほぼ東西南北に位置し、調査区外へと延びていく。便宜上南北に延びる溝をN溝、東西に延びる溝をE溝と明示する。N溝検出長2.75m、E溝検出長2.6m、N溝検出幅2.2m、E溝検出幅2.05m、N溝底面幅70cm以上、E溝底面幅1.0m、深さ50cm(底面標高7.75m)を測る。立ち上がりは緩やかで底面も幅広の、断面逆台形状を呈する。覆土は、全体に砂粒子・小礫・軽石を含み、ボンボソした層と粘性のあるソフトな層に分かれ、上面の層は固く締まっている。

出土遺物は、須恵器・土師器・古式土師器が1袋分で、後者は混入品と考えられ、付近に同時期の遺構があったものと想定される。土師器壺の破片には、朱塗りの痕跡がみられるもの、底部糸切りのものがあり、須恵器壺蓋(11-1·2)にはかえりのあるものがみられる。以上より奈良・平安期と考え



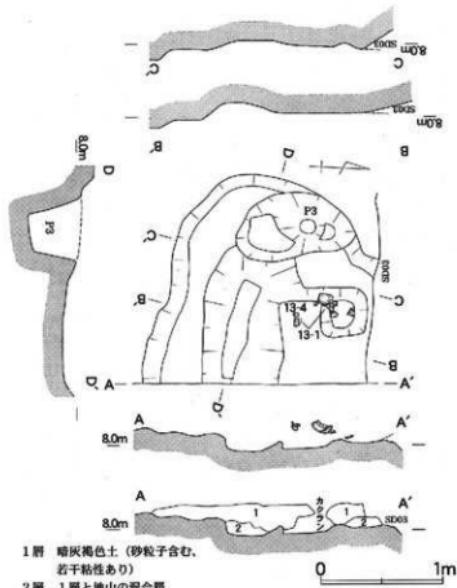
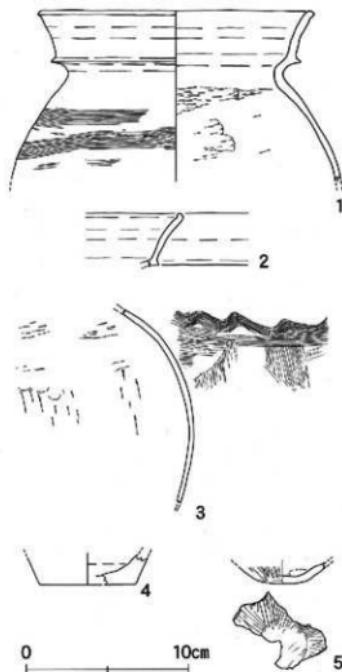
第10図 下古志 1 T 遺構配置図及び土層断面図 (S=%)

第11図 SD 04出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )

られる。

#### S X 0 1 (第12・13図)

a区、標高8.2mで検出した性格不明の遺構である。北側でSD 03に切られ、P 3に一部を壊され、東側が調査区外へと延びる。中央が軸に沿って窪んだ浅鉢状を呈している。検出長1.75m、検出幅1.95m、深さ25cm(底面標高7.95m)を測り、N-77°-Wに位置する。ただし、SD 03に切られる直前に西壁が北

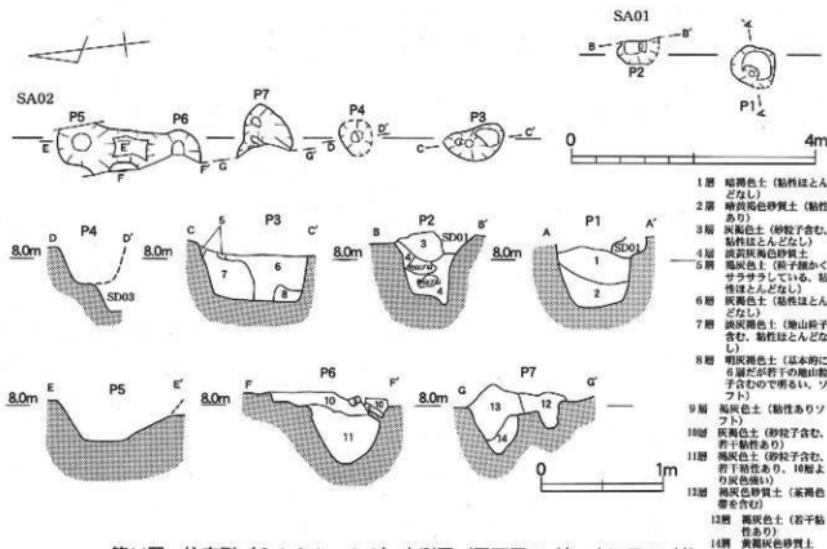
第12図 SX 01 実測図 ( $S=1/3$ )第13図 SX 01 出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )

へ方向を変えており、平面形態は若干北へ膨らみをもつ亜な楕円形を呈すると考えられる。

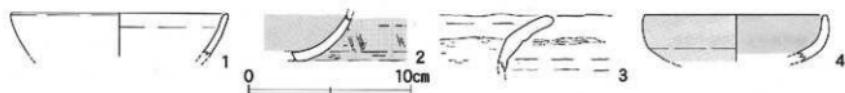
S D 0 3 寄りに掘り方底面からは浮いているが、古式土師器が若干固まって出土した。他の出土遺物は、同様な古式土師器破片が小袋1袋分である。ほぼ2個体の壺(第13図)<sup>註1</sup>の破片を中心に若干別個体のものが含まれている。

#### 柱穴列(第14・15図)

a・b区、ほぼ標高8.2mで検出した柱穴跡が列をなした遺構である。P 1はS D 0 1に切られ平面円形を呈し、直径70cm、深さ60cm(底面標高7.6m)を測る。P 2はS D 0 1に切られ平面円形を呈し、直径60cm、深さ50~55cm(底面標高7.7~7.65m)を測る。P 3はS X 0 1を切り平面楕円形を呈し、直径55×85cm、深さ55cm(底面標高7.65m)を測る。P 4はS D 0 3に切られ平面形態は不明、直径60cm以上、深さ40cm(底面標高7.8m)を測るが、他の柱穴に比較すると底面レベルが高いため、底面とした面はP 3と同様なステップ面の可能性がある。P 5・P 6は検出当初溝状を呈した布掘りで、長さ2.3m、幅75cmを測る。それぞれ楕円形を呈し、P 5は直径80×100cm、深さ45cm(底面標高7.75m)、P 6は直径85cm、深さ70cm(底面標高7.5m)を測る。P 7は平面楕円形を呈し、直径60×80cm、深さ60cm(底面標高7.6m)を測る。



第14図 柱穴列(SA01・02)実測図(平面図S=1%, 立面図S=1%)



第15図 柱穴列出土遺物実測図(S=1%) (1・2:P1, 3:P2, 4:P3)

南に位置するP1・P2を結んだものをSA01、北に位置するP3～P5(P3～P7)を結んだものをSA02とするとSA01・SA02はほぼ南北に軸を揃え、平行する。SA01・SA02間は約1.6mを測る。SA01のP1・P2間は約2.0mを測るが、SA02のP3～P5間は約6.4mで平均間隔距離は1.6mである。P4の柱痕がSD03の中ほどにくると仮定すると、ほぼ等間隔の1.6mとなる。

出土遺物は、P1から須恵器の小破片(15-1)と土師器の小破片10数点で、後者には15-2のような内外面朱塗りを施した坏がある。P2からは古式土師器の小破片1点、土師器小破片2点のみで、前者は混入品である。P3からは土師器の小破片4点のみで、15-2とよく似た朱塗りを施した坏(15-4)が出士している。P5からは土師器の小破片1点のみ、P6からは土師器の小破片が4点のみである。P4・P7は皆無であった。以上より、奈良・平安期のものと考えられる。

以上記してきた奈良・平安期のSD01・03・04及び柱穴列(SA01・SA02)は軸を東西南北にとっている。西約80mに位置する下古志遺跡A区<sup>注2</sup>で調査した7～8世紀のSD01～04も軸を東西にとっており、これらはほぼ同時期の方位を意識した規則正しく配置された構造と考えられる。

#### SD02 (第10・16～25図)

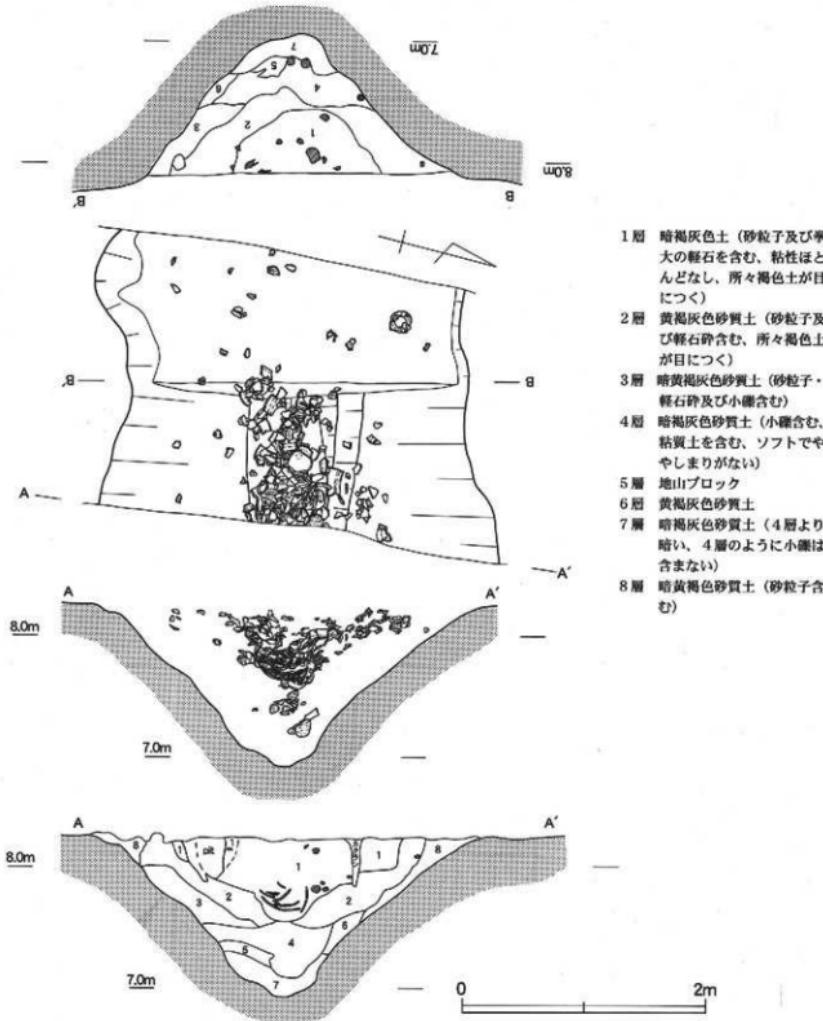
b・c区、標高8.25mで検出した大型の溝状遺構である。検出長2.3m、幅2.75～3.0m、底面幅60cm、深さ1.3m(底面標高6.95m)を測り、N-70°-Eに位置する。断面はV字状を呈し、立ち上がりは急傾斜である。覆土は、上半部に軽石を多く含むのが特徴である。また2層以下は砂質土であり、5層は地山が崩れ流れ込んだものようである。4層は同じ砂質土でも粘質土を含みソフトでしまりのない層である。4層以下から湧水したこともあり、漏水状態であったと考えられる。

上面から遺物が全体的に出土(第17図-1層-1)し、徐々に掘り下げると完形に近い遺物が中央寄りから出土するようになり、ほぼ1層に収まるような出土状況(第17図-1層-2～4)を呈した。大甕(18-1)を中心にして甕・普通甕・高坏・低脚高坏・鼓形器台・低脚坏・小型土器などの当該期の器種がほぼ全て揃って集約的に出土しており、一括廃棄と考えられる。先に記した断面やや深い皿状を呈する1層に収まる出土状況は、一括廃棄された当時の溝の大きさであると考えられる。一括遺物を廃棄した後も、不要な遺物を廃棄しつつ最終的に全部埋まったものであろう。1層のほか同様な遺物が4層から1/4コンテナ分、7層から破片8点ほどが出土しており、短期間で溝が埋まったようである。

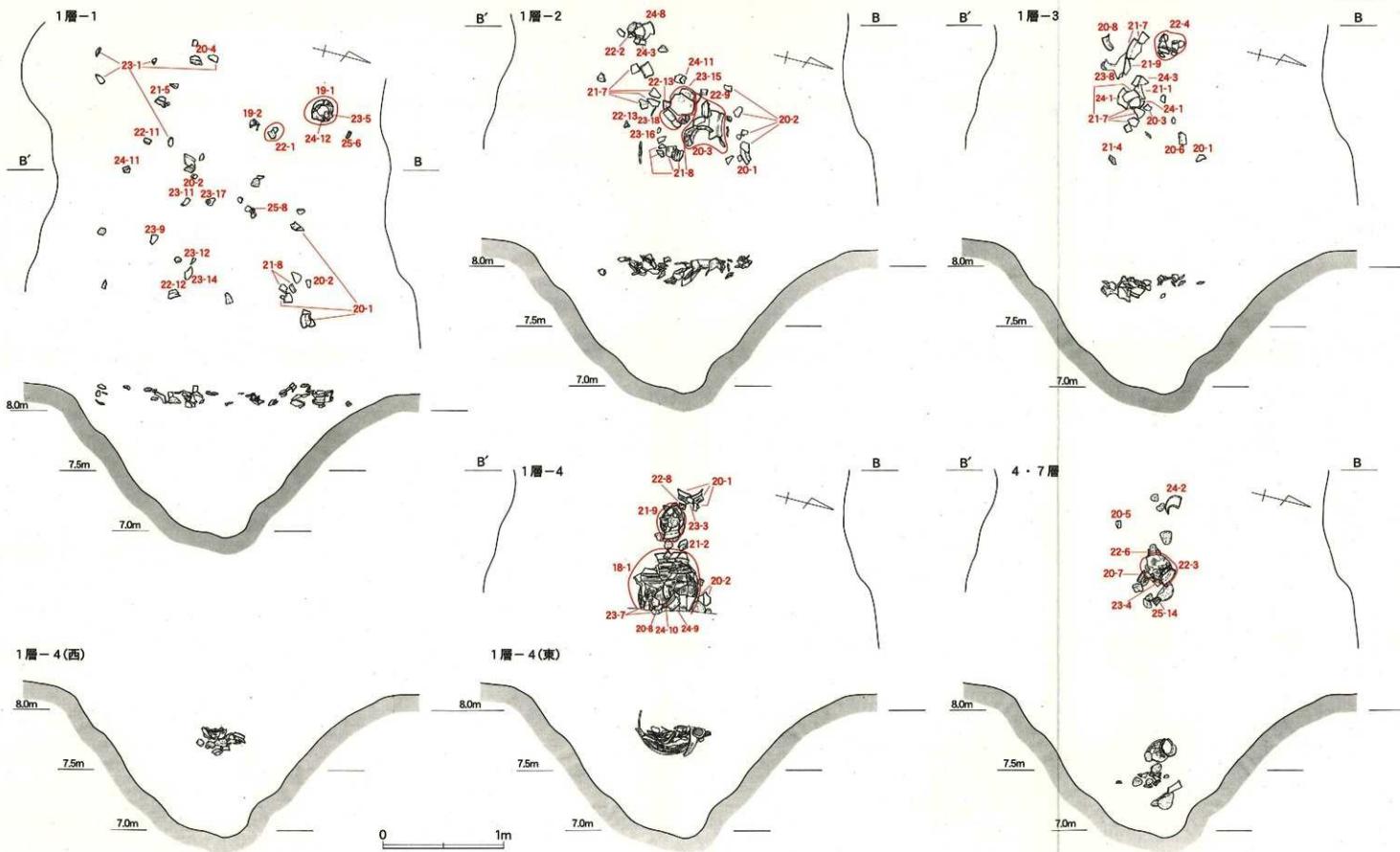
1mのみの調査のため、この一括廃棄状況がどこまで広がるかは不明である。ただし、西約80mに位置する下古志遺跡A区<sup>注2</sup>で調査したSD28と大溝においては、廃棄状況は呈するが一括廃棄は行われていない。

出土遺物は、若干の弥生土器から古式土師器まで7コンテナ分である。弥生土器は実測に耐えうるもの14点を第25図に掲載した。凹線文をともなう弥生中期後葉から後期中葉までの甕の口縁部である。

以下は、集約的に出土した古式土師器であるが、短頸甕を含む甕類が2点(19-1・2)しか出土しておらず、それに比すると甕の出土量がかなり多い。甕には前記した大甕1点(18-1)の他、普通甕より容量が3倍近くある中大甕が3点2個体(20-1～3)で、あとは普通甕(容量平均値で大甕の5分の1)である。

第16図 SD02 土層断面図及び遺物出土状況図 ( $S=1\%$ )

普通壺上部29点(20-4~22-14)は、口縁端部の特徴(先細りのもの~幅広の平坦面をもつもの)、突出部の特徴(上下からの強いナデによる鋭いもの~ナデがあまく鋭くないもの)、口縁部長さ(短くなる)、肩部の文様(クシ歯状原体により明瞭に施文されたもの~ハケ状原体による文様の退化現象)



第17図 SD 02層位別遺物出土状況図 (S=1/50)

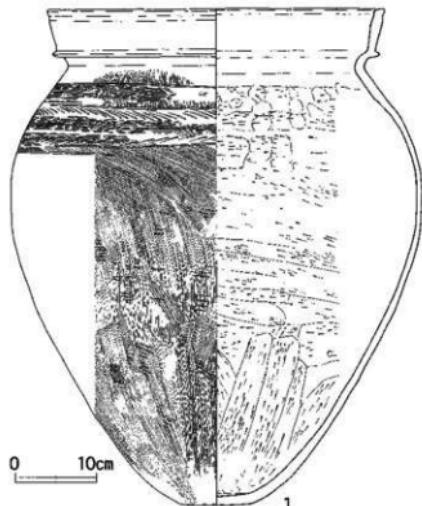
などを考慮して、序列したものである。体部は胴中央より若干上に最大径位のある倒卵形を呈する。22-1・9は口縁部に文様を施しているものである。1は波状文を、9は刺突文である。23-1~7は多少ともスグが付着しており甕の底部と考えられる。1は平底で直径も大きく立ち上がりが開くので、鉢の底部の可能性がある。また7の底部には焼成後穿孔が施される。

23-8~15は高坏である。坏部は屈曲して立ち上がる8・9、浅い皿状の10がある。脚柱部は筒状に直立し裾近くになると開く、いわゆる裾広がりとなる。接合方法が判明しているものは、円盤充填法である。8には刺突痕はないが、11には中央に小さな刺突痕がある。23-15は接合部径が広く、脚柱部が根元からラッパ状に開いていく脚の短いもので、低脚高坏である。坏口縁部は複合口縁状を呈しており、体部は丸みをもつ。円盤充填法で接合している。

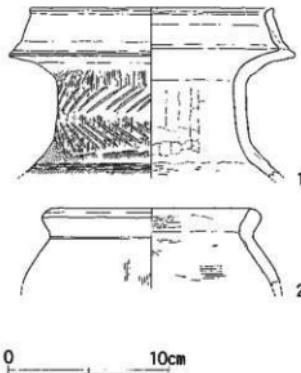
23-16~19は低脚坏である。坏部は深みのあるものから浅く皿状のものまである。

24-1~10は鼓形器台で、法量はほぼ同量のものである。8の外面には1ヶ所のみナイフ状の原体によるノの字状のキズが4本施されている。正面を意識したものと考えられる。7と9の脚部側の突出部はナデがゆるくて鋭さを欠いている。10にはスカシと考えられる小さな円孔が1ヶ穿孔されている。

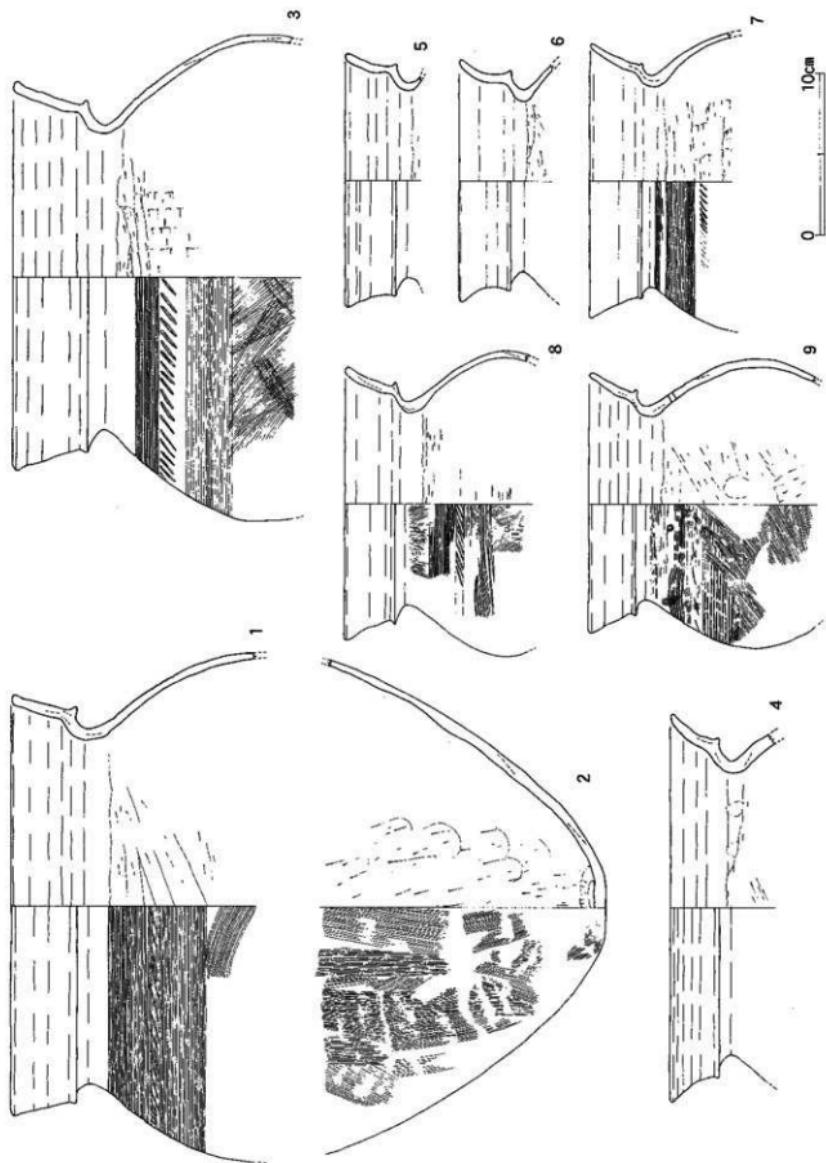
24-11・12は小型の土器である。11は甕で、容量の割に器壁が厚く、外面にミガキ調整を施したのち、メリハリのある有軸羽状文<sup>23</sup>を施し、秀麗さを出している。12は鉢である。同様に容量の割に器壁が厚いものである。外面が風化のためほとんど剥落しているが、一部残存した胴部最大径位以下を観察するとミガキ調整が施されている。外面頸部には頸部を絞めるように弧状文が、肩部には波長の小さな波状文が施されている。



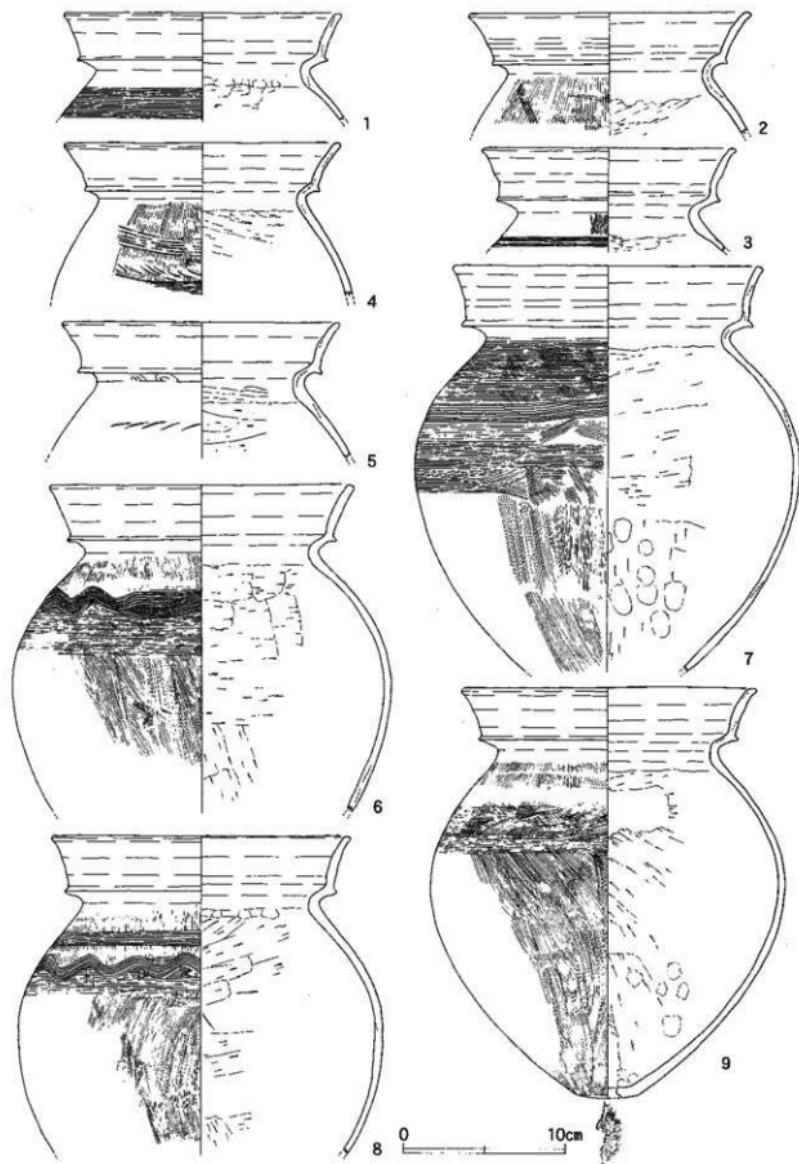
第18図 S D O 2 出土遺物実測図1 (S=1/6)



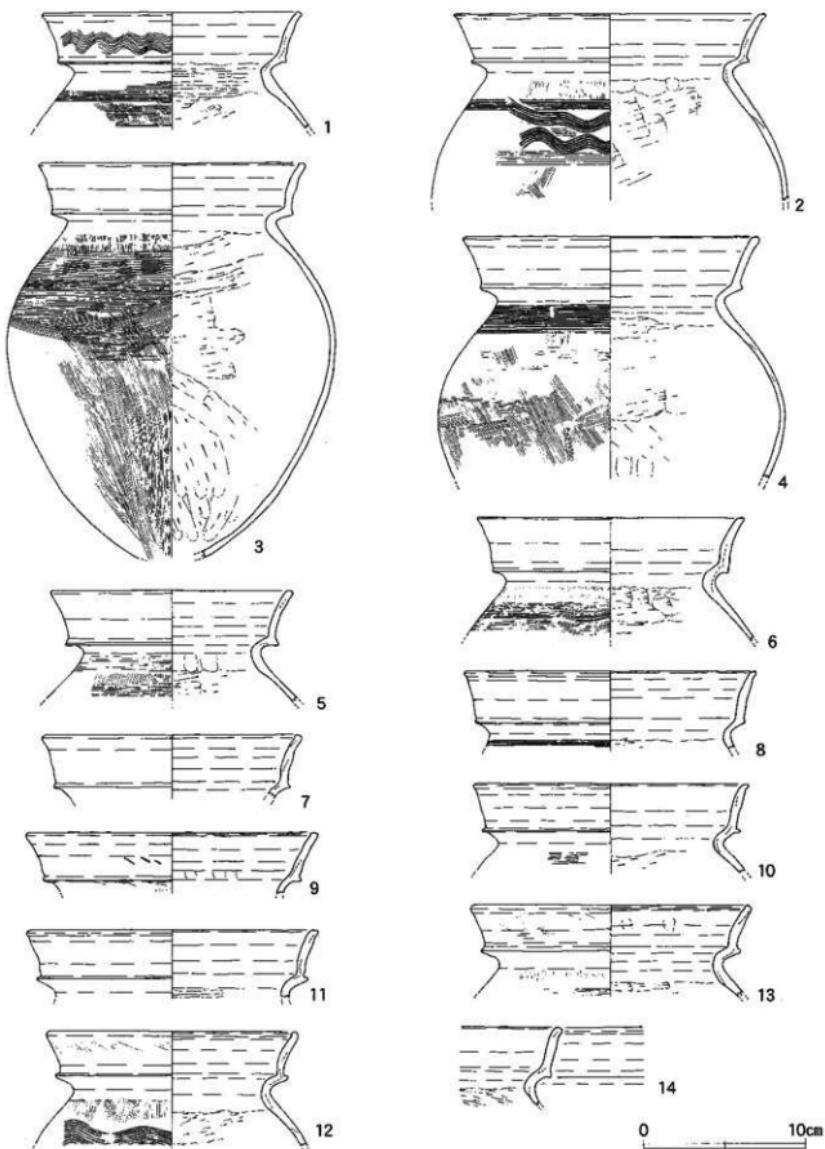
第19図 S D O 2 出土遺物実測図2 (S=1/6)



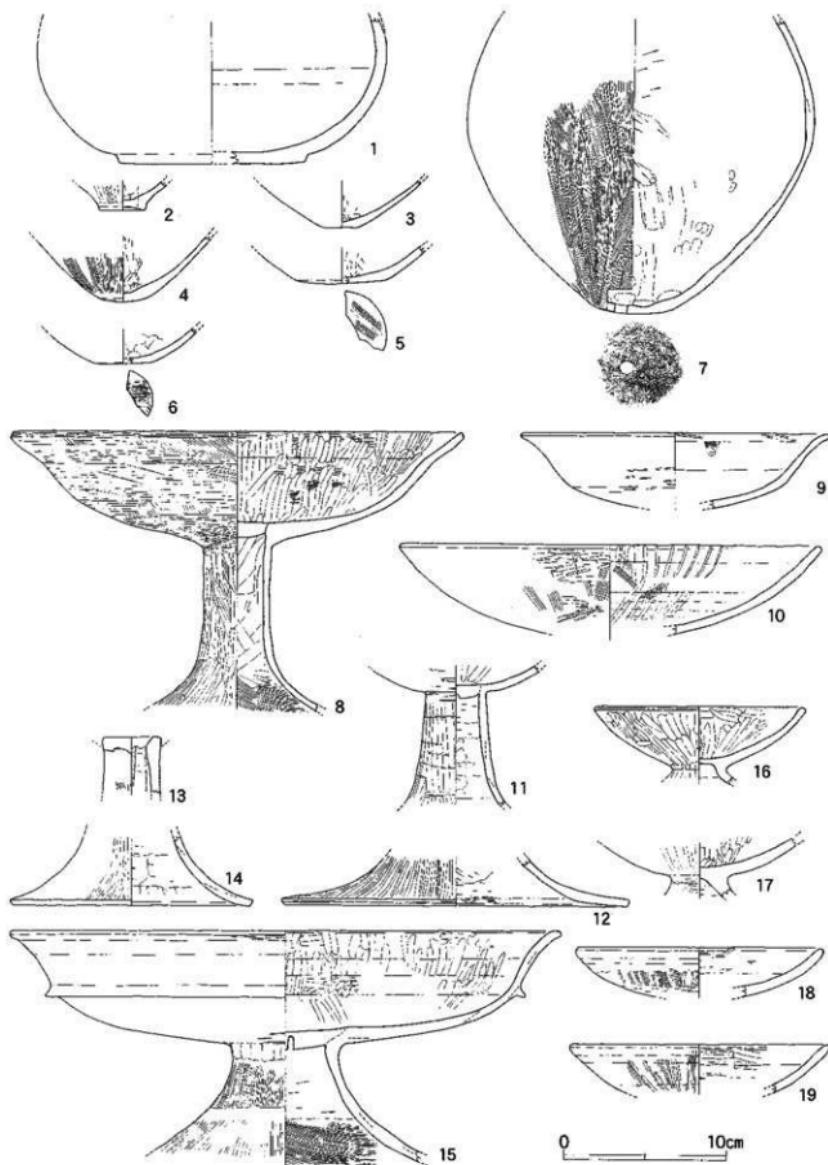
第20図 SD02 出土遺物実測図 3 (S=1/2)



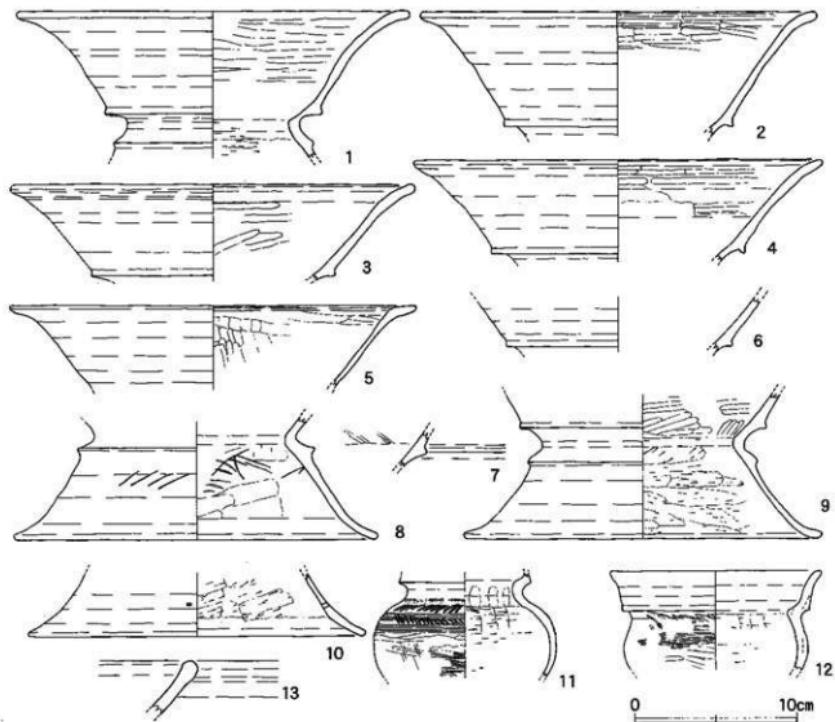
第21図 SD 02 出土遺物実測図 4 (S=1/3)



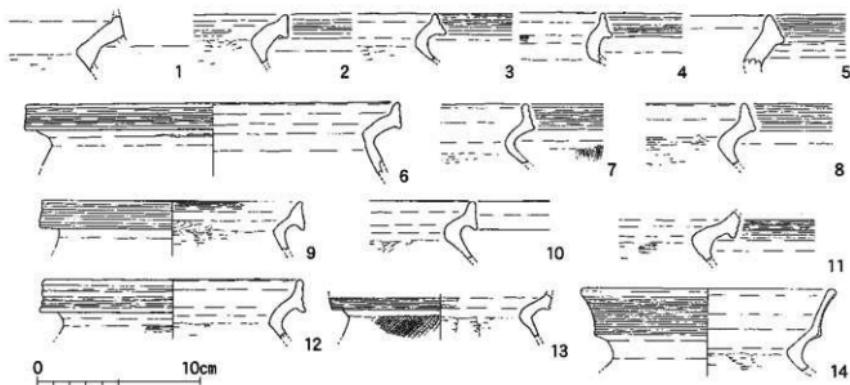
第22図 S D O 2 出土遺物実測図 5 ( $S = \frac{1}{3}$ )



第23図 SD02出土遺物実測図6 (S=1/3)



第24図 SD02出土遺物実測図7 (S=1/3)



第25図 SD02出土遺物実測図8 (S=1/3)

24-13は器種不明であるが、口縁端部が丸く、灰黄褐色を呈するきれいな土器破片である。

以上より、S D 0 2において一括廃棄をされたのは草田 6期である。

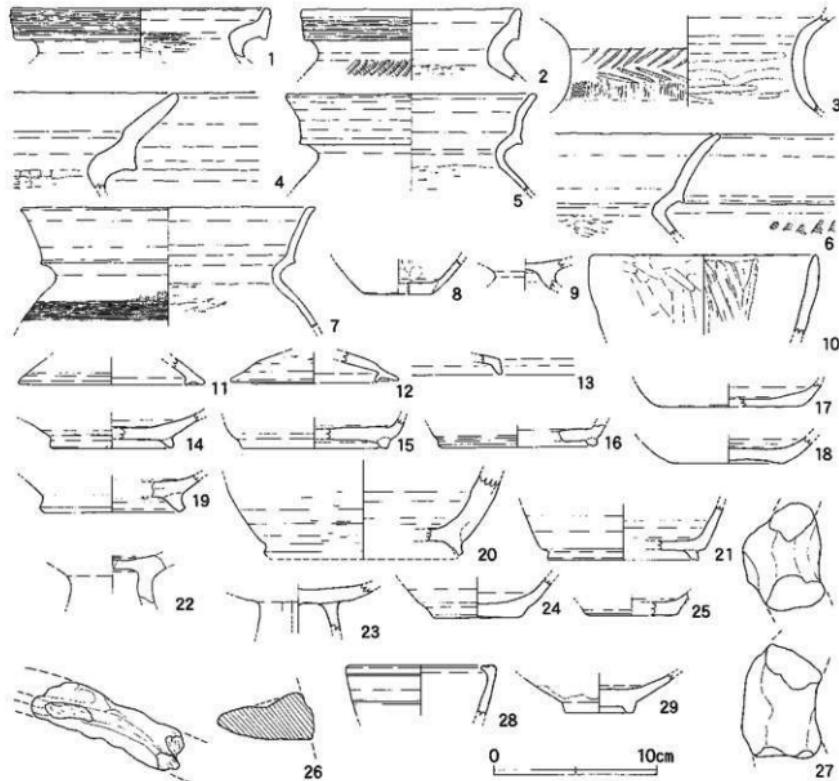
#### その他の遺物（第26図）

第26図は遺構外から出土した遺物で、実測可能なものを掲載した。詳細は観察表に委ねる。

注1 13-1・2を口縁部に、13-3を2の胴部として、13-5を底部とした2個体の甕

注2 出雲市教育委員会『一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下古志遺跡』2001

注3 軸は凹線で、刺突はクシ歯状原体による



第26図 下古志 1 T 遺構外出土遺物実測図 (S = 1/3)

## (2) 下古志 2 T (第27~32図)

当該トレンチは西から10m単位で便宜上 a ~ d 区と区分けして調査を行った。

当該トレンチは水田耕作地で、地表面から約20cmの現耕作土(1層)が堆積しており、その下には旧耕作土と考えられる2・3層が全体を覆っている。それ以下では、調査トレンチのほぼ中央から西(a・b区)と東(c・d区)で堆積状況が大きく異なり、西側が全体に落ち込んで窪み地となる。東側黄褐色砂地山の平均標高が約8.5mに対し、西側のそれはb区で7.9m、a区で7.7mとなる。旧耕作土下に堆積する4層は、所々マーブル状を呈しており、西側の不安定土壤を安定さすため、人工的に埋められたものようである。

最下層の9層からは遺物は出土しなかったが、10層からは上師器・須恵器の破片などが出土しており、地山面は中世に大きく開墾され、それ以下の純粹な包含層は壊されている。後述するが、西側では深く掘り込まれた遺構のみが残存していた。

またこれらの環境については、文化財調査コンサルタントの渡邊正巳氏に分析頂き、玉稿(第5章)を賜った。

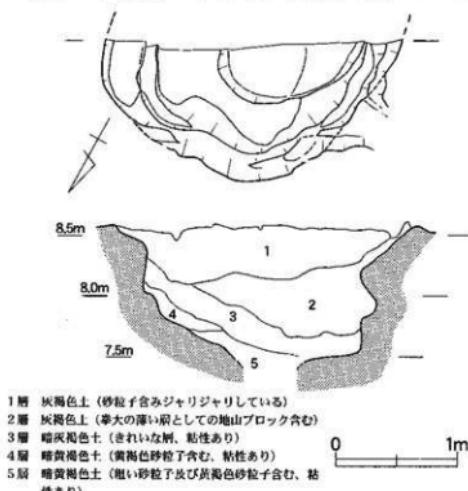
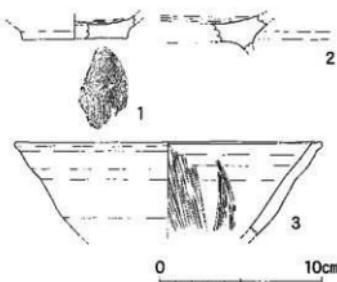
以下、主な遺構の詳細と出土遺物について述べる。

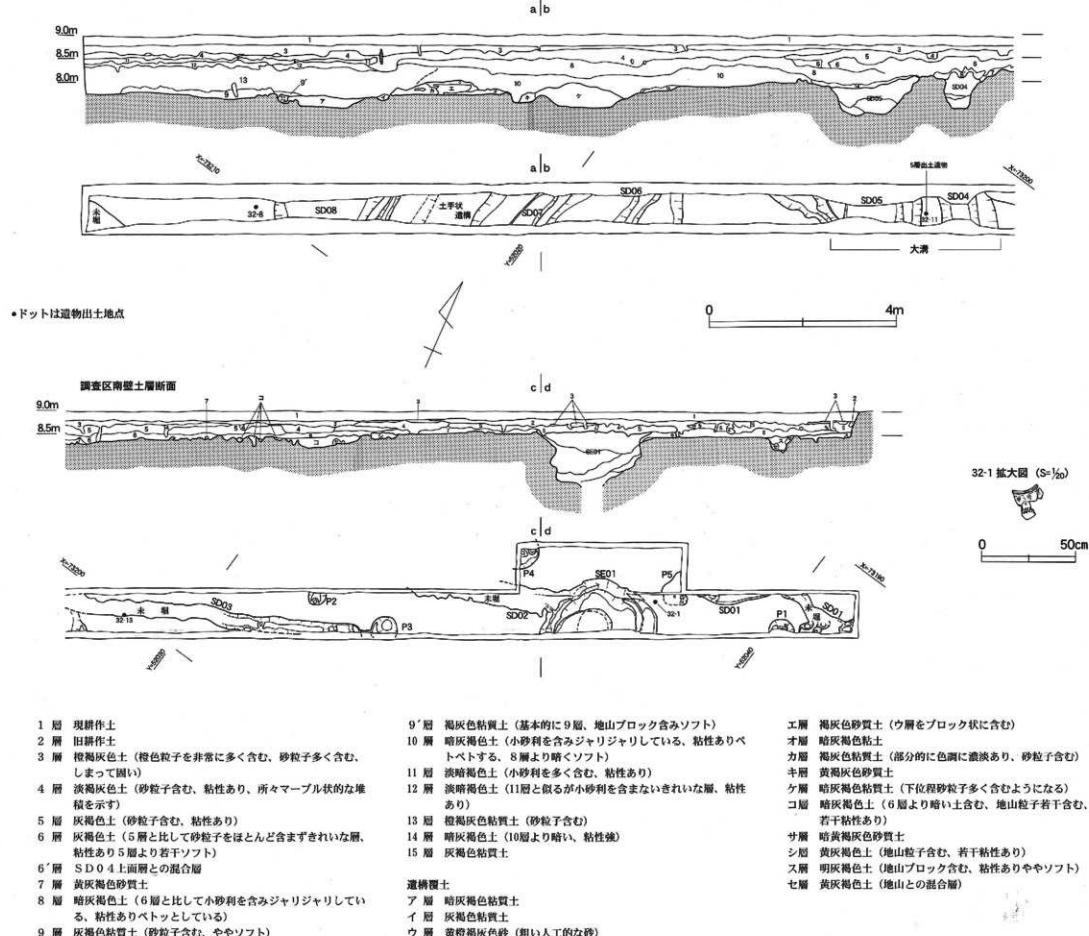
## S E 0 1 (第28・29図)

d区、標高8.6mで検出した井戸である。西から伸びているSD 0 2を切り、南半分は調査区外へと延びている。平面半円形を呈するが、ほぼ正円形の掘り方であると考えられ、断面は漏斗状を呈する。検出直径2.46m、深さ約1.1m(最深標高約7.4m)を測る。底中央部には水溜部と考えられる直径約70cmの落込みがある。調査時点では、この水溜部直上の標高約7.65mで湧水した。

現況では、素掘りである。しかし履土に地山のブロック、黄褐色砂などを含んでおり、自然堆積ではなく人工的に埋め戻されたような堆積状況を呈しており、施設を引き抜いた後に埋め戻した可能性も考えられる。

出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器の破片である。弥生土器は、周辺か

第28図 S E 0 1 実測図 ( $S=1/40$ )第29図 S E 0 1 出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )



第27図 下古志2T遺構配置図及び土層断面図 (S=1%)

らも出土しており、SE01が当該時期の遺構を壊している可能性も考えられる。29-1・2は土師器壺の底部で、2は高台付きである。29-3は素焼きの擂鉢の口縁部である。ハケ目状の細い擂目が施されている。全体の堆積状況(第27図)も考慮すると、西側の窪地が埋没した後に掘削された中世の遺構と考えられる。

#### SD02 (第27図)

c・d区、標高8.6mで検出した。東側を前記したようにSE01に切られ、西側は調査区外へと延びていく。一部のみの調査であるが、確認長2.8m、幅50cm、深さ15cmを測り、N-73°-E方位に延びる溝状遺構である。

出土遺物は、朱塗りを施した胎土の粉っぽい土師器壺、須恵器壺(1点は高台付き)の破片3点のみである。奈良・平安時代の遺構と考えられる。

#### SD03 (第27図)

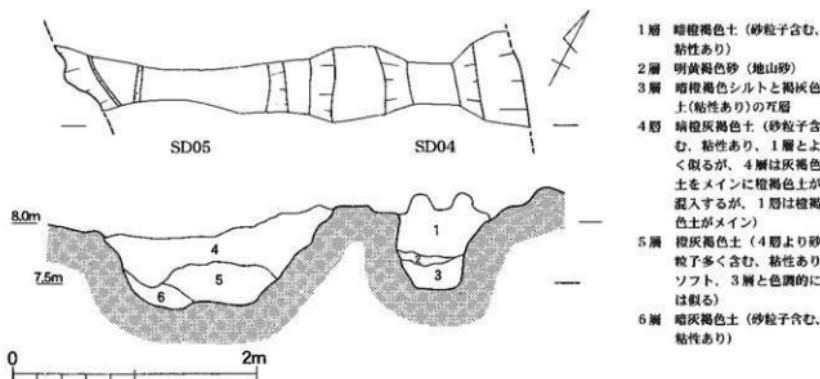
c区、標高8.5mで検出した。東西とも調査区外へと延びるが、西側は窪地に落ち込む付近で調査区外へと延びてゆき、窪地との関係は不明瞭となってしまった。一部のみの調査であるが、確認長6.9m、幅30cm、深さ20cmを測り、N-68°-E方位に延びる。

出土遺物は、弥生土器甕の胴部小破片1点のみである。6層下からの検出遺構ではあるが、積極的に当該時期とは判断できず、一応時期不明である。

#### SD04・05 (第30・31図)

b区の窪地が落ち始めた付近、標高8.2~7.9mで検出した2条の併走する溝状遺構である。窪地が掘削されたことにより、上位はかなり削平されている。トレンチには直角の検出のため、最小検出長となり35~80cmを測る。他の測定値は、SD04が検出幅1.15m、底面幅40cm、深さ75cm(底面標高7.45m)、SD05が検出幅2.3m、底面幅1.05cm、深さ55~75cm(底面標高7.3m)で、N-32°-Wに位置する。

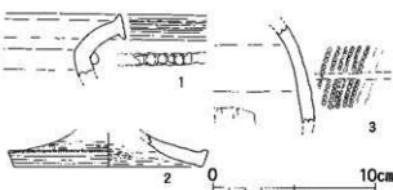
当該遺構は、履土が橙褐色の強い色調を呈しており、下占志遺跡D区で検出した大溝<sup>31</sup>の履土が橙



第30図 SD04・05 (大溝) 実測図 (S=%)

褐色の強い色調を呈しているのとよく似ている。

またSD04とSD05間は40cmと近接し、履土がよく似ていること、下古志D区大溝の断面形態がW字状を呈することを考慮すると、SD04とSD05は同じ溝状遺構の可能性が大であり、併せて大溝と捉えたい。大溝としての幅は3.7mを測る。



第31図 SD04・05出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )

出土遺物は、SD04からは弥生時代中期の土器破片2点(31-1・2)のみであるが、SD05からは同時期の土器破片(31-3)小袋1袋分のほか弥生時代後期土器破片1点、終末期～古墳時代初頭の土器破片3点を含む。これら4点は上位の4層からの出土である。下古志D区大溝からも中期土器が主流を占める中、終末～古墳初頭期の土器が5%の比率で出土しており、出土状況と同じである。時期的検討は、下古志D区大溝に委ねたい。

#### SD06 (第27図)

b区、標高7.9mで検出した溝状遺構である。窪地が掘削されたことにより、上位はかなり削平されている。トレンチには直角の検出のため、最小検出長となり60cm、検出幅1.6m、底面幅80～90cm、深さ40cm(底面標高7.5m)を測り、N-18°-Eに位置する。

出土遺物は、上半部より弥生土器と土師器の小破片数点である。

#### SD08 (第27図)

a区、標高7.7m強で検出した溝状遺構である。窪地が掘削されたことにより、上位はかなり削平されている。トレンチには直角の検出のため、最小検出長となり30～65cm、検出幅2.0m、底面幅1.45～1.75m、深さ25cm(底面標高7.45m)を測り、N-20°-Wに位置する。

出土遺物は、皆無である。

#### 土手状遺構 (第27図)

a区のSD06とSD08の間に位置し、標高8.05mで検出した。上半の2層は砂質土、下半の2層は粘質土であり、積み上げて築いたもののように観察される。検出長80cm、検出上端幅85cm、下端幅1.25m、高さ30cmを測り、N-6°-Eのほぼ南北方向に位置する。

出土遺物は、須恵器・土師器の破片数点で、奈良・平安期のものと考えられる。

当該遺構は、SD06とSD08のはば中に位置し、3基の遺構はほぼ併走することより、SD06・08掘削時に築かれた土手状遺構と考えられる。これらを一連の遺構と考えると、幅7.7mを測る。

#### その他の遺構・遺物 (第27・32図)

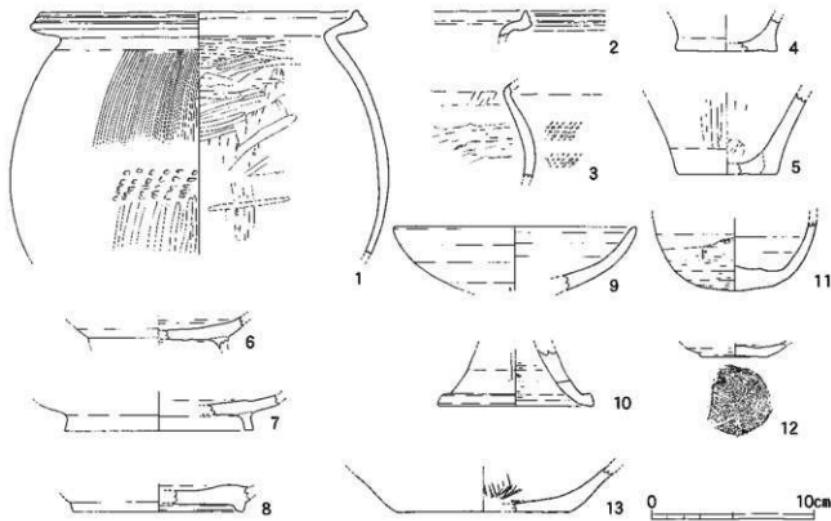
西側の窪地Dからは、SD06・08にそれぞれ併走する規模の小さな溝状遺構が存在し、補足的な役割を果たしていると考えられる。東側の微高地上には、ややしっかりした柱穴が6基以上存在するが、出土遺物も少なく、詳細は不明である。

また32-1はSE01北方から出土した弥生土器である。当時の地表面上と遺構履土が酷似していたため平面確認ができず、包含層(6層)出土と捉えていたが、調査区を一部北側へ拡張する際に断面確

認をすると、わずかに柱穴状の落ち込みが観察された。

第32図は遺構外出土遺物で、実測可能なものを掲載した。詳細は観察表に委ねる。窪地出土遺物もここに掲載している。

注1 出雲市教育委員会『一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下古志遺跡』2001 P.234



第32図 下古志2T遺構外出土遺物実測図 (S=1/2)

## (3) 下古志3T (第33~45図)

当該トレンチは西から10m単位で便宜上a~d区と区分けして調査を行った。

当該トレンチは水田耕作地で、地表面から約20cmの現耕作土(1層)が堆積しており、その下には1層の金土層と考えられる2層が所々途切れながら約5cmの厚さで堆積している。その下に遺物包含層である3・4層が堆積する。この3・4層を切っているか、切られているかで、新旧の造構を確認することが可能である。

全体的に重複した造構が多く、複雑な様相を呈し、詳細不明な造構が多い。

以下、主な造構の詳細と出土遺物について述べる。

## SDO2 (第33図)

b区、標高8.6mで検出した溝状造構である。SX02に上半を壊されており、検出長1.0m、幅30~45cm、深さ15cm(底面標高8.4m)を測り、N-13°-Wに位置する。前記したように上部をSX02に壊されているため詳細は不明である。

出土遺物は、土師器壺の胸部破片1点のみである。外面はススが破片全面に付着している。

## SDO3 (第34・35図)

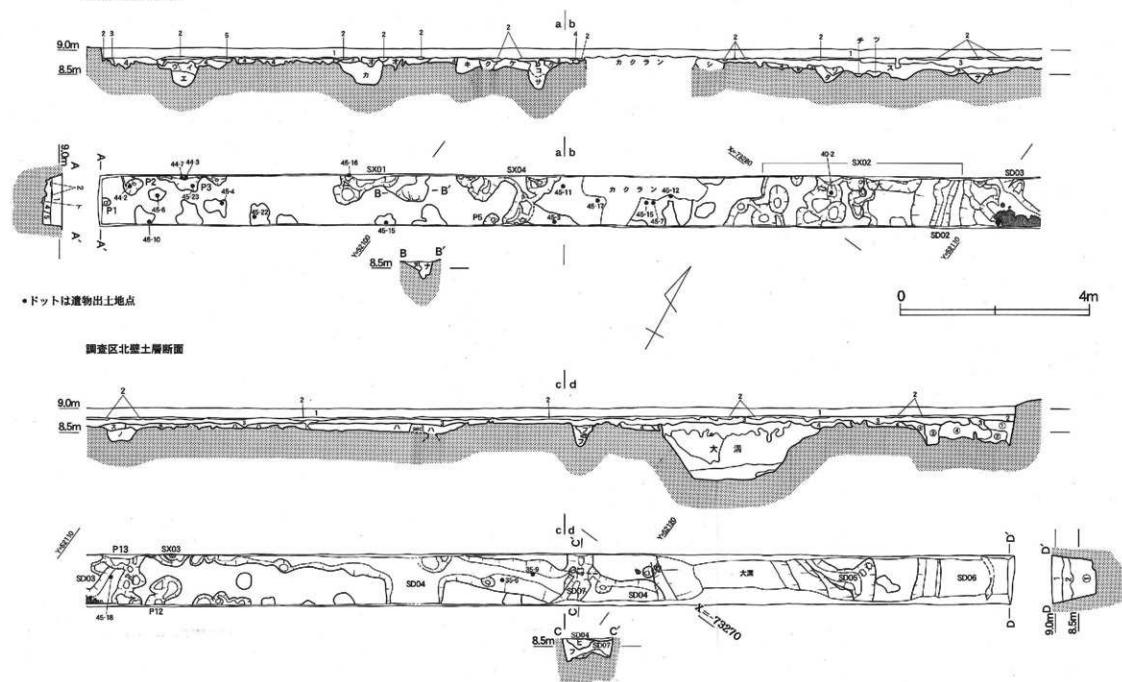
b・c区、標高8.6mで検出した拳大疊敷き溝状造構である。上位をSX02に壊されており、そのため北側の立ち上がりは不明瞭で、南側は調査区外へと延びるため、造構の形状は定かではないが、一応長く延びる形状が想定できそうなので溝状としておく。

検出長85cm、検出幅2.3m、深さ30cm(底面標高8.3m)を測り、N-31°-Wに位置すると考えられる。

疊敷きも南側調査区外へとほとんどが広がっており詳細は不明であるが、疊はトップをほぼ標高8.55mに合わせて敷設しているようである。検出長35cm、検出幅1.2mを測る。

出土遺物は、土師器・須恵器(1点)

第34図 SDO3実測図 ( $S=1/20$ )



- |      |   |  |
|------|---|--|
| 1層   | 規則性作土                                       |  |
| 2層   | 暗褐色土（樹木粒子多く含む。しまって固い、粘性はとんでもなくサラとしている）      |  |
| 3層   | 暗褐色土（樹木粒子含む、砂粒子含みジャリジャリする。粘性あり）             |  |
| 4層   | 茶褐色土（炭化物小粒子含む、粘性はとんでもなく珍っぽい）                |  |
| 4層   | 黄褐色土（4層に山地ブロックが混入した層）                       |  |
| 5層   | 茶褐色土（若干粘性あり、固くしまっている）                       |  |
| 透構図層 |   |  |
| A層   | 暗褐色土（あまり粘性なく固くしまっている）                       |  |
| B層   | 暗褐色土（炭化物小粒子含む、A層よりソフトでサラとしている）              |  |
| W層   | 黄褐色土質土                                      |  |
|      |   | 工場 喀斯特地土（炭化物小粒子含む、I層よりソフトでしょ<br>りしている） |
| O層   | 茶褐色土（炭化物、土器跡、砂粒子含む、若干粘性あり、固くしまっている）         |  |
| K層   | 茶褐色土（炭化物、地山粒子わずかに含む、若干粘性あり、珍らしくアラツとして貯貯っぽい） |  |
| N層   | 茶褐色土（才層とよく似る。地山ブロック混入する。土器跡、砂粒子含む。若干粘性あり）   |  |
| T層   | 暗褐色土（喀斯特地土（山地ブロック無くして含む、若干粘性ありややソフト）        |  |
| C層   | 茶褐色土（才層とよく似る。若干粘性あり）                        |  |
| G層   | 茶褐色土（地山ブロックを互立状に含む、若干粘性あるが珍らしくして貯貯っぽい）一層込土  |  |
| K層   | 茶褐色土：                                       |  |
| C層   | 暗褐色土（炭化物含む、粘性ありソフト）                         |  |
| S層   | 黄褐色土（才層に山地ブロック混入した層）                        |  |
| S層   | 暗褐色土（白色・炭化物難子含む、若干粘性あり）                     |  |
| S層   | 暗褐色土（黒褐色土色含む、砂粒子含みジャリジャリする。若干粘性あり）          |  |
| S層   | 暗褐色土（若干粘性あり、ソフトできれいな土）                      |  |
| S層   | 暗褐色土（砂粒子含む、若干粘性あり）                          |  |
| S層   | 暗褐色土（山地ブロック無くして含む、若干粘性あり）                   |  |
| S層   | 暗褐色土（砂粒子含む、若干粘性あり）                          |  |
| F層   | 暗褐色土（山地ブロック含む、粘性あり、サラッとしている）                |  |
| F層   | 前に地山ブロック含まず、F層より殆ど明るい層                      |  |
| F層   | 暗褐色土（地山粒子含み、F層より明るい層）                       |  |
| D層   | 暗褐色土（若干粘性あり）                                |  |
| D層   | 暗褐色土（若干粘性ありソフ）                              |  |
| T層   | 暗褐色土（若干粘性あり、サササタときれいな土）                     |  |
| N層   | 暗褐色土（粘性ありしつこりとしている）                         |  |
| N層   | 黄褐色土質土                                      |  |
| N層   | 茶褐色土（若干の山地粒子混入するためやや黄色味を呈する。若干粘性あり）         |  |

第33図 下古志3-T造構配置図及び土層断面図 (S=1%)

で、35-1は薄手で堅緻な胎土の外面底部以外に朱塗りを施した土師器坏、35-3・4は高台付きの土師器坏で、35-5の須恵器甕は内面にハケ目調整を施している。4・5は碟敷き間からの出土で、これらより奈良・平安時代と考えられる。

#### S D 0 4 (第33・35図)

c・d区、標高8.7mで検出した溝状遺構である。検出中央付近ではほぼ直角に分岐してTの字状を呈し、東側では大溝と重複する付近で南へ屈曲し、直線的に延びない。途中S D 0 7を切っている。検出長10.0m、幅60~80cm、分岐溝幅1.2m、深さ10~30cm(底面標高8.6~8.4m)を測り、N-68°-Eに位置する。底面は東側に傾斜し、東西高差は20cmを測る。

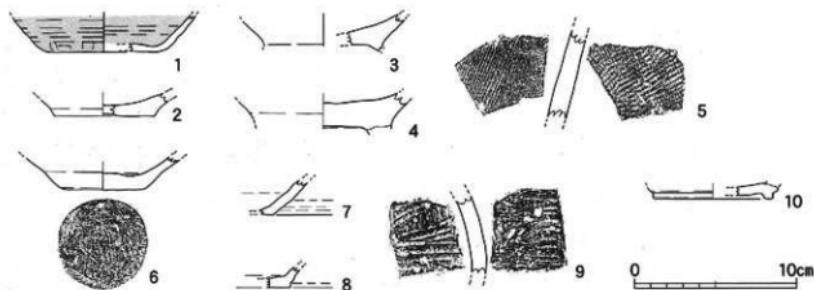
出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器が半袋分で、前2者は出土量も少なく混入品と考えられる。また1点素焼きの土器破片(35-9)が出土しており、土鍋の胴部の可能性あり。土師器坏は底部に回転糸切りを施すが、底部からの立ち上がりが35-7のように稜線をもつものから35-6のようになだらかなもの、また圓化できなかったが底部が柱状高台を意識したような厚手のものまであり、体部もやや厚手のものから薄くて胎土の粉っぽい堅緻なものまで出土している。時期幅はあるが中世の範疇である。

#### S D 0 6 (第33・35図)

d区トレンチ東端、標高8.7m強で検出した。平面プランから一応溝状遺構としたが、トレンチに直角に位置するため検出長は最小、東側立ち上がりも調査区外へと延びており、詳細は不明である。土層断面図より、最古の遺構が埋没して堆積した④層を切って、③層履土が掘り込まれ(西側溝)、その後に包含層(3層)が堆積し、その後①・②層履土が掘り込まれた(東側溝)様相が読み取れ、複雑な重複をした遺構と考えられる。

検出長80cm、検出幅2.0m、西側溝幅45~55cm(底面幅25cm)、東側溝幅55cm以上(底面幅35cm以上)、西側溝深さ45cm(底面標高8.25m)、最古遺構深さ30cm(底面標高8.4m弱)、東側溝深さ55cm(底面標高8.15m)を測り、N-30°-Wに位置する。

出土遺物は、面積の割に量が少なく、須恵器小破片1点、土師器小破片2点のみである。35-10はそのうち実測可能な須恵器高台付き坏の底部である。しかし、土師器1点は厚手で短い口縁部をもつ



第35図 S D 0 3 (1~5)・S D 0 4 (6~9)・S D 0 6 (10)出土遺物実測図 (S=1/3)

小皿と考えられるもので、時期をおさえるには資料不足であるが、古代から中世にかけての遺構と考えられる。

#### S D 0 7 (第33図)

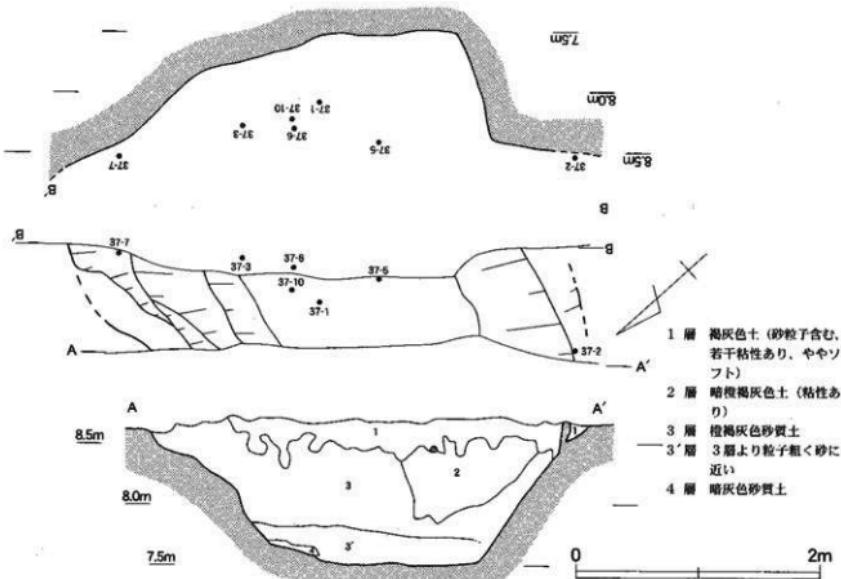
d区、標高8.65mで検出した溝状遺構である。前記したようにSD04に上位を切られているが、SD04よりしっかりした掘り込みで、断面幅狭のV字状を呈する。検出長1.0m、幅55cm（底面幅10~20cm）、深さ50cm（底面標高8.2m）を測り、N-20°-Wに位置する。

出土遺物は、須恵器小破片2点と土師器小破片10数点のみで、時期を特定するには資料不足ではあるが、SD04より古いので、古代から中世の範疇であろう。

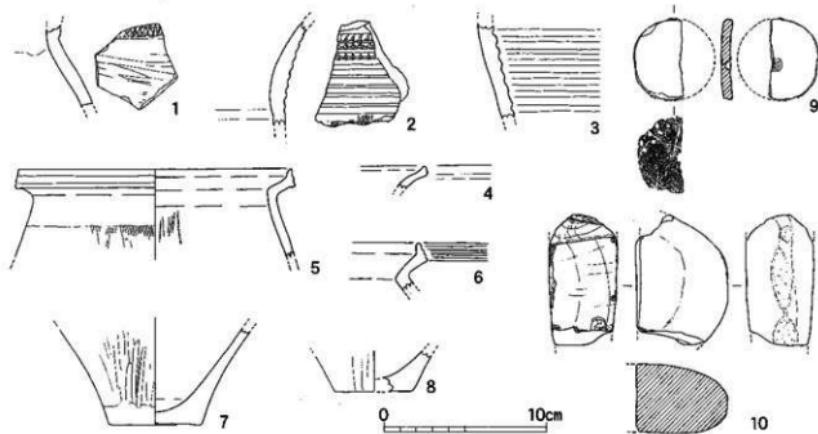
#### 大溝 (第33・36・37図)

d区、標高8.7mで検出した大型の溝状遺構である。検出長1.0m、幅3.3m、底面幅1.5m、深さ1.2m（底面標高7.5m）を測り、N-62°-Wに位置する。断面は逆台形を呈する。当該遺構は、履土が橙褐色の強い色調を呈しており、前記した下古志2T大溝（SD04・05）と下古志D区大溝と堆積状況が似ている。この土層に関しては、下古志D区大溝で記述している<sup>31</sup>とおり、人工的に埋められたものと考えられる。

出土遺物は、弥生時代中期の土器を中心に、土師器数点と須恵器が1点で、後者は上層部からの出土であり、混入品と考えられる。また土製品が1点(37-9)と石器が1点(37-10)出土している。37-1~3は壺の1は頸部から胴部へ移行した部位、2・3は長胴広口壺の頸部で、施文された凹線文は突帯と



第36図 大溝実測図 (S=1/50)

第37図 大溝出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )

しての意識をしなくなったものである。37-4~6は壺の口縁部である。5・6の口縁端部は拡張して面をもち文様を施しているが、4の口縁端部は若干上に肥厚しているだけで無文である。37-9は壺の胸部分破片を転用した円盤で、外面に列点文をもつ。中央に内外面から穿孔しているがずれており、貫通はしていない。37-10は敲石で、縁辺を使用している。表裏面は研磨されたかのようにツルツルしている。半分欠損しているが、その角は細かな敲打による面取りが施され、手に着装するためのものと考えられる。

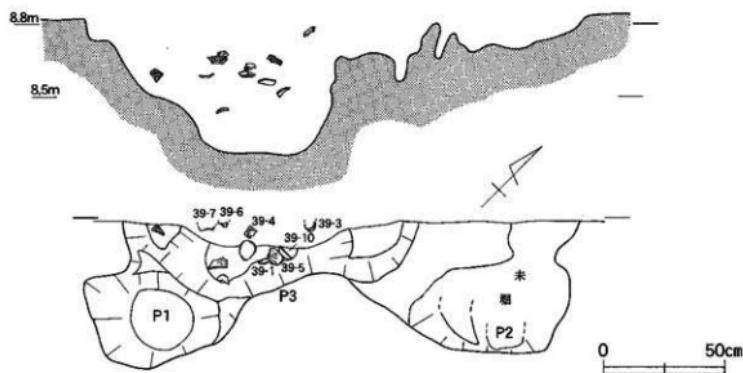
## S X 0 1 (第33・38・39図)

a区、標高8.8m強で検出した。北側の半分以上が調査区外へと延びており性格は不明であるが、柱穴の集合遺構 (P 1 ~ P 3) と考えられる。検出長20~60cm、検出幅1.85~1.95m、深さはP 1が50cm以上 (未完掘)、P 2が未調査のため不明、P 3が60cm (底面標高8.25m) を測る。全体に堆積しているオ層は土器碎・炭化物などを含み、固くしまっている。P 3からは遺物が集中して出土している。

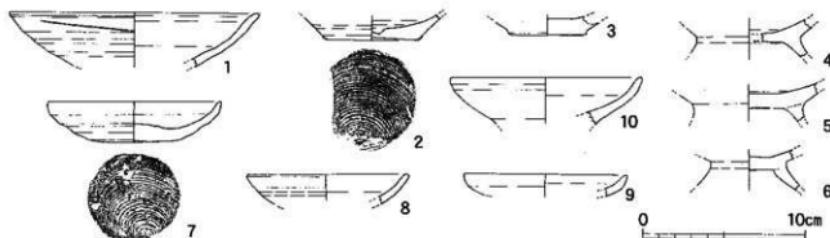
出土遺物は、須恵器破片3点・土師器1袋分、P 2中から鉄 (4×2.5cm) が1点である。土師器は壺と小皿が出土しており、口縁端部は内湾し、底部は回転糸切りを施す。外反する高台をもつもの (39-4~6) もある。須恵器破片3点は壺の胸部分破片で、外面の調整を2点は敲きを施し、1点はナデを施しており、前者は混入品と考えられるが、後者は当該遺構の同時期の遺物でよいと思われる。以上より、当遺構は12~13世紀のものと考えられる。

## S X 0 2 (第33・40図)

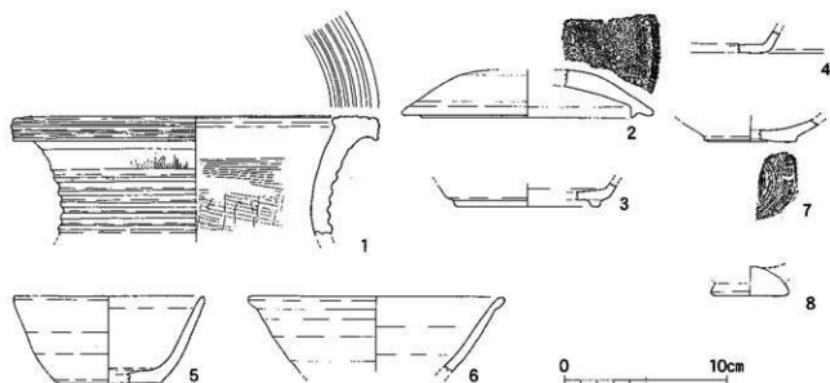
b区、標高8.8mで検出した。遺構の大半が南北調査区外へと延びており性格は不明である。SD 0 2・0 3などを切って存在し、また柱穴も多数あり、複雑な重複関係も成すようである。東側立ち上がりはSD 0 3と重複し、不明瞭となっている。検出長1.0m、検出幅5.2m、床面の深さ20cm (床面標高8.55m) を測るが、古い遺構は一段とレベルが下がる。



第38図 S X 01 遺物出土状況図 ( $S = \frac{1}{2}$ )



第39図 S X 01 出土遺物実測図 ( $S = \frac{1}{2}$ )



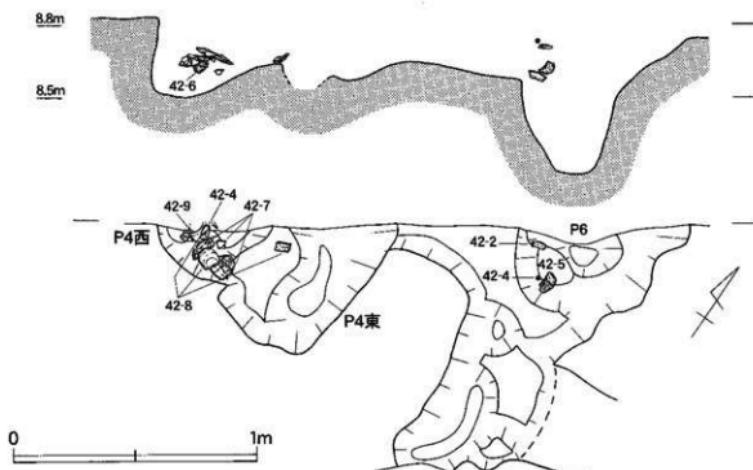
第40図 S X 02 出土遺物実測図 ( $S = \frac{1}{2}$ )

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶器(1点)などの破片が1袋分である。土師器坏小破片には胎土が緻密で粉っぽく朱塗りを施したものが数点含まれる。40-1は弥生土器の壺口縁部である。凹線文を多用化しているが、頸部のそれは突帯を意識したように断面がコの字状を呈する。1のような弥生土器が数点含まれるのは、当遺構が弥生時代遺構を接している可能性が考えられる。40-2~4は須恵器で、高台付き蓋坏と皿である。40-5~8は土師器で、5のように深く直立ぎみの立ち上がりを見せるものから6・7のように開いて立ち上がるるものまである。8は低い柱状高台部である。以上より、遺構の重複関係のため時期に開きはあるが、8~12世紀に納まるものと考えられる。

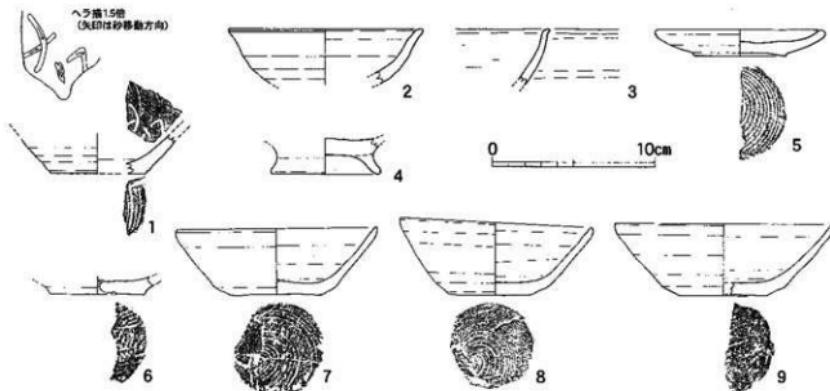
#### S X 0 4 (a区-P 4・P 6) (第33・41・42図)

a区、標高8.8mで検出した。プラン検出時には溝状を呈する遺構であったが、掘り下げると西にP4(東西P)、北にP6などの柱穴へと分かれていた。P4が最も新しく両者を繋ぐ溝状の落ち込みを切っており、次にP6も両者を繋ぐ溝状の落ち込みを切っている。P4西は検出直径25cm、深さ35cm(底面標高8.5m)、P4東は55×30cm、深さ40cm強(底面標高8.35m)を測る。P6は直径40cm、深さ60cm(底面標高8.6m)を測る。両者を繋ぐ深い溝状の落ち込みは、検出長1.2m、幅45cm、深さ20cm(底面標高8.6m)を測り、ほぼ南北軸に延びるが、北と南で東西にそれぞれ派生する。

出土遺物は、土師器が2袋分と弥生土器小破片1点、須恵器破片2点である。後者は混入品と考えられる。弥生土器はP6の下層(サ層)から単独で出土したもので、サ層は古い遺構の可能性がある。土師器坏には、P4東とP6と両者を繋ぐ溝状の落ち込みから胎土が堅致で粉っぽく朱塗りを施した破片が若干含まれている。また42-1は底部から直立ぎみに立ち上がる坏で、内面にはヘラ描きによる文字が施されている。文字正位は、砂粒子が上から下へ移動した方向である。上の文字は下位のみ残



第41図 S X 0 4 (P 4・P 6) 遺物出土状況図 (S = 1/20)



第42図 S X 04出土遺物実測図 (S=%)

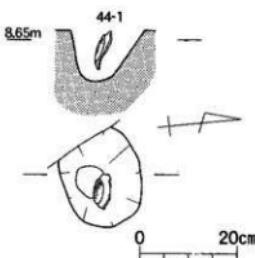
存した「逆メ」状、下の文字は「口」と描かれているようである。42-2・3は体部が湾曲し口縁端部が外反する壺、42-4は高台部である。42-5は底部から胴部へ明瞭に変化をもって立ち上がる厚手の皿である。42-6も底部から胴部へ明瞭に変化をもって立ち上がる底部。42-7~9は底部からやや不明瞭に立ち上がり、直線的な体部で口縁端部はまっすぐにおえるものである。1~6は10世紀の、7~9は12~13世紀のものであろう。

#### その他の遺構・遺物 (第33・43~45図)

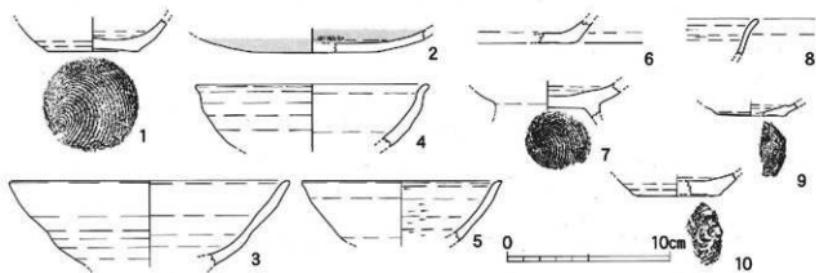
全体に土器器が出土する柱穴状の遺構が多いが、調査幅が狭いため、性格は全く不明である。P 4のように遺物を多く含むものもある。また小規模な溝状遺構と重複しており、ますます不明瞭なものとなっている。

第44図は前記した柱穴以外の出土遺物、第45図は遺構外出上遺物で、実測可能なものを掲載した。詳細は観察表に委ねる。

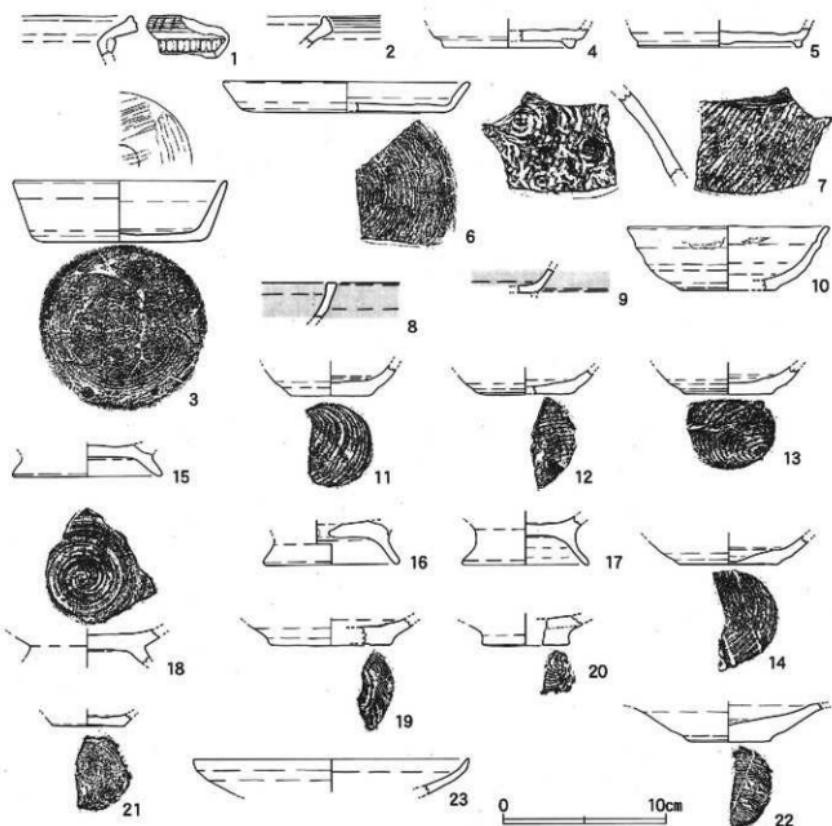
注1 出雲市教育委員会『一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下古志遺跡』2001 P.234



第43図 a区 P 1 実測図 (S=%)



第44図 P1(1)・P2(2)・P3(3~7)・P5(8・9)・P12(10)出土遺物実測図 (S=1/2)



第45図 下古志3T遺構外出土遺物実測図 (S=1/2)

# 遺物観察表

遺物観察表の記載事項について

挿図番号：本文の挿図番号に対応する。

出土地点：トレーニング名（区名）・遺構名・層位で記した。

種別・器種：土器の種類・器種、不確定なものは部位を記した。

土器以外のものは、素材・器種を記した。

計測値・残存率：実測図から測定した。

復元不可能な小破片は2辺の測定値である。

残存率は全体分の、部位が記載してあるものはその部位の比率である。

**胎 土**：胎土に含まれる砂粒子の大きさとその量、砂粒子の主な種類（目分量の多いものから順に）を記した。

**焼 成**：良好・やや良好・普通・やや不良・不良の5段階に分けて判断した。

**色 調**：素焼き系統の土器は褐色を、還元炎焼成の土器は灰色を基本として色調を判別した。

**成形・調整・文様**：遺物を正位置に置いた状態での、各位の上から下へ、底面は外縁から内側へ特徴を記述した。変化点には「・」で区切りをつけた。重複するものは「→」を使い「古→新」で表した。並列関係は「+」を用いた。「回転」と明記したものは、回転台・輪轂を利用したと考えられるものである。「ケリ」とのみ記載したものは意識的な方向性を持たないもの、または方向が不明なものである。「ケリ（LR）」とはケズリの方向左から右を表したものである。「ケリケリ」とはケズリ調整された面が整ったもので、ケズリの単位が明瞭なものと区別した。凹線文とは1条ずつ施文された複数線文を指す。ハケ目（の）の単位が未記載のものは不明なものである。

**備 考**：上記以外に特記事項がある場合にのみ記述した。

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 高さ・重さ	胎 土	焼成	色 調	成形・調整・文様	備 考
9-1	古志本郷1T SK05	土師器 灰	底径 8.1 底部 1/8存	粗っぽく緻密	良好	淡褐色	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ	底面以外朱塗り
9-2	古志本郷1T SK06	土師器 灰	口径 12.7 口縁部 1/8存	ほとんど砂粒子含まず、 粗っぽく緻密	普通	淡黃褐色	内:回転ナナ及び回転ヘリナナ	内外面とも朱塗り
9-3	古志本郷1T SK06 2層	土師器 灰	口径部 2.5×2.5角 2.5×2.5角	若干の粗砂粒子含み、粗 っぽく緻密	普通	淡黃褐色	内:回転ナナまたは回転ヘリナナ	内外面とも朱塗り
9-4	古志本郷1T SK06 2層	赤土器 壺	口径 10.0 口縁部 9.9 上半部 1/5存	1mm大の砂粒子(石英、赤 褐色粒子など)や多く含む	普通	にぶい黄褐色	外:2~3条の浅い凹線状文・ヨコナ ナナ・ハケ目→周底文・ナダ→ミガキ 内:ナナ・ハケ目(5本/1cm)・ケリ上 げ→ナナ	
9-5	古志本郷1T 2層	須恵器 壺	肩部 8.0×4.0角	若干の粗砂粒子(長石など) 含む	良好	褐色	外:回転ナナ・底座文・回転ナナ 液状文 内:ヨコナナ	内外面に自然描かか る
11-1	下古志1T(f) SD04 2・3層	須恵器 壺	口径 11.6 口縁部 1/7存	若干の粗砂粒子(長石、石 英など)含む	良好	褐色	外:ナナ・回転ナナ 内:回転ナナ	かえしあり
11-2	下古志1T(f) SD04 1層	須恵器 壺	口径部 4.0×3.0角	1mm以下の砂粒子含む	良好	褐色	内:回転ナナ	かえしあり
11-3	下古志1T(f) SD04 1層	須恵器 壺	底径 9.0 底部 1/2存	粗砂粒子(長石など)含む	良好	褐褐色	外:ヨコナナ・角は曲取りし、丸くな る 底部:回転余切り 内:回転ナナ	
11-4	下古志1T(f) SD04 2・3層	須恵器 壺	底径 9.0 高さ高 0.5 底部 1/6存	粗砂粒子(長石、石英など) 含む	良好	褐色	外:ヨコナナ 底部:ナダ→高台貼付→ヨコナナ 内:ナナ	
11-5	下古志1T(f) SD04 5層	須恵器 壺	肩部 8.0×7.0角	1mm大の砂粒子(長石など) 含み、緻密	良好	褐色	外:平行リリ付 内:同心ヨコナナ	

検査番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm-g) 後半	寸 丈	径 度	色調	成形・装飾・文様	備考
13-1	下古志1T(a) SX01	古式土器 器 底	II径 16.5 II縫縫部幅 0.4 II縫面長 3.0 II縫部 1/2存	微砂粒子(石英、長石など)及び金雲母を多く含む	やや 良好	黄灰褐色	外:端部外に粗面平底面ナゲ・コナガ・下から上のナゲによる脱いだ突 出部・テテハ目→ヨコナゲ→2段の 平行比縫文・刺突文 内:ヨコナゲ・ナゲ・タヌリナゲ(LR)	外面全体にスス付着
13-2	下古志1T(a) SX01 2層	古式土器 器 底	II縫部 3.5×3.5角	微砂粒子(石英、長石など)含む	普通	黄灰褐色	外:端部内傾し丸みのある半坦 面ナゲ・ヨコナゲ 内:ヨコナゲ	外面スス付着
13-3	下古志1T(a) SX01 1層	古式土器 器 底	断面 20.0×9.0角	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)多く含む	普通	黄灰褐色	外:ナゲ→底座突・平行比縫文 内:ヨコナゲ(LR)・タヌリ上段	外面スス付着
13-4	下古志1T(a) SX01	古式土器 器 底	底径 5.9 底厚 1/5存	微砂粒子(石英、角閃石など)多く含む	普通	にぶい黄褐色	底座化若しく腹壁不明	
13-5	下古志1T(a) SX01 1層	古式土器 器 底	底径 3.9 底厚 3/4存	微砂粒子(石英、石英、角 閃石など)含む	普通	暗褐色	底座のかすかに残存する丸底 外:底部:タケ目(4本/1mm) 内:無押さえ	外面スス、内面おこげ 付着
15-1	下古志1T(b) P1 2層	須恵器 片	II径 13.4 II縫部 1/8存	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)含む	良好	灰色	外:圓輪ナゲ 内:圓輪ナゲ	
15-2	下古志1T(b) P1	土器器 片	胸幅 4.0×3.0角	微砂粒子(石英、桂葉褐色 など)含む	普通	淡黄褐色	外:タヌリ(RL)→ハセ目→ナゲ 内:ナゲ	内外面とも未塗り
15-3	下古志1T(b) P2 2層	土器器 片	II縫部 4.5×4.0角	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)多く含む	やや 不良	灰褐色	外:圓輪ナゲ・ナゲ 内:ナゲ・四輪ナゲ・タヌリ(RL)	
15-4	下古志1T(a) P3	土器器 片	II径 11.2 底厚 1/11存	1mm大の砂粒子(石英、角 閃石など)多く含む	普通	淡黄褐色	内:ナゲ	内外面とも未塗り
18-1	下古志1T(c) SD02 1層-4	古式土器 器 大型	断面 6.6 口径 4.6 口縫縫部幅 1.1 II縫面長 5.5 解説最大径 50.6 底径 8.8 ほぼ完形	1~3mmの大砂粒子(石英、 長石、角閃石など)やや 多く含む	普通	淡黄褐色	外:内外面からのナゲにより肥厚させた半底面 ナゲ・ヨコナゲ・1からのナゲにより第1段出した突出 部・ヨコナゲ・タハ目(5本/5mm)+タキヨイ鉛錠～ タハ目(7本/1cm)→ヨコナゲ3段(19-12-12条) +1条の沈線文(点状と終点がずれる)+底状 文+タクナゲ(13本/1cm) 底部:ナゲ 内:ヨコナゲ・ナゲ・タヌリ(RL)→底座丸底・タヌリ(R L)・タヌリ上段・ヨコナゲ・押押さえ	口縫器の一部 及び底部に当 既あり 外面部分的に 若干のスス付 着
19-1	下古志1T(c) SD02 1層-1~2	古式土器 器 器 大型	II径 11.2 II縫部 0.6 II縫面長 3.3 II縫部→頂部 ほぼ完形	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)及び金雲母を含む	普通	にぶい黄褐色	外:端部外に粗面平底面ナゲ・ヨコナゲ・ タハ目(7本/5mm)→ナゲ・小小 状底文具による羽状文・タクナゲ (7本/5mm)→平行比縫文 内:ヨコナゲ・指ナゲ(タケ・ヨコ)・タヌリ (LR)	外面口縫器の一部に 黒斑あり
19-2	下古志1T(c) SD02 1層-1~4	古式土器 器 焼造底	II径 12.5 II縫部 1/8存	1mm大の砂粒子(石英など)多く含む	普通	にぶい黄褐色	外:ナゲ・ハセ目(5本/5mm)→ナゲ 内:カケ目(5本/5mm)・タヌリ(LR)→ ハセ目(5本/3mm)→ナゲ	
20-1	下古志1T(c) SD02 1層-1~4	古式土器 器 大型燒	II径 26.0 II縫縫部幅 0.6 II縫面長 4.0 II縫部 1/2存	微砂粒子(石英、長石、角 閃石)を多く含む若干の2m m大の砂粒子、灰白色粘 土を含む	普通	淡黄褐色	外:端部肥厚した平底面ナゲ・ヨコ ナゲ・下のナゲで脱いた突出部:ヨコ ナゲ・多条の平行比縫文→ハセ 文+ハセ目(6本/5mm) 内:ヨコナゲ・ナゲ・タヌリ(LR)	20-2と同じ・側体の 可能性あり 口縫器の一部に当 既あり 外表面口縫器の一部に スス付着
20-2	下古志1T(c) SD02 1層-1~4	古式土器 器 大型燒	底径 3.4 下半部1/2存	微砂粒子(石英、長石、桂 葉褐色粘土など)多く含む若干 の2~4mmの大砂粒子、 灰白色粘土を含む	普通	淡黄褐色	底座のかすかに残存する丸底 外:端部:タケ目(10本/1cm)→ナゲ 内:タヌリ上段・押押さえ	20-1と同じ・側体の 可能性あり 外表面にスス付着
20-3	下古志1T(c) SD02 1層-1~2	古式土器 器 大型燒	II径 24.0 II縫縫部幅 0.6 II縫面長 4.6 II縫部ほぼ完形	微砂粒子(石英、長石、角 閃石など)及び金雲母を含む	普通	にぶい淡黄褐色 ~灰褐色	外:端部肥厚した平底面ナゲ・ヨコ ナゲ・上下からのナゲにより脱いだ突 出部・ヨコナゲ・タハ目→12条の 平行比縫文・ナゲ・刺突文・ハセ目 (9本/1cm) 内:ヨコナゲ・ナゲ・タヌリ(LR)	外面口縫器の一部に 黒斑あり
20-4	下古志1T(c) SD02 1層-1	古式土器 器 燒	II径 24.0 II縫面長 3.2 II縫部 1/6存	1mm大の砂粒子(桂褐色 粒子、石英など)多く含む	やや 不良	灰白色	外:丸くおさめた端部・ヨコナゲ・上 下からのナゲにより小さく脱いだ突 出部・ヨコナゲ・ナゲ 内:ヨコナゲ・ナゲ・押押さえ・タヌリ (LR)	厚子である 外面口縫器の一部に 若干スス付着

探査番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g)	施上	焼成	色調	成形・算定・文様	備考
20-5	下古志1T(c) SD02 4層	古式土師 器 甕	口径 15.6 口縫部幅 3.1 口縫部 1/8存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)多く含む	良好	淡褐色	外: 脊厚さ丸くおさめた縁部・コナギ・ コナギ・小さな突出部・ヨコナギ 内: ヨコナギ・ナギ・カタナギ(LR)	外面部縁部から突出 部直下にスス付着
20-6	下古志1T(c) SD02 1層-2 4層	古式土師 器 甕	口径 14.8 口縫部長 3.2 口縫部 1/5存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)やや多く含む	普通	淡黃褐色	外: 丸くおさめた縁部・ヨコナギ・あ まり続かない突出部・ヨコナギ・ナギ 内: ヨコナギ・ナギ・カタナギ(LR)	
20-7	下古志1T(c) SD02 1層-2 4層	古式土師 器 甕	口径 16.8 口縫部長 3.4 口縫部 1/5存	1mmの大砂粒子(石英・長 石・角閃石など)やや多く含む	普通	淡黃褐色	外: 丸くおさめた縁部・ヨコナギ・小 さく長い突出部・ヨコナギ・ナギ・多 条の平行弦紋(ワラウツト・工具)・ 刺突文(ヒンヌイ)・刺落不明 内: ヨコナギ・ナギ・カタナギ(LR)	
20-8	下古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 甕	口径 17.0 口縫部幅 0.4 口縫部長 3.1 口縫部 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英・長 石・角閃石など)また金 雲母を多く含む	普通	に赤い黄褐色	外: 縦断面矩形の平凹面ナギ・ ヨコナギ・上からの強いけいによる脱 け出部・ヨコナギ・ナギ(12本/cm)/ 1cm)・平行弦紋文(ワラウツト・工具) ・ヘリズム・ナギ(1本/cm)・平行弦 文(ヒンヌイ)・ハケ目(23本/cm) 内: ヨコナギ・ナギ・カタナギ(LR)	外面部の一部分及 び銅鏡部最大径以下にド ミス付着
20-9	下古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 甕	口径 16.0 口縫部長 3.0 口縫部 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)及び金雲母を 多く含む	普通	淡褐色	外: 丸くおさめた縁部・ヨコナギ・上 下からのナギにより小さく深い突 出部・ヨコナギ・ナギ(5本/mm)/ 1cm)・多条の平行弦紋文(ワラウツト・ 工具)・ヘリズム・斜方四のハ目(13 本/cm) 内: ヨコナギ・ナギ・カタナギ(LR)	外面部以下にスス付着
21-1	下古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 甕	口径 17.0 口縫部幅 0.4 口縫部長 3.0 口縫部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英・長 石・角閃石など)やや多く含む	良好	淡黃褐色	外: 縦断面曲平凹面ナギ・ヨコナギ・ 上からの強いけいによる脱け出 部・ヨコナギ・ナギ・多条の平行弦 文(ヒンヌイ・工具) 内: ヨコナギ・ナギ・カタナギ(LR)	外面部スス付着
21-2	F古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 甕	口径 17.4 口縫部幅 0.35 口縫部長 3.4 口縫部 1/8存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)及び金雲母をや や多く含む	普通	に赤い黄褐色	外: 縦断面平凹面ナギ・ヨコナギ・ 上から強けい突出部・ヨコナギ・ナ ギ(4本/cm)→ナギ 内: ヨコナギ・ヨコナギ→ナギ・カタナ ギ・ナギ(LR)	
21-3	F古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 甕	口径 15.6 口縫部幅 0.4 口縫部長 3.3 口縫部 1/5存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)やや多く含む	普通	淡黃褐色	外: 縦断面平凹面ナギ・ヨコナギ・ 上からナギにより強く突出部・ヨコナギ・ナ ギ(5本/mm)→ナギ 内: ヨコナギ・ヨコナギ→ナギ・カタナ ギ・ナギ(LR)	口縫部及び外壁に 朱塗りが施された 外面部が長め
21-4	F古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 甕	口径 17.0 口縫部長 3.2 口縫部 1/6存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)及び金 雲母をやや多く含む	良好	に赤い黄褐色	外: 丸くしたくおさめた縁部・ヨ コナギ・上からのナギによりやや脱 け出部・ヨコナギ・ナギ(7本/cm) →2段の平行弦紋文(ワラウツト・工 具)・上からド・ヘリズムした刺突 文 内: ヨコナギ・ナギ・カタナギ(LR)	
21-5	下古志1T(c) SD02 1層-1	古式土師 器 甕	口径 17.0 口縫部幅 0.35 口縫部長 3.3 口縫部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石など)含む	良好	に赤い黄褐色	外: 縦断面へ引き出し平凹面ナギ・ ヨコナギ・下からのナギによる脱け出 部・ヨコナギ・ナギ・刺突文 内: ヨコナギ・ナギ・調かいいナギ・カタナ ギ(LR)	内面部縁部におこげ 付着
21-6	下古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 甕	口径 18.6 口縫部幅 0.4 口縫部長 3.5 刺突部最大径 23.2 上半部は鋭先形	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石など)及び金雲母を多 く含む	良好	に赤い黄褐色	外: 圓錐丸みをもつ平凹面ナギ・ ヨコナギ・上からのナギによる脱け出 部・ヨコナギ・ナギ・ヘリズム・刺 突文(7本/mm)・ナギ(13本/cm) 内: ヨコナギ・ナギ・カタナギ(LR)	口縫部へ口縫部の 一部に墨斑あり 外面部最大径以下以 降にスス付着

辨別番号	出土地点	種別 器種	新度数(cm:g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調製・文様	備考
21-7	下古志1T(c) SD02 1層-2-3	古式土師 器 甕	口径 19.6 口縁部幅 0.3 口縁面長 3.7 胴部最大径 23.6 上半部 1/2存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)やや多くまた金 雲母と灰白色粘土を含む	普通	に赤い黄褐色	外: 瓷器外表面小さな平坦面ナガ ・コナナ・上からナガのナガによる長い 突出部・ヨナナ・ハケ目(9本/1cm) →平行行縦文(シラヘ状工具)・ナガ ・ハケ目(8本/1cm) 内: ヨナナ・ナガ・ケヌラナナ(LR)・ケ ヌラナナ上部	外面口縁部の一端及 び胴部最大径以下に スス付着
21-8	下古志1T(c) SD02 1層-1-2	古式土師 器 甕	口径 18.4 口縁部幅 0.35 口縁面長 3.5 胴部最大径 22.3 上半部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英・長 石・角閃石など)及び金 雲母を多く含む	良好	に赤い黄褐色	外: 瓷器外表面平滑ナガ・ヨナナ ・下が緩く受け口状の突出部・ヨナ ・ナガハケ目(9本/1cm)→ナガ・酒 窓・ナガナナ(9本/1cm)→直状文・ナガ ・ハケ目(10本/1cm)→直状文・ナガ ・ハケ目(9本/1cm) 内: ヨナナ・ナガ・ケヌラナナ(LR)・ケ ヌラナナ上部	口縁部へ口縫部の 一部に斯界あり 外面胴部の一部に当 窓あり
21-9	下古志1T(c) SD02 1層-2-3	古式土師 器 甕	高径 25.5 口径 18.0 口縁部幅 0.4 口縁面長 3.3 胴部最大径 21.7 底径 3.8 3/4存	1mm大の砂粒子(石英・長 石・角閃石など)やや多く 含む	良好	黄褐色	外: 脇部外に引き出し平坦面ナガ・ ・コナナ・上からのナガによる小さく 低い突出部・ヨナナ・ナガ・ハケ目(8本/ 1cm)→ヨナナ・ハケ目(10本/1cm) →斜状文(シラヘ状工具)・ナガ行 縦文(ハケ状工具)・ナガ・ハケ目(12本/ 1cm) 内: ヨナナ・ナガ・ケヌラナナ(LR)・ケ ヌラナナ上部+横縫部(アズナ)は部分的 にケヌラナナを行う	底部に焼成後隙孔も しく赤跡あり 外面胴部の一部に当 窓あり
22-1	下古志1T(c) SD02 1層-2	古式土師 器 甕	口径 16.0 口縁部幅 0.3 口縁面長 3.2 口縁部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英・長 石など)多く含む	良好	に赤い黄褐色	外: 瓷器若干外表面平坦面ナガ・コ ナナ・直状文・下からのナガのあ まり突出部・ヨナナ・多角の平行 行縦文(シラヘ状工具)・ハケ目(7本/ 5mm) 内: ヨナナ・直状文(ナガ)・ケヌラナナ(L R)	外面突出部及び口縫 部の一部と肩部下部 にスス付着
22-2	下古志1T(c) SD02 1層-2	古式土師 器 甕	口径 19.2 口縁部幅 0.4 口縁面長 3.1 口縁部 1/8存	1mm以下の砂粒子(石英・長 石・角閃石など)含む	良好	に赤い黄褐色	外: 瓷器外表面平坦面ナガ・ヨナナ ・下からのナガのあまい突出部・ヨ ナナ・ナガ・ハケ目(7本/5mm)→ナガ →平行行縦文+直状文(シラヘ状工 具)・ヨナナ目(9本/1cm)・ハケ 目(9本/1cm) 内: ヨナナ・ナガ・直状文ナガ・ケ ヌラナナ(LR)	外面口縫部に次きこ れば痕あり 外面肩部以下にスス 付着
22-3	下古志1T(c) SD02 1層-4	古式土師 器 甕	口径 16.4 口縁部幅 0.4 口縁面長 3.2 胴部最大径 20.1 底部欠損	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)多くまた金雲母 を含む	良好	に赤い黄褐色	外: 瓷器肥厚した平坦面ナガ・コ ナナ・下からのナガのあまい突出部 ・ヨナナ・ナガ・ハケ目(11本/1cm)→ナ ガ・直状文+平行行縦文(シラヘ状工 具)・ヨナナ目(11本/1cm)→斜突 文(ハケ状工具)・ヨナナ目(11本/1 cm) 内: ヨナナ・ナガ・ケヌラナナ(LR)・ケ ヌラナナ上部+横縫部	外面口縫部に次きこ れば痕あり 外面肩部以下にスス 付着
22-4	下古志1T(c) SD02 1層-2	古式土師 器 甕	口径 18.1 口縁部幅 0.4 口縁面長 3.3 胴部最大径 21.2 下半部 1/3存	1mm大の砂粒子(石英・長 石・角閃石など)多くまた金 雲母を含む	普通	に赤い黄褐色	外: 瓷器わずかに外表面平坦面ナガ ・ヨナナ・あまい突出部・ヨナナ ・平行行縦文(シラヘ状工具)・ハケ 目(7本/5mm)→ナガ・ナガ・ハケ目(14本/ 1cm) 内: ヨナナ・ナガ・ケヌラナナ(LR)・ケ ヌラナナ上部+直状文+横縫部	外面肩部以下にスス 付着
22-5	下古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 甕	口径 5.6 口縁部幅 3.5 口縁面長 1/4存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)やや多くまた金 雲母を含む	良好	に赤い黄褐色	外: 瓷器肥厚して丸みをもつ平 坦面ナガ・ヨナナ・下が緩い突出部 ・ヨナナ・縦かく横のナガ・ナガ ・ハケ目(7本/1cm) 内: ヨナナ・ナガ・直状文ナガ・ケ ヌラナナ(LR)	外面口縫部にスス付 着

標記番号	用上地點	種別 器種	計測値(cm・g)	崩上	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
22-6	F古志1T(c) SD02 4層	古式土師 器 壺	口径 16.4 口縁断面幅 0.35 口縁面長 3.5 口縁部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)やや多 <含む	良好	灰黃褐色	外: 瓶部外曲平底面ナラ・ヨコナラ・ あまい突出部・ヨコナラ・ナラ且つ ヨコナラ・タケハクノ一様の平行沈 縮実(タケナシ状)工具ナラ・酒し 内: ヨコナラ・ナラ・タケナシナラ(L.R.)	外曲ス付着
22-7	下古志1T(c) SD02 1層-2	古式土師 器 壺	口径 16.0 口縁断面幅 0.35 口縁面長 3.2 口縁部 1/10存	微砂粒子(石英・長石など) 多く含む	良好	灰黃褐色	外: 瓶部起算した平坦面ナラ・ヨコ ナラ・下からのナラのあまい突出部 ・ヨコナラ 内: ヨコナラ・ナラ	外曲口縁部にス付 着
22-8	下古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 壺	口径 16.0 口縁断面幅 0.4 口縁面長 3.2 口縁部 1/9存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)多くまた金雲母 を含む	良好	灰黃褐色	外: 瓶部起算した平坦面ナラ・ヨコ ナラ・→ヨコの平行波線文(タケナシ 工具) 内: ヨコナラ・ナラ・タケナシ(L.R.)	外曲ス付着
22-9	下古志1T(c) SD02 1層-1・2	古式土師 器 壺	口径 16.0 口縁断面幅 0.35 口縁面長 3.1 口縁部 1/9存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)多く含 む	普通	灰黃褐色	外: 瓶部起算瓶底の平坦面ナラ・ヨコ ナラ・→3本1組の刺突文(タケナシ 工具)・あまい突出部・工具に上 る押しひげ痕・ヨコナラ 内: ヨコナラ・受け口面に指押され 外: 瓶部外折平底面ナラ・ヨコナラ・ 上からナラによる深い突出部 ・ヨコナラ・風化著しく不規則である が、平行波線文がわざりに残存 内: ヨコナラ・ナラ・タケナシ(L.R.)	外間に若干のス付 着
22-10	下古志1T(c) SD02 1層-2	古式土師 器 壺	口径 17.0 口縁断面幅 0.4 口縁面長 3.0 口縁部 1/8存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)含む	普通	に赤い黄褐色	外: 瓶部凸面平底面ナラ・ヨコナラ・ 下からナラによる深い突出部 ・ヨコナラ・風化著しく不規則である が、平行波線文がわざりに残存 内: ヨコナラ・タケナシナラ(L.R.)	外間に若干のス付 着
22-11	下古志1T(c) SD02 1層-2	古式土師 器 壺	口径 18.0 口縁断面幅 0.4 口縁面長 3.1 口縁部 1/8存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)やや多く含む	普通	に赤い黄褐色	外: 瓶部凸面平底面ナラ・ヨコナラ・ 下からナラによる深い突出部 ・ヨコナラ・風化著しく不規則である が、平行波線文がわざりに残存 内: ヨコナラ・タケナシナラ(L.R.)	口縁部に吹きこぼ れ模様に吹きこぼ れ模様
22-12	下古志1T(c) SD02 1層-1	古式土師 器 壺	口径 19.6 口縁断面幅 2.8 口縁部 1/6存	1.5mm大的砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)やや多 く、また金雲母を含む	良好	灰黃褐色～灰 黄色	外: 内に丸め込んだ瓶部・ハケ目(5 本/2mm)・ヨコナラ・下が太みを帶 びた受け口面の突起部・ヨコナラ・ ナラ・ハケ目(5本/1cm)・ナラ・波紋 文(タケナシ工具) 内: ヨコナラ・ナラ・タケナシナラ(L.R.)・ケ メリ・ナラ	外間に縦部及び側部 の一帯に若干ス付 着
22-13	下古志1T(c) SD02 1層-2	古式土師 器 壺	口径 17.2 口縁断面幅 2.9 口縁部 1/4存	1.5mm大的砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)やや多 く含む	良好	に赤い黄褐色	外: 内に丸め込んだ瓶部・ハケ目(5 本/6mm)・ヨコナラ・下からナラのナラ 繰り受け口状の突起部・ヨコナラ・タ ケ目(6本/5mm)・ヨコナラ・ヨコハ 目(5本/5mm) 内: ヨコナラ・一部指押痕底・ナラ・ タケナシ(L.R.)	外間に若干のス 付着
22-14	下古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 壺	口径 19.0 口縁断面幅 3.0 4.8×4.6mm角	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)やや多 く含む	良好	灰黃褐色	外: 内に丸め込んだ瓶部・ヨコナラ・ あまい突出部・ヨコナラ 内: ヨコナラ・タケナシナラ(L.R.)	外曲口縁部底下及 び突出部にス付着
23-1	下古志1T(c) SD02 1層-1・2	古式土師 器 壺	瓶底最大径 21.4 底部 11.5 下半部 1/5存	1~2mm大的砂粒子(石英・ 長石・石英断面・角閃石不 然)多く含む	不良	に赤い黄褐色 ～灰黄色	外・底部: 剥落著しいが、ハケあ るいはナラししき瓶底が剥離され る 内: 繩いナラ	瓶部は球形に張る 底部は厚底 外曲朱墨り無あり
23-2	F古志1T(c) SD02 1層-1	古式土師 器 壺	底径 2.8 底部 1/2存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)及び石下の1mm 大的砂粒子を含む	普通	棕褐色	外: ナラ・ナラ 底部: 指押されナラ 内: おこげ付着のため不明	瓶底の平底 瓶底: 指押されナラ 内: おこげ付着のため不明
23-3	下古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器 壺	底径 2.9 底部先形	1~2mm大的砂粒子(石英・ 長石など)やや多く含む	普通	灰黃褐色	外・底部: ナラ 内: ナラ・つけ・指押痕底	底部のわずかに張る 平底 外曲ス付着
23-4	F古志1T(c) SD02 4層	古式土師 器 壺	底径 2.8 底部 3/4存	1mm大的砂粒子(石英・長 石・角閃石など)多くまた 金雲母を含む	普通	灰黃褐色	外: ナラ・ハケ目(6本/5mm)・ナラ 底部: ハケ目→ナラ 内: ナラ上げ・指押痕底	瓶底の底跡を残した 丸底 外曲ス付着
23-5	下古志1T(c) SD02 1層-1	古式土師 器 壺	底径 5.5 底部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英・長 石など)含む	普通	浅黄色	外: ナラ 内: ハケ目(7本/5mm)→部分的 にナラ 内: ケメリ上げ	瓶底のわずかに張る 平底 外曲ス付着

探査番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm/g) 残存率	地土	施成	色調	成形・質感・文様	備考
23-6	F古志1T(c) SD02 1層-1	古式土師 器	底径 3.5 底部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英、 長石など)含む	普通	淡黄褐色	外:ナガ 内:ヘケ日(6本/5mm)	施錠の痕跡を残した 丸瓶
23-7	F古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器	脚部最大径 21.3 底径 4.8 下平部 2/3存	1mm以下の砂粒子(石英、 長石、角閃石など)多く含 む	良好	淡黄褐色～黃 褐色	外:黒化著しく開裂不明、ナガ 日(10本/1cm) 底面:ヘケ日(10本/1cm) 内:ナガ(1.0)×面々指揮压痕、ケ ズリ上げ一指痕压痕	後縫の弦路を残した 丸瓶 底部に直径8mmの穿 孔あり
23-8	F古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器	残存高さ 17.0 口径 28.0 脚部直径 5.0 下平部 1/4欠損 脚部底欠損	1mm以下の砂粒子(石英、 長石、角閃石など)及び青 玉の2~3mm大の砂粒子 含む	良好	淡黄褐色	外:ヨタナテ、ナガ日→細かいヨタ ナガ 内:ナガ日→放射状のハラガキ 脚内:粗いナガナ(隕状工具か) ナガ日(10本/1cm)	円盤束縛由(内盤は手 捏ね、刻度無なし) 耳口脚部は裏外反 する 口縫端対となる2ヶ 所に墨跡あり
23-9	F古志1T(c) SD02 1層-1	古式土師 器	口径 19.0 口縫部 1/8存	微砂粒子(石英、角閃石な ど)含む	良好	にぶい黄褐色	外:ヨタナテ、細かいヨタナガ 内:ナガ日→ヨタナガ	口縫部は内窓外反 する
23-10	F古志1T(c) SD02 1層-1~5	古式土師 器	口径 26.0 口縫部 1/4存	微砂粒子(石英、長石、角 閃石など)及び若干の金 雲母を含む	普通	にぶい黄褐色	外:細かいヨタナガ→ナガ日 内:ナガ、ヨタナガ、ナガ月→ヨタナ ナガ	汚い模状の坏部
23-11	F古志1T(c) SD02 1層-1	古式土師 器	接合部径 3.7 接合部先端 耳・脚部底欠損	1mm以下の砂粒子(石英、 長石、角閃石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外:細かいヨタナガモ・ヨタナガ 内:ヨタナガ 脚内:ナガ	円盤束縛法(刻度無 あり)
23-12	F古志1T(c) SD02 1層-1	古式土師 器	底径 21.4 脚部底 1/5存	1mm大の砂粒子(石英、長 石、角閃石など)及び金雲 母を含む	良好	にぶい黄褐色	外:ハラ日→ナガモ・ナガ(中央に1 条浅溝) 内:ナガ(5RL)・ナガ日(10本/3mm)・ ヨコナガ	脚部間に墨跡あり
23-13	F古志1T(c) SD02 1層	古式土師 器	接合径 3.6 接合部 1/3存	微砂粒子(石英、長石、角 閃石など)及び金雲母を含 む	普通	暗褐色	外:黒化著しく開裂不明 内:ナガ(絞り目により瓶長の半位)	円盤束縛法痕跡あり 内窓外反
23-14	F古志1T(c) SD02 1層-2	古式土師 器	接合部径 15.0 脚部底 1/3存	微砂粒子(石英、長石、角 閃石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外:ヨタナガ 内:ヨタナガナ(5RL)・ナガ→扇形压痕 ナガ	
23-15	F古志1T(c) SD02 1層-2	古式土師 器	残存高さ 14.3 口径 34.0 接合部径 6.7 口縫部 1/4存 脚部底欠損	微砂粒子(石英、長石、角 閃石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外:口縫部ヨタナガ・脚部黒化著しく 開裂不明・脚部底ナガ日(7本/5 mm)・ナガ日→ヨタナガ 内:ヨタナガ 脚内:ナガナ(5RL)→ヨタナ 脚部は黄状とならずヲ ッパ状に聞き、毎い	口縫部は接合口縫 状 円盤束縛法(刻度無 あり)
23-16	F古志1T(c) SD02 1層-1~2	古式土師 器	残存高さ 4.8 口径 13.0 接合部径 3.3 脚部底欠損	微砂粒子(石英、長石、角 閃石など)及び金雲母を含 む	普通	にぶい黄褐色	外:ナガ(中央に1条浅溝)→ヨタナ 内:ヨタナガ・指揮させ 脚内:ナガ?	
23-17	F古志1T(c) SD02 1層-1~2	古式土師 器	接合部径 3.5 接合部先端 耳部 1/12存 脚部底欠損	微砂粒子(石英、長石、角 閃石など)含む	良好	にぶい黄褐色	外:ヨタナガ→ヨタナガ+絞めるため のヨタナ 内:ヨタナ 脚内:ナガナ(5RL)	
23-18	F古志1T(c) SD02 1層-2	古式土師 器	口径 15.2 口縫部 1/4	微砂粒子(石英、長石、角 閃石など)及び金雲母を含 む	良好	にぶい黄褐色	外:ヨタナガ・ナガ日(8本/5mm)・粗 いヨタナ 内:ヨタナガ→ヨタナ(5RL)→ヨタナ	
23-19	F古志1T(c) SD02 1層-1	古式土師 器	口径 15.9 口縫部 1/7存	1mm以下の砂粒子(石英、 長石、角閃石など)及び金 雲母を含む	良好	にぶい黄褐色	外:ヨタナガ→ヨタナ 内:ヨタナガ→粗いヨタナ(砂移動が 観察される)	口縫部の一條に墨跡 あり
24-1	F古志1T(c) SD02 1層-3	古式土師 器	口径 24.2 箇部長 1.9 箇部径 10.6 受部径 7箇部 1/2存	微砂粒子(石英、長石な ど)含む	普通	にぶい黄褐色	外:ヨタナ 内:ヨタナ・ヨタナナ(5RL)・ナガ(5RL)	

探査番号	出土地点	器種	計測値(cm・g)	施土	傷度	色調	成形・調製・文様	備考
			既存					
24-2	下古志1丁(c) SD02 4層	古式七面 器 斎形器合 器	口径 21.4 受部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英、 長石、角閃石など)及び金 雲母を含む	良好	にぶい黄褐色	外:ヨコナテ 内:ヨコガキ・カギ	外面一辺に墨斑あり。 内面口縁部の一部に スス付着
24-3	下古志1丁(c) SD02 1層-2	古式七面 器 斎形器合 器	口径 24.8 受部 1/4存	2mm以下の砂粒子(石英、 長石、角閃石など)やや多 くまた金雲母を含む	普通	淡黃褐色	外:ヨコナテ 内:丁寧なナナ・ヨナ	
24-4	下古志1丁(c) SD02 1層-3	古式土師 器 斎形器合 器	口径 26.1 受部 1/12存	微細粒子(石英、長石、角 閃石など)を多くまた金雲 母を含む	普通	淡黃褐色	外:ヨコナテ 内:ヨナ・中油から丁寧なナナ	
24-5	下古志1丁(c) SD02 1層-2-3	古式土師 器 斎形器合 器	口径 25.0 受部 1/5存	1mm以下の砂粒子(石英、 長石、角閃石など)やや多 くまた金雲母を含む	普通	灰白色	外:ヨコナテ 内:ヨナ・丁寧なナナ	口縁部が大きく外反す る
24-6	下古志1丁(c) SD02 1層-2	古式土師 器 斎形器合 器	7.0×4.0角 受部出露 1/6存	1mm以下の砂粒子(石英、 長石、角閃石など)やや多 く含む	普通	淡黃色	外:ヨコナテ 内:ヨナ(単位不明)	
24-7	下古志1丁(c) SD02 1層-2	古式土師 器 斎形器合 器	4.0×2.5角 底盤	微細粒子(石英、長石、角 閃石、概褐色粒子など)や や多くまた金雲母を含む	普通	淡黃褐色	外:ヨコナテ 内:ヨナ・丁寧なナナ	受部下側のナナがあま く受口状
24-8	下古志1丁(c) SD02 1層-2	古式土師 器 斎形器合 器	筒脚径 12.4 底径 22.4 脚部一側破 ほぼ完形	微細粒子(石英、長石、角 閃石など)また金雲母を含 む	普通	にぶい淡褐色	外:ヨコナテ→4本1組のヘラ指 内:丁寧なナナまたはヨナ・ナナ・ 稚いナナまたはヨナナナ(単位は判 るが方向不明)・ヨコナテ	外面にヘラ指が認め られる
24-9	下古志1丁(c) SD02 1層-3-4層	古式土師 器 斎形器合 器	筒脚径 12.4 底径 22.0 筒脚 1/2存 脚部 3/4存	2mm以下の砂粒子(石英、 長石、概褐色粒子、角閃 石など)多くまた金雲母を 含む	普通	淡黃褐色	外:ヨコナテ 内:ヨナ・ナナズ(RL)・ナナ・ケズ(L R)・ヨコナテ	
24-10	下古志1丁(c) SD02 1層-2-3層	古式土師 器 斎形器合 器	底径 20.8 脚部 1/2存	1.5mm以下の砂粒子(石英、 長石、角閃石など)やや 多くまた金雲母を含む	普通	淡黃褐色	外:ヨコナテ 内:ケズ(R)・ヨコナテ	外面に1ヶ小さな円形 の施成痕跡孔あり
24-11	下古志1丁(c) SD02 1層-1-2	古式土器 古式土器 斎形器合 器	脚部最大径 11.2 脚部 1/6存	1mm以下の砂粒子(石英、 長石など)含む	良好	暗緑褐色	外:ヨコナテ・ハ目→ヨコナテ・ケズ →ヨナ・3条の同線文→斜状文 (ケズ状工具)→3条の回線文・(一 船の目→)ヨナ・稚いナナ 内:ヨコナテ・指揮丸ナナ・ケズ(L R)	外面部分的にスス付 着 内面部分的におこげ 付着
24-12	下古志1丁(c) SD02 1層-2	古式土器 古式土器 小型鉢	口径 12.0 脚部最大径 11.6 口縁部 1/3存	1mmの大砂粒子(石英、長 石、角閃石など)含む	普通	暗褐褐色	外:引き伸ばした船形・ヨコナテ・ ほとんど突出しない突出部・ナナ→ 押し上げ文(?)・工具・小さい 施成のされた斜状文・ヨナ 内:ヨコナテ・ケズ(RL)	
24-13	下古志1丁(c) SD02 1層-3	古式土師 器 三段鉢	5.0×3.5角 口縁部	微細粒子(石英、長石、角 閃石など)多くまた金雲母 を含む	普通	灰黃褐色	内:至錐状の端部・丁寧なナナ	
25-1	下古志1丁(c) SD02 1層-2	弥生土器 器	7.0×4.0角 口縁部	1mmの大砂粒子(石英、長 石など)含む	普通	暗黃褐色	外:風化著しく調色不明・ヨコナテ 内:風化著しく調色不明・ケズ(R L)	口縁部に墨斑あり 外面崩損にスス付着
25-2	下古志1丁(c) SD02 1層-2	弥生土器 器	口縁直径 1.5 4.5×3.5角	1~2mmの大砂粒子(石英、 長石など)含む	普通	淡黃褐色	外:浅い3条の回線文・ヨコナテ 内:ヨコナテ・ヨナ・ケズ(RL)	外面又付着
25-3	下古志1丁(c) SD02 1層-1	弥生土器 器	口縁直径 1.4 4.0×3.0角	1~2mmの大砂粒子(石英、 長石など)多く含む	普通	暗緑褐色	外:3条の同線文(断面U字型)・ヨ コナテ 内:ヨコナテ・ナナ・ケズ(RL)	外面に縫合ス付着
25-4	下古志1丁(c) SD02 1層-2	弥生土器 器	口縁直径 1.6 4.0×3.0角	1mmの大砂粒子(石英、長 石など)含む	普通	暗緑褐色	外:3条の同線文(断面U字型)・ヨ コナテ 内:ヨコナテ・ハケ目・ナナ・ヨコナテ・ナ ナ	
25-5	下古志1丁(c) SD02 1層-1	弥生土器 器	口縁直径 1.9 4.0×3.5角	1~2mmの大砂粒子(石英、 長石など)やや多く含む	普通	にぶい黄褐色 色	外:4条の同線文(断面幅広のV字 型)・ヨコナテ 内:ヨコナテ	
25-6	下古志1丁(c) SD02 1層-1	弥生土器 器	口径 22.6 口縁直径 1.6 口縁部 1/11存	1mm以下の砂粒子(石英、 長石など)やや多く含む	やや 不良	にぶい黃褐色	外:3条の同線文(断面幅広のV字 型)・ヨコナテ・工具による押しあみ 痕・ヨナ? 内:ヨコナテ・強いヨコナテ・風化し く調色不明	

序図番号	出土場所	種別 器種	計量値(cm・g) 残存率	地 士	後皮	色 調	形・質・量・文様	備考
25-7	F古志1T(c) SD02 7層	赤土器 甕	口縁面長 1.7 3.0×3.0角	1mm大の砂粒子(石英・長 石など)含む	普通	暗黄褐色	外:3条の回籠文(断面U字状)・3コ ナナ・縦かいテラハ目(10本/5mm) 内:ヨコナナ・ナナ・ケズギ(LR)	外面部部以外にスス 付着
25-8	F古志1T(c) SD02 1層-1	赤土器 甕	口縁面長 1.8 5.0×4.0角	1mm大の砂粒子(石英・長 石など)及び若干の2~3m m大の砂粒子を含む	普通	暗黄褐色	外:4本の回籠文(断面幅広のV字 状)と沈雜状・3コナナ 内:ケタ目(5本/5mm)・ヨコナナ・ミキ ・ナナ(LR)	外面部部以上及び内 部口縁部にスス付着
25-9	下古志1T(c) SD02 1層-3	赤土器 甕	口径 15.8 口縁面長 1.8 口縁部 1/9存	1mm以下の砂粒子(石英・長 石・角閃石など)少數含 む	普通	にぶい黄褐色	外:4条の回籠文(断面幅広のV字 状)と沈雜状・3コナナ 内:ケタ目(5本/5mm)・ヨコナナ・ミキ ・ナナ(LR)	外面部付着
25-10	F古志1T(c) SD02 1層-2	赤土器 甕	口縁面長 1.8 3.5×3.0角	1mm大の砂粒子(石英・長 石・角閃石など)含む	普通	灰黃褐色～灰 黃褐色	外:ヨコナナ 内:ヨコナナ・ナナ・ケズギ(LR)	口縁部下端にスス付 着
25-11	F古志1T(c) SD02 1層-2	赤土器 甕	6.0×3.5角	1~2mm大の砂粒子(石英 ・長石・角閃石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外:4条以上の回籠文(断面幅広 のV字状)・3コナナのコナナ 内:風化著しく測定不明・ヨコナナ (RN)	内部に尖地り 内部顎部以下におこ る付着
25-12	F古志1T(c) SD02 1層-1	赤土器 甕	口径 15.7 口縁面長 2.0 口縁部 1/8存	1mm大の砂粒子(石英・長 石など)や多く含む	普通	にぶい黄褐色	外:3条の回籠文(断面幅広のU字 状)・ヨコナナ・強いヨコナナ 内:ヨコナナ・ナナ・ケズギナナ(LR)	外面部部以上にスス 付着
25-13	下古志1T(c) SD02 1層-2	赤土器 甕	口径 11.2 口縁部 1/7存	1~2mm大の砂粒子(石英 ・長石など)及び若干の角 閃石を含む	普通	にぶい黄褐色	外:3条以上の回籠文(断面幅広 のV字状)・ヨコナナ・ヨコナナ 内:ヨコナナ・ナナ・ケズギナナ(LR)	外面部部分的にスス付 着
25-14	F古志1T(c) SD02 1層-1~4層	赤土器 甕	口径 15.7 口縁面長 3.0 口縁部 1/8存	微砂粒子(石英・角閃石・ 長石など)や多く含む	普通	にぶい黄褐色 ～暗黃褐色	外:ナナ・16~17条の回籠文・ヨ コナナ・風化著しく測定不明 内:ナナ・ヨコナナ(LR)	外面部部上半に スス付着
26-1	下古志1T(i) 2層	赤土器 甕	口径 16.0 口縁面長 2.0 口縁部 1/8存	1~3mm大の砂粒子(長石 ・石英など)含む	普通	にぶい黄褐色	外:6条の回籠文(断面U字状及 び沈雜状)・ヨコナナ 内:ヨコナナ・ヨコナナ(LR)→ヨコナ (RN)	外面部部にスス付 着
26-2	F古志1T(c) 出土層位不明	赤土器 甕	口径 13.4 口縁面長 1.9 口縁部 1/5存	1~4mm大の砂粒子(石英 ・長石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外:5条の新田縞文(断面U字状及 び沈雜状)・ヨコナナ・新変遷 (ヨコナナ真)	外面部部にスス付 着
26-3	下古志1T(i) 古式土師 器 甕	頭径 14.3 縁部 1/6存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)及び若干の1mm 大の砂粒子を含む	普通	淡黄色	外:ヨコナナ・縦巻きの羽状文・ハ ナナ(8本/1cm)→ナナ 内:ヨコナナ・ヨコナナ(LR)	外面部部上半にス ス付着	
26-4	下古志1T(e) 6層	古式土師 器 甕	口縁面長 5.3 11.0×7.5角	1mm以下の砂粒子(石英・ 角閃石・長石など)含む	普通	にぶい黄褐色	外:丸くあきめた縦巻き・ヨコナナ あまい突出部・ヨコナナ 内:ヨコナナ・ナナ・ケズギナナ(LR)	かなり外側する口縁部 に付着
26-5	下古志1T(e) 4層	古式土師 器 甕	口径 15.4 口縁面長 3.2 口縁部 1/3存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)及び若干の1~ 2mm大の砂粒子を含む	普通	にぶい黄褐色	外:丸くあきめる縦巻き・ヨコナナ・上 下からのナナによる小さく深い突 出部・ヨコナナ・ナナ 内:ヨコナナ・ナナ・ヨコナナ(LR)	外面部部の一部にス ス付着 内部容器付着におこ る付着
26-6	下古志1T(e) 4~5層	古式土師 器 甕	口縁面長 4.6 7.0×6.0角	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石色粒子・長石・角閃 石など)や多く含む	普通	にぶい黄褐色	外:丸くあきめた縦巻き・ヨコナナ・下 からの方により小さく突出した突 出部・ヨコナナ→新美文(ヨコナナ工具)→ 新美文 内:ヨコナナ・ナナ・ケズギナナ(LR)	外面部部分的にスス付 着
26-7	下古志1T(a~ c) 2層	古式土師 器 甕	口径 18.0 口縁面長 0.4 口縁面長 3.6 口縁部 1/8存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石など)や多く含む	良好	暗黄褐色	外:縦部外引きの平行面ナナ・ヨ コナナ・上からの方により小さく深 い突出部・ヨコナナ・ヨコナナ→多 条の平行沈雜文(ヨコナナ工具)→ 新美文 内:ヨコナナ・ナナ・ケズギナナ(LR)	外表面及び内部口縁部 にススが黒く染着
26-8	F古志1T(i) 2層	古式土師 器 底部	底径 4.2 底部 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石・安山岩など など)含む	普通	淡褐色	外:底面・ナナ 内:ナナ上にげ・底ナナ	底部～せら上りにか けて黒斑あり
26-9	下古志1T(i) 3層	古式土師 器 底部	合板縫隙 3.6 底部無	微砂粒子(石英・長石など) や多く及び若干の2mm 大の砂粒子を含む	普通	淡褐色～灰 白色	外:ヨコナナ 内:ヨコナナナナ 脚部:ナナ	

標本番号	地 点	種 別 器 形	計測値(cm・g)	地 士	造 成	色 質	成 形・調 整・文 標	備 考
26-10	F古志1T(e) 2・3層	古式土罐 蓋、半型鉢	口径 14.1 口縁部 1/8存	1mm以下の砂粒子(石英・長 石・安山岩など)含む	普通	にぶい黄褐色 色	外:粗い包帯? 内:細いテリ上げテラ	
26-11	F古志1T(4 ~c) 2層	東恩器 蓋	口径 10.1 最大径 11.4 口縁部 1/7存	若干の長石含む	良好	灰オーリーブ色	外:コナナ? 内:同軸ナナ?	小さなかえりあり
26-12	F古志1T(a ~c) 出土層位不明	東恩器 蓋	口径 8.6 最大径 10.4 口縁部 1/7存	若干の石英・長石含む	良好	暗灰色	外:四軸ナナ?(LR)・同軸ナナ? 内:同軸ナナ?	小さなかえりあり
26-13	F古志1T(s) 3層	東恩器 蓋	2.0×2.0角	1mm以下の石英・長石含 む	良好	灰色 断面:小豆色	外:ナナ?・同軸ナナ? 内:同軸ナナ?	
26-14	F古志1T(d) SD	東恩器 蓋	直径 7.6 高台高 0.5 底部 1/5存	1mm以下の石英・長石含 む	良好	オリーブ灰色	外:コナナ?・同軸ナナ?・ナナ? 底部:高台貼付・同心円ナナ? 内:コナナ?・ナナ?	外面に高台貼付痕 線に残る
26-15	F古志1T(d) 4層	東恩器 蓋	直径 9.0 高台高 0.4 底部 1/4存	1mm以下の石英・長石含 む	良好	暗灰色	外:四軸ナナ? 底部:ナナ?・高台貼付・同軸ナナ? 内:同軸ナナ?・ナナ?	
26-16	F古志1T(d ~f) 2層	東恩器 蓋	直径 9.8 高台高 0.4 底部 1/7存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石など)含む	良好	灰オーリーブ色	外:コナナ? 底部:ナナ?・四軸ナナ?・コナナ? 高台:ナナ?・高台貼付・同軸ナナ? 内:ナナ?	
26-17	F古志1T(b) 3層	東恩器 蓋	直径 6.0 底部 1/4存	1.5mm以下の長石・石英 含む	良好	灰オーリーブ色	外:コナナ? 底部:系切り・外周に粘土ナナ?傳 はし痕 内:コナナ?・ナナ?	
26-18	F古志1T(f) 出土層位不明	東恩器 蓋	直径 6.8 底部 1/3存	1mm以下の長石・石英含 む	良好	暗灰色	外:前段のため調整不良・コナナ? 底部:同軸ナナ? 内:ナナ?	
26-19	F古志1T(u) 3層	東恩器 蓋	直径 8.9 高台高 0.9 底部 1/8存	若干の長石含み、微密	良好	淡灰色～暗灰 色	外:前段のため調整不良・コナナ? 底部:同軸ナナ? 内:ナナ?	
26-20	F古志1T(b) 3層	東恩器 蓋	直径 12.1 底部 1/6存 高台端部欠損	1mm以下の長石・石英少 量含む	良好	小豆色～灰色	外:同軸ナナ?(LR)・コナナ? 底部:四軸ナナ? 内:ナナ?	
26-21	F古志1T(d ~f) 2層	東恩器 蓋	直径 9.3 高台高 0.6 底部 1/3存	1mm以下の長石・石英及 び若干の5mm以上の長石を 含む	良好	にぶい灰色	外:コナナ? 底部:回軸点切り・外周四軸ナナ? 内:同軸ナナ?	
26-22	F古志1T(e) 4層	東恩器 蓋	接合部径 5.4 接合部 1/2存	1mm以下の長石・石英含 む	良好	暗褐色	外:コナナ? 内:ナナ? 外:四軸ナナ?	杯内面は墨跡でクリッ ルしている
26-23	F古志1T(f) 4層	東恩器 蓋	接合部径 5.0 接合部 1/2存	1mm以下の長石・石英含 む	良好	暗灰色	外:同軸ナナ? 内:ナナ? 外:四軸ナナ? 内:同心円ナナ?	スカシの削れ込みが 欠損した脚部で規整さ れらる
26-24	F古志1T(a) 3層	土師器 坪	直径 5.2 底部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英・ 角石など)少量また金雲 母を含む	普通	浅黃褐色	外:コナナ? 底部:系切り 内:磨滅のため調整不明	内面磨滅でツルツルし ている
26-25	F古志1T(f) 4層	土師器 坪	直径 5.5 底部 1/4存	微砂粒子(石英・長石・角 石など)含む	良好	にぶい黄褐色	外:ナナ? 底部:系切り 内:同心円ナナ?	
26-26	F古志1T(a~c) 2層	土師質 窓	10.6×6.0角	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角石など)多く含 み、粗緻	普通	にぶい淡黄色	金面:指押さえ	記の角の部位 本体との接合部から剥 落したもの
26-27	F古志1T(a~c) 2層	土師質 土型支撑	底面高 7.0 幅 6.6 厚さ 4.5 下半部及び内輪欠 損	1mm以下の砂粒子(長石・ 石英など)含む	普通	にぶい黄褐色 色	全面:指押さえ	
26-28	F古志1T(d) 3・4層	青銅 口縁部	口径 9.2 口縁部 1/11存	無	良好	銅製:オリーブ 色 断面:灰白色	軽量のため調整不明 外:内折したL字状口縁部・1条の 弦縫・1条の突帯文	
26-29	F古志1T(d) 2・3層	唐津燒 高台付皿	底径 4.2 高台高 0.4 底部はぼ定形	無	良好	純白:青白色 底台:淡黄褐色	見込みは? - ナック状に 釉薬を剥き取り 削り出し窓台及び底部 は露肉	

辨別番号	出土地点	種類 分類	計測値(cm・g) 保存状態	船上	船底	色調	形・構造・実様	備考	
29-1	下古志2T(d) SE01 1層	土師器 灰陶	底径 6.6 底部 1/3存	1mmの大砂粒子(石英・長石など)含む	普通	褐色	外:ヨコナラ 底部:角切り 内:同心円ナラ		
29-2	下古志2T(d) SE01 2-3層	土師器 高台灰陶	3.5×3.0角	1mmの大砂粒子(石英・長石など)含む	普通	に赤い黄褐色	外:ヨコナラ 底部:ヨコナラ・ナラ 内:同心円ナラ		
29-3	下古志2T(d) SE01 1層 (b)4-6-8層	素焼き 擂鉢	口径 19.0 口縁部 1/6存	粗砂粒子(石英・長石など) 少量穴開	普通	淡黄褐色	外:ヨコナラ 内:ヨコナラ→粗り目(ハケ状で細か い)	内外面同一箇所に墨 斑あり	
31-1	下古志2T(b) SD04 1層	陶土器 甕	6.0×4.0角	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角 閃石など)及び金 雲母を含む	普通	淡黄褐色	外:ヨコナラ(既く縮広の形 面V字状)-ヨコナラ・粗粒斑文 帶 内:ヨコナラ・ナラ		
31-2	下古志2T(b) SD04 1層	陶土器 甕	底径 11.6 脚部 1/7存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)及び若干の2mm 以上の砂粒子含む	普通	褐色	外:ヨコナラ・ヨコナラ・ナラによる3条 の沈曲線-肩日 内:ナラ(RL)-ヨコナラ		
31-3	下古志2T(b) SD05 4層	陶土器 甕	7.0×6.0角	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角 閃石など)含む	普通	に赤い黃褐色	外:ナラ→ヒッタの長い2段の縮 内:点文 内:ナラ・ナラ上げ		
32-1	下古志2T(d) 8層	陶土器 甕	口径 19.6 口縁部 1.2 胴部最大幅 23.2 上半部 1/5存	微砂粒子(石英・長石など) 含む	普通	褐灰褐色	外:2条の凹溝文(沈曲線)-ヨコナラ ・ハコロナラ・ハケ目(7本/cm)・ナ ラ・脚点文・ナカナギ 内:ヨコナラ・ナラ上げナラ→ヨコナ ラ(ハケ目)・ヨコナラ上げナラ→ヨコナ ラ(ナカナギ)	表面部分的にスヌ 付 内面部分的におこげ 付着	
32-2	下古志2T(b) 尾地(6-8+10 層)	陶土器 甕	2.5×2.0角	1mm以下の砂粒子(石英・長 石・角閃石・安山岩な ど)含む	普通	淡黄褐色	外:2条の凹溝文(沈曲線)-ナラ・ヨ コナラ 内:ヨコナラ・ナラ		
32-3	下古志2T(d) 5層	陶土器 甕	5.5×5.0角	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)含む	普通	に赤い黄褐色 内:ヨコナラ・ナラ	外側底部下位にスヌ 付 内面口縁部におこげ 付着		
32-4	下古志2T(d) 2層	陶土器 甕	底径 6.2 底部 1/4存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)含む	普通	黄褐色	外:底部:ナラ 内:おこげのため削除不明	内面底部におこげこ びり付き	
32-5	下古志2T(d) 5層	陶土器 甕	底径 6.1 底部 1/9存	微砂粒子(石英・長石・角 閃石など)や多く含む	普通	褐黄灰褐色	外:ナラ(ヨコナラ) 底部:ナラ 内:ナカナギ上げ	外側底部にスヌ付 内面おこげこびり付き	
32-6	下古志2T(b) 尾地(8-12層)	陶器器 高台灰陶	接合部 8.6 底部附近 1/4 存	若干の長石・石英を含む	良好	褐灰褐色～暗灰 色	外:ナラ 底部:余切り→高台付付ナラ 内:同心円ナラ	内面底部におこげこ びり付き	
32-7	下古志2T(d) 3層	陶器器 高台灰陶	底径 11.6 高台真 3.0 1/6存	砂粒子はほとんど含まず堅 硬	良好	黄褐色	外:脚断ナラ 底部:ナラ-高台脚付付ナラ 内:脚断ナラ・ナラ	内面底部にスヌ付 している	
32-8	下古志2T(a) 11層	陶器器 高台灰陶	底径 10.4 底部 1/6存	共石・長石など多く生た表 手の3~3mm大の豊石を含む	良好	灰色	外:ナラ 底部:ヨコナラ→外周脚付ナラ 内:脚断ナラ・ナラ	削り出し高台	
32-9	下古志2T(b) 尾地(8-12層)	陶器器 甕	口径 15.0 口縁部 1/6存	若干の1~2mm大の長石・ 石英を含む	良好	褐灰色	外:ヨコナラ 内:ヨコナラ・ナラ	体部下層にスカシの 切れ込みが保存 内外面とも器面がツル ツルしている	
32-10	下古志2T(b) 尾地(8-8層)	陶器器 甕	直径 9.6 脚部 1/4存	石英・長石含む	良好	灰褐色	外:ヨコナラ 内:ナラ(RL)-脚断ナラ	スカシが欠損した箇所 で被覆される	
32-11	下古志2T(b) 5層	陶器器 甕	底径 4.8 底部はばら形	若干の長石・石英を含む	良好	灰褐色	外:底部:ヨコナラ・ヨコナラ(RL) 底部:脚断ナラ(RL) 内:ヨコナラナラ・同心円ナラ		
32-12	下古志2T(b) 5層	上物器 甕	底径 4.2 底部一部欠損	若干の風化・含み、堅 硬	良好	淡灰褐色	外:ヨコナラ 底部:脚断・脚切 内:同心円ナラ	外側頭部及び底部の 所々にスヌ付着	
32-13	下古志2T(c) 6層	素焼き 擂鉢	底径 11.2 底部 1/7存	若干の砂粒子含み、堅硬	良好	に赤い黄褐色	外:ヨコナラ 内:ナラ・脚断日・ハケ目(8本/5mm) ナラ		

件名	出土地点	種別 器種	計測値(cm-g) 及 存 在	地 土	焼成	色調	成形・調製・文様	備考
35-1	下古志3T(b) SD03	土師器 环	底径 7.0 底部 1/8存	砂粒子はほとんど含まず、 灰っぽく被覆	良好	淡黄褐色	外:回転ナラ 底部:指押され 内:回転ナラ	底部以外朱塗り
35-2	下古志3T(b) SD03	土師器 环	底径 6.2 底部 1/5存	微細粒子(石英・長石など) 含む	普通	淡黄褐色	外:回転ナラ 底部:水切り 内:ナラ	
35-3	下古志3T(b) SD03	土師器 环	底径 7.3 底部 1/6存	微細粒子(石英・長石など) 含む	普通	淡黄褐色	外:底部ナラ 内:風化著しく調査不明	
35-4	下古志3T(b) SD03	土師器 环	底径 6.4 底部 2/3存	若干の微細粒子(石英・長 石など)含む	普通	にぶい黃褐色	外:回転ナラ 底部:ナラ 内:ナラ?	
35-5	下古志3T(b) SD05	土師器 管	6.5×5.0角 管	若干の砂粒子(石英など) 含む	良好	褐色	外:平行タケ目 内:ケ目(7本/1cm)	
35-6	下古志3T(c) SD04	土師器 环	底径 5.3 底部无	1mm以下の砂粒子(長石・ 石英など)含む	普通	淡黄褐色	外:ナラナ 底部:四輪系切り 内:同心円ナラナ	内面部分的にスス付 着
35-7	下古志3T(c) SD04	土師器 环	4.0×3.5角 管	1mm以下の砂粒子(長石・ 石英・角閃石など)多く含 む	普通	淡黄褐色	外:ココナ 底部:水切り 内:ナラ	
35-8	下古志3T(c) SD04	土師器 小皿	2.5×1.5角 管	微細粒子(石英など)若干 含み黒っぽい	良好	にぶい黃褐色	外:ナラ 底部:水切り 内:同心円ナラ	
35-9	下古志3T(c) SD04	土師器 管	5.0×4.0角 管	2mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)含む	普通	灰黃褐色	外:ナラ 内:ケ目一ナラ	
35-10	下古志3T(d) SD06	土師器 环	底径 7.4 底部 1/12存	若干の1mm以下の砂粒子(長 石・石英など)含む	良好	灰褐色	外:ナラ 底部:ナラ→高台點打→回転ナラ 内:ナラ	
37-1	下古志3T(d) 大塊 3層	赤生土器 蓋	5.0×5.0角 管	1mm以下の砂粒子(石英・ 角閃石・柱状粒など)含 む	普通	にぶい黃褐色	外:側矢文+沈器・ココナ・ココナ 内:ナラ・ココナ(小口)	
37-2	下古志3T(d) 大塊 1層	赤生土器 広口器 鉢	6.5×5.0角 管	微細粒子(石英・長石・角 閃石など)含む	普通	にぶい黃褐色	外:2条の回轉文(断面矢字状)→3 列に加目・縦かいけナハ目 内:ナラ	
37-3	下古志3T(d) 大塊 3層	赤生土器 広口器 鉢	6.0×5.0角 管	1mm以下の砂粒子(長石・ 石英・角閃石など)含む	普通	淡黄褐色	外:2条以上の回轉文(断面U字 状) 内:ナラ	
37-4	下古志3T(d) 大塊 1・2層	赤生土器 器	1口径長 0.6 2.0×2.5角 管	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)含む	普通	淡黄褐色	内:ナラ	口縁部に若干のス ス付着
37-5	下古志3T(d) 大塊 3層	赤生土器 器	口径 16.9 口縫長 1.2 口縫部 1/9存	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石など)含む	普通	暗灰黃褐色	外:2条の沈器文・ココナ・ハ目(6 本/3mm) 内:ココナ・ナラ(瓶狀上口)	外面口縁部スス付着 内面に工具痕跡
37-6	下古志3T(d) 大塊 3層	赤生土器 器	口径長 1.2 4.5×3.0角 管	微細粒子(長石・石英など) 含む	普通	にぶい黃褐色	外:3条の回轉文(断面浅いU字 状)・ココナ 内:ココナ・ナラ	外面及び内面口縁部 スス付着
37-7	下古志3T(d) 大塊 3層	赤生土器 器	底径 8.7 底部 2/3存	1mm以下の砂粒子(長石・石 英など)含む	良好	淡黄褐色	外:ナラ→ココナ 底部:ナラ 内:ナラ	外面スス付着 内面おこげ付着
37-8	下古志3T(d) 大塊 2層	赤生土器 器	底径 4.8 底部 1/8存	1mm以上の砂粒子(石英・長 石・柱状粒など)や 多く含む	普通	にぶい黃褐色	外:ナラ・ココナ 底部:ナラ 内:ナラ・ナラ	外面頭部に若干のス ス付着
37-9	下古志3T(d) 大塊 1・2層	赤生土器 土製円盤	口径 5.0 厚さ 0.5 円孔径 0.8 収容量 300	1mm以下の砂粒子(赤土等 など)含む	普通	淡黄褐色	表:ナラ→側矢文+カキ 裏:ナラ	土質頭部の2次加工品 中央部の押札は未貫 通
37-10	下古志3T(d) 大塊 3層	安山岩 附石	現存高 8.0 現存幅 5.5 厚さ 4.1 収容量 300				角は経年加熱により丸く仕上げる 縁辺に吸打痕 表裏面は研磨したよう にツルツルしている	
39-1	下古志3T(a) SX01	土師器 环	口径 15.4 口縫部 1/6存	緻密	良好	にぶい黃褐色	外:回転ナラ 内:回転ナラ	外面に斜行の網籠跡 キズ痕あり
39-2	下古志3T(a) SX01	土師器 环	底径 5.6 底部ほぼ完形	微細粒子(石英・長石など) 含む	普通	にぶい黃褐色	外:ココナ 底部:修正水切り 内:同心円ナラ	内面中央に径1.4mm の凹みあり

標図番号	出土地点	種別 基盤	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	底形・縫隙・文様	備考
39-3	下古志3T(a) SX01	土師器 耳	底径 4.8 底部ほぼ完形	1mmの大砂粒子(石英・長 石など)含む	普通	に赤い模擬色	外:ナゲ(底部からの立ち上がりを しっかりナゲ)している。角には丸み があるが模様は残す) 底部:系切り 内:同心円ナゲ	全体に風化著しい
39-4	下古志3T(a) SX01	土師器 高台付耳	接合部径 6.4 接合部付近 1/4径	1mm以下の砂粒子(石英・長 石など)含む	良好	模擬褐色	内外・底部:回転ナゲ	
39-5	下古志3T(a) SX01	土師器 高台付耳	接合部径 6.8 接合部ほぼ完形	1mm以下の砂粒子(石英・長 石など)含む	普通	に赤い模擬色	外:回転ナゲ 底部:同心内ナゲ→高台貼付→リ メナゲ 内:同心円ナゲナメ	
39-6	下古志3T(a) SX01	土師器 高台付耳	底直径 4.6 底部ほぼ完形	粗砂粒子(石英・長石など) 及び金星塵を含む	良好	模擬褐色	外:コロナ 底部:同心内ナゲ→高台貼付→リ メナゲ 内:同心円ナゲ	高台に風化あり
39-7	下古志3T(a) SX01	七面器 底	直径 2.5 口径 10.6 底深 5.2 体高 1/6体 底無定形	粗砂粒子(石英・長石など) 及び若干の1.5mmの大砂 粒子含む	普通	に赤い模擬色	外:回転ナゲ(底部からの立ち上 がりは角より丸みをつける) 底部:回転系切り 内:回転ナゲ・同心内ナゲ	
39-8	下古志3T(a) SX01	土師器 底	口径 9.7 口縁部 1/6存	微砂粒子(石英など)含む	普通	模擬褐色	外:コロナ 断面:暗真褐色	
39-9	下古志3T(a) SX01	土師器 小豆	口径 10.0 口縁部 1/7存	1mm以下の砂粒子(長石・ 石英など)含む	普通	模擬褐色	外:コロナ 内:回転ナゲ	
39-10	下古志3T(a) SX01	土師器 (柱状高台 付)底	口径 11.8 底部 1/7存	粗砂粒子(石英・長石など) 含む	普通	模擬褐色	外:回転ナゲ 内:風化著しく調査不明	
40-1	下古志3T(b) SX02	帶生土器 底	口径 22.6 口縁部 1/8存	1mmの大砂粒子(長石・石 英・長石など)含む	良好	に赤い模擬色	外:輪状凹凸線の下垂条の凹縫 文(断面沈積状)-3条の回轉文(断 面沈積状)-ナゲ→ナゲ、6条以上 の回轉文(断面のア字状) 内:ナゲ、(ケ口)(日本1/1.2cm)・燈押 えき→ハケ目(日本1/1.2cm)	
40-2	下古志3T(b) SX02	須志器 蓋	口径 13.5 最大径 18.5 1/10存	若干の粗砂粒子含む	良好	淡黃灰褐色	外:コロナ・ナゲ 内:回転ナゲ・ナゲ	小さなかえしあり
40-3	下古志3T(b) SX02	須志器 高台付耳	底径 8.8 高台高 0.5 底深 1/6存	若干の粗砂粒子含む	良好	模擬褐色	外:回転ナゲ 底部:高台貼付→回転ナゲ 内:回転ナゲ・ナゲ	
40-4	下古志3T(b) SX02 ス刷	須志器 底	3.0×3.0角	若干の粗砂粒子含む	良好	模擬褐色	内:外:回転ナゲ(角は面取りしにく る) 底部:ナゲ	
40-5	下古志3T(b) SX02 ス刷	土師器 耳	直径 5.4 口径 11.6 底深 6.4 1/4存	1~2mmの大砂粒子(石英・ 長石など)含む	普通	に赤い模擬褐色	外:コロナ 内:回転ナゲ・ナゲ	
40-6	下古志3T(b) SX02 ス刷	土師器 耳	口径 15.7 口縁部 1/7存	砂粒子はほとんど含まれず粉 っぽい	普通	に赤い模擬褐色	外:コロナ	
40-7	下古志3T(b) SX02 ス刷	土師器 耳	底径 5.7 底部 1/3存	1mm以下の砂粒子(長石・ 石英など)少量含む	普通	に赤い模擬褐色	外:コロナ 底部:系切り 内:回転ナゲ・ナゲ	
40-8	下古志3T(b) SX02 ス刷	土師器 耳	直径 4.7 口縁部 1/4次 底深	若干の粗砂粒子(石英など) 含む	普通	に赤い模擬褐色	外:ナゲ 底部:回転系切り 内:ナゲ	
42-1	下古志3T(a) SX04	土師器 耳	直径 6.9 底部 1/12存	微砂粒子(石英など)含む	普通	模擬褐色	外:ナゲ 底部:系切り 内:回転ナゲ	内面に刻畫文字 「メロ」
42-2	下古志3T(a) SX04	土師器 耳	口径 12.0 口縁部 1/5存	砂粒子(石英など)及び 金星塵を含む	普通	模擬褐色	外:粗いコロナ 内:回転ナゲ	
42-3	下古志3T(a) SX04	土師器 耳	4.0×3.5角	1mm以下の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)含む	普通	模擬褐色	外:粗いコロナ 内:コロナ・回転ヘラクス(RL)	

標識番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	断面	底成	色調	成形・崩壊・文様	備考
42-4	下古志3T(a) SX04	上部器 高台付灰	底径 6.8 高台高 3.2 底部 3/4存	2mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石など)や多く含む	普通	に赤い黄褐色	外:ヨコナギ 底部:風化著しく崩壊不明→高台部分→3コナギ 内:同心円ナゲ	
42-5	下古志3T(a) SX04	上部器 灰	口径 10.4 底径 5.7 1/2存	微砂粒子(石英など)及び金雲母を含む	普通	に赤い黄褐色	外:ヨコナギ 底部:余切り 内:圓軸ナゲ・同心円ナゲ	
42-6	下古志3T(a) SX04	土師器 灰	底径 5.7 底部 1/2存	若干の微砂粒子含む	良好	に赤い黄褐色	外:ヨコナギ 底部:回転系切り→2cm幅のT.具 内:圓軸ナゲ	
42-7	下古志3T(a) SX04	土師器 灰	器高 4.2 口径 12.4 底径 5.6 1/2部・底部	1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石など)及び金雲母を含む	良好	に赤い橙色	外:ヨコナギ・底縁強いナゲ 底部:回転系切り→ナゲ 内:ヨコナギ・同心円ナゲ	
42-8	下古志3T(a) SX04	土師器 灰	器高 4.8 口径 11.8 底径 5.3 休部 1/3欠	1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石など)及び金雲母を含む	良好	に赤い橙色	外:ヨコナギ・底縁強いナゲ 底部:回転系切り 内:ヨコナギ・同心円ナゲ	
42-9	下古志3T(a) SX04	土師器 灰	器高 4.5 口径 13.4 底径 5.5 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む	良好	淡黄褐色	外:ヨコナギ・底縁強いナゲ 底部:回転系切り 内:ヨコナギ・同心円ナゲ	
44-1	下古志3T(a) P1	上部器 灰	底径 5.6 底部完形	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)含む	良好	に赤い黄褐色	外:ヨコナギ 底部:回転系切り 内:ヨコナギ・ナゲ	
44-2	下古志3T(a) P2	土師器 灰	底径 7.8 底部 1/4存	砂粒子ほとんど含まず緻密	良好	淡灰黄褐色	底部:ナゲ 内:ハク月・ナゲ	外面とも未施り
44-3	下古志3T(a) P3 イ・ス屑 足・高台 付灰	土師器 灰	1/2径 17.2 休部 1/8存	若干の微砂粒子含み、取締	良好	に赤い黄褐色	内界:圓軸ナゲ	
44-4	下古志3T(a) P3	上部器 灰	口径 14.4 口盤径 1/11存	微砂粒子(石英、長石など) 少量含む	良好	に赤い黄褐色	外:強い指ナゲにより外反する端部:ヨコナギ 内:ヨコナギ	
44-5	下古志3T(a) P3	土師器 灰	1/2径 12.3 口盤径 1/8存	微砂粒子(石英、長石など) 少量及び若干の1mmの大砂粒子含む	良好	に赤い黄褐色	外:横く伏った蟲節ナゲ・ヨコナギ 内:ナゲ・ヘリナゲ(BL)	
44-6	下古志3T(a) P3 二層	上部器 灰	4.5×3.0角	微砂粒子(石英、長石など) 吉む	普通	に赤い黄褐色	外:風化著しく崩壊不明 底部:余切り 内:ヨコナギ・同心円ナゲ	
44-7	下古志3T(a) P3 寸幅	上部器 高台付灰	接合部斜 6.4 接合部完形	微砂粒子(石英など)少量 含む	良好	淡黄褐色	外:ヨコナギ 底部:回転系切り→高台粘付→西脇ナゲ・ナゲ 内:回転ナゲ・中心部ナゲ	
44-8	下古志3T(a) P5	上部器 灰	2.5×2.0角	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)及び金雲母を含む	普通	に赤い黄褐色	外:回転ナゲ・ヨコナギ 内:回転ナゲ・回転ヘリナゲ(BL)・ヨコナギ	
44-9	下古志3T(a) P5	土師器 小皿	底径 4.3 底部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)含み弱っぽい	良好	淡褐色	外:ナゲ 底部:回転系切り 内:同心円ナゲ	
44-10	下古志3T(c) P12	上部器 灰	底径 5.3 底部 1/4存	1~2mmの大砂粒子(石英、長石など)含む	普通	淡褐色	内外:ヨコナギ 底部:回転系切り	底部から器壁への立ち上がりの成形が崩壊
45-1	下古志3T(a) 4層	骨生上部 灰	口盤直徑 1.0 4.5×3.0角	微砂粒子(石英、長石など) 多く含む	普通	に赤い黄褐色	外:斜面→3条の凹線文・ヨコナギ 内:底面に底火層 内:ヨコナギ	
45-2	下古志3T(a) 4層	彌生土器 灰	1/2径直長 1.1 2.5×2.0角	微砂粒子(石英、長石など) 含む	普通	淡黃白色	外:2条の沈線文・ヨコナギ 内:黒化著しく崩壊不明	
45-3	下古志3T(a) 3層	気泡器 灰	器高 3.8 1/2径 13.0 底径 10.0 ほぼ完形	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)多く含む	良好	灰褐色に赤い 黄褐色	外:回転ナゲ・苗取りナゲ 底部:回転系切り 内:回転ナゲ・ナゲ	内面中央に径2.4cmの 凹が複数
45-4	下古志3T(a) 4層	灰土器 灰	底径 8.2 底台高 0.4 底部 1/3存	石英、長石など含む	良好	淡灰色	外:回転ナゲ 底部:ナゲ・高台粘付→回転ナゲ 内:回転ナゲ・ナゲ	外一面にスス付着

特徴番号	出土地點	種別 器種	計測値(cm・g) 参考	施工	施成	成形・調理・文様	備考
45-5	下古志3T(a) 2・3層	須恵器 高台付环	底径 10.1 高台高 0.4 下寸詰 1/5存	織砂粒子(石英・長石など) 含む	良好	暗黃褐色	外:33.5° 底部:ナゲ→高台貼付→四輪ナゲ 内:同心円ナゲ
45-6	下古志3T(a) 3層	須恵器 直	底径 1.9 口径 15.2 底径 12.8 1/5存	長石・石英をやや多く含む	良好	淡灰褐色～灰褐色	外:四輪ナゲ・面取りナゲ 底部:角切り 内:四輪ナゲ・ナゲ
45-7	下古志3T(b) 3層	須恵器 大縁	7.0×6.0角	石英・長石を少許含む	良好	青灰色	外:ナゲ・8枚目 内:同心円ナゲ
45-8	下古志3T(c) 3層	土師器 直	2.5×2.5角	粉っぽく堅敏	良好	淡黃褐色	外:邊部平端面ナゲ・コネナゲ 内:コネナゲ
45-9	下古志3T(a) 4層	土師器 高台付环	3.0×2.5角	粉っぽく堅敏	良好	淡黃褐色	内外:33.5° 底部:四輪ナゲ
45-10	下古志3T(a) 4層	土師器 直	底径 4.0 口径 12.4 底径 6.9 1/4存	若干の2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄褐色	に、焼い33.5°・斜位にナゲつけ 底部を強調 底部:四輪系切り 内:コネナゲ
45-11	下古志3T(a) 4層	土師器 环	底径 6.0 底部 2/3存	若干の砂粒子含み緻密	良好	淡黃褐色	外:33.5° 底部:四輪系切り 内:33.5°・同心円ナゲ
45-12	下古志3T(b) 4層	土師器 环	底径 6.1 底部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)また金雲母を含む	普通	淡黃褐色	外:33.5° 底部:静止系切り 内:33.5°・ナゲ
45-13	下古志3T(a) 1層	土師器 环	底径 5.5 底部 3/4存	3mm以下の砂粒子(石英・長石など)若干含み、やや緻密	普通	淡黃褐色	外:33.5°・底部強いナゲ 底部:四輪系切り 内:同心円ナゲ
45-14	下古志3T(a) 4層	土師器 环	底径 6.0 底部 2/3存	若干の砂粒子(石英・長石など)及び金雲母を含み、緻密	普通	淡黃褐色	外:33.5° 底部:四輪系切り 内:33.5°・ナゲ
45-15	下古志3T(b) 3層	土師器 高台付环	底径 9.2 高台高 1.1 底部1/4存	1~3mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	淡黃褐色～暗 褐色	背面中央が凹み、即 確が複雑である
45-16	下古志3T(a) 2層	土師器 見高台 付环	底径 8.4 高台高 1.7 底部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黃褐色	外:33.5° 底部:角切り→高台貼付→ナゲ 内:黒化者しき調理不明
45-17	下古志3T(b) 3・4層	土師器 高台 付环	底径 7.8 高台高 1.7 底部 1/3存	若干の微細砂粒子(石英・長石など)及び金雲母を含み、緻密	良好	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色 外:四輪ナゲ 底部:高台貼付→四輪ナゲ・ナゲ 内:同心円ナゲ
45-18	下古志3T(c) 3層	土師器 高台付环	合接合部 7.0 合接合部充形	微細粒子(長石・石英など) やや多く含み、ずっしりと 重量感ある	良好	にぶい黄褐色	外:33.5° 底部:高台貼付→四輪ナゲ・ナゲ 内:同心円ナゲ
45-19	下古志3T(d) 3・4層	土師器 柱状高台 状底部	底径 7.6 底部 1/4存	織砂粒子(石英・長石など) 含む	普通	にぶい黄褐色	外:33.5° 底部:四輪停止系切り→中央削 系切り?
45-20	下古志3T(d) 3・4層	土師器 柱状高台 状底部	底径 5.3 底部 1/5存	織砂粒子(石英・長石など) 少許含む	普通	にぶい黄褐色	外:ナゲ 底部:四輪系切り 内:33.5°
45-21	下古志3T(a) 3層	土師器 小豆	底径 4.4 底部 3/4存	砂粒子はとんど含まず緻 密	良好	淡黃褐色	外:33.5° 底部:四輪系切り 内:33.5°・同心円ナゲ
45-22	下古志3T(a) 4層	土師器 柱状高台 付盖	底径 5.2 底部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	淡黃褐色	外:四輪ナゲ・コネナゲ 底部:静止系切り 内:四輪ナゲ・ナゲ
45-23	下古志3T(a) 4層	土師器 直	口径 17.0 口詰部 1/8存	織砂粒子(石英・長石・角 閃石など)含む	良好	にぶい黄褐色	外:四輪ナゲ・33.5° 内:四輪ナゲ

## 第4章 古志本郷遺跡採集石器

47-1は、古志本郷遺跡（第46図）で採集された大陸系磨製石斧の扁平片刃石斧である。

流紋岩製で、全長9cm、幅5.4cm、厚さ1.8cmを測る。刃部は丸く、鏽はある。横断面形は砥ぎがあまく、側面は丸みを帯び長方形をなしていない。表面は丁寧な研磨を施してあるが、後主面は敲打痕が多く残っている。これらの特徴から弥生時代中期頃のものと考えられる。

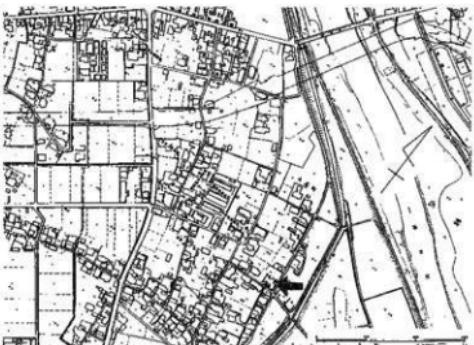
古志町在住の山根氏が、昭和50年（1975）当時の自宅裏畠にて、敷石を置く工事をした際、地表面から約50cm掘り下げた地点で採集されたものである。現地は、古志本郷遺跡弥生集落の高所に位置する中心地で、畑からは弥生土器がごろごろ採集されるところである。

出雲平野では、弥生時代中期後半に集落が次々と形成されており、古志本郷遺跡もそのひとつである。これらの集落では、規模の割に石器が出土しておらず、出雲平野に所在する集落の特徴となっていいる。

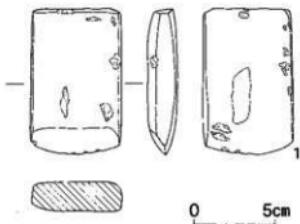
そのような集落から扁平片刃石斧の出土が認められたことは、集落の或る場所には石器が認められるようなところがあると考えられる。大阪府池上曾根遺跡<sup>注1</sup>では、集落中心部の地点Lに「石器埋納」遺構群が存在し、主要な石器を集積している。

出雲平野に所在する主要集落には池上曾根遺跡などと同様に集落外部構造は環濠を巡らせ、同様な集落形態を示している。集落内部構造も基本的には同様なものと考えられ、飛躍的ではあるが、出雲平野に所在する集落にも石器を集積する場所がどこかに存在するのではないだろうか。

注1 摂河泉地域史研究会・乾 哲也編『よみがえる弥生の都市と神殿 池上曾根遺跡～巨大建築の構造と分析』1999 批評社



第46図 石器採集地点位置図（1万分の1）



第47図 古志本郷遺跡採集石器実測図  
(S=1/3)

## 第5章 下古志2Tにおける微化石分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント（株））

### はじめに

本報は、出雲市教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施した花粉分析、珪藻分析およびプラント・オパール分析業務を渡辺がまとめ直したものである。

下古志遺跡は、中国山地に源を有し三瓶山西麓を流れる神戸川が出雲平野に流れ込む出雲平野南西部（出雲市下古志地内）に位置する。また、下古志遺跡周辺には、古志本郷遺跡、思案橋北遺跡、田畠遺跡などが分布している。

### 試料について

第48図に示した3地点で試料を採取した。これらのうち、全地点で花粉分析を、No1、2地点で珪藻分析を、No1地点でプラント・オパール分析を実施している。試料を採取した各地点の模式柱状図を第49図～52図の各種ダイアグラム中左側に示す。また、模式柱状図右の数字が試料番号で、採取層準に示してある。

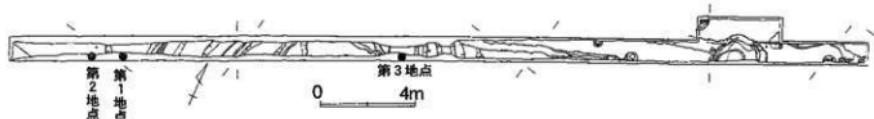
### 分析方法

花粉、珪藻各分析処理は渡辺（1995a、b）により、プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラスピーズ法により実施されている。

全ての分析の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行われた。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行われた。珪藻分析では原則的に珪藻総数が200個体以上になるまで同定が行われた。ただし、花粉、珪藻分析でそれぞれの含有量が少ない場合には、木本花粉総数、珪藻総数が200個体に達していない。プラント・オパール分析では、グラスピーズが400個体以上になるまで検鏡が行われた。

### 分析結果

分析結果を第49図、50図の花粉ダイアグラム、第51図、52図の珪藻ダイアグラム、珪藻総合ダイアグラム、第52図のプラント・オパールダイアグラムに示す。



第48図 下古志2T試料採取位置図

花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。また検出数の極めて少ない試料では（検出数が少なくて得られたデータが他地点と整合性が有る場合には、ダイアグラムにスペクトルで示している。）、出現した種類を「\*」で示した。珪藻ダイアグラムでは検出総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、スペクトルで示している。また検出数の少ない試料では、出現した種類を「\*」で示した。珪藻総合ダイアグラムのうち左端の「生息域別グラフ」は、同定した全ての種類を対象に、それぞれの要因（生息域）毎に百分率で示したものである。その他の4つのグラフは、淡水種の珪藻についてそれぞれの要因毎に百分率で示したものである。プラント・オパールダイアグラムでは、1gあたりの含有数に換算した数を検出された種類毎に示した。

#### 花粉分帶

花粉組成の特徴、および各層の対比から、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

また、No3地点の試料No7～5は、花粉化石の含有量が極めて少なかったことから、花粉分帯の対象から除いた。

##### (1) III带 (No 1 地点試料No10、9、No 2 地点試料No 1)

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、スギ属を伴う。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）、ヨモギ属が高率を示す。

##### (2) II带 (No 1 地点試料No 8～3、No 3 地点試料No 4～1)

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、スギ属、コナラ亜属を伴う。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が300～800%と極めて高い出現率を示す。その他の草本花粉の検出状況から、サジオモダカ属、カヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科、セリ科、ヨモギ属、タンボボ亜科が高率を示す c 亜帯（No 1 地点試料No 8）、カヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）、アカザ科-ヒユ科、セリ科、ヨモギ属が高率を示す b 亜帯（No 1 地点試料No 7、6、No 3 地点試料No 4、3）、カヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、タンボボ亜科が高率を示す a 亜帯（No 1 地点試料No 5～3、No 3 地点試料No 2、1）に細分した。

##### (3) I带 (No 1 地点試料No 2、1)

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、他に高率を示す種類はない。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

## 既知の資料との比較

下古志遺跡内では、渡辺(2001)により花粉分析結果が報告されている。渡辺(2001)は18地点で花粉分析を実施し、I～III帯の地域花粉帯を設定した。ここでは、II帯を除きマツ属(複維管束亜属)が卓越し、スギ属も比較的高率で出現している。

今回分析対象とした試料の堆積時期は弥生時代～古墳時代以降、主に中世以降であり、渡辺(2001)の時期にはほぼ重なる。

III帯(今回設定の地域花粉帯を以下同様に表記する)ではマツ属(複維管束亜属)、スギ属以外の種類が多く検出されることから、W-II帯(渡辺(2001)で設定された地域花粉帯を、以下同様に表記する。)に相当する可能性がある。従って、堆積時期不明のNo 2 地点は、古代頃に堆積した可能性が指摘できる。隣接するNo 1 地点最下層ではNo 2 地点に比べマツ属(複維管束亜属)、スギ属が高率である。同じIII帯に区分しているものの、W-III帯、あるいはW-I 帯との漸移期間に相当する可能性が高い。しかし、今回の分析および断面図の検討からは両層準の上下関係が判断できず、いずれの時期に堆積したものか、判断ができない。

II、I 帯は、W-I 帯に相当すると考えられる。W-I 帯 a 亜帯がアブラナ科の高率出現で特徴付けられているが、今回分析した最上位の試料ではアブラナ科は低いままである。したがって、すべてが I 帯 b 亜帯に相当する可能性もある(アブラナ科は、ナタネ栽培由来すると考えられ、現地性が強い。たまたま、この地点で栽培されていなかった可能性も否定できず、断定はできない。)。

今回の調査地点(2 トレンチ)は渡辺(2001)のE 区北側に位置する。E 区で報告されたW-I 帯 b 亜帯の花粉組成は、草本花粉の割合が高いことが特徴的である。今回の分析結果でも、草本花粉の割合が高く、この傾向と一致する。

## 珪藻分帯

珪藻組成の特徴から各地点毎に以下のように地域珪藻帯を設定した。以下に各珪藻帯の特徴を示す。また、本文中では珪藻組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

### (1)No 1 地点

#### ①D 1-II 帯(試料No 8～6)

酸性・底生種が卓越するほか、陸生種も特徴的に出現する。

#### ②D 1-I 帯(試料No 5～3)

底生種が卓越するが、アルカリ性・浮遊種も僅かに出現する。

### (2)No 2 地点

#### ①D 2-I 帯(試料No 1)

底生種、陸生種が卓越するほか、アルカリ性・浮遊種も出現する。

## 古環境変遷

今回実施した諸分析結果を基に、遺跡周辺の古環境を花粉帯毎に推定する。

### (I)Ⅲ帶期（古代頃？）

#### 1) S D 0 8 の堆積環境および植生

S D 0 8 埋土では珪藻化石の含有量が少なく、計数を行えなかった。得られた花粉化石では抽水～湿性植物であるサジオモダカ属花粉が特徴的に出現することから、比較的浅い水域あるいは湿地環境であった可能性が指摘できる。ただし後述のように、イネのプラント・オパールの検出量が低いことから、S D 0 8 内部が水田であったとは考えにくい。

S D 0 8 内にはサジオモダカ類やガマ類、イネ科の「雑草」などが、溝の土手、近辺の水田の畦あるいは水田内にはキク科やイネ科の「雑草」が茂っていたと考えられる。

#### 2) No 2 地点 9 層の堆積環境および植生

9 層は珪藻帯の D 2 - I 帯が相当する。D 2 - I 帯では底生種、陸生種が卓越し湿地環境での堆積が推定されるが、アルカリ性・浮遊種で湖沼沼澤湿地種群の *Melosira crenulata* が特徴的に検出され、緩やかな流れのある場所が付近に存在した可能性がある。ここではプラント・オパール分析を実施していないが、花粉組成は S D 0 8 埋土と類似している。したがって、水田で堆積した可能性はあるが、沼澤湿地で堆積した可能性がより高いと考えられる。

沼澤地内には S D 0 8 埋積時と同様にサジオモダカ類やガマ類などが、土手あるいは近辺の水田内、畦にはキク科やイネ科の「雑草」が茂っていたと考えられる。

#### 3) 調査地近辺の植生

No 1 地点ではイネのプラント・オパールが 2100~600 個体/g 検出される。また、No 1、2 地点共にイネ科（40 ミクロン以上）花粉の出現率も 50~100% 程度の出現率を示している。一方、他の草本花粉の出現率も同程度あるいはそれ以上に高い出現率を示している。これらのことから、試料採取層が水田耕土であった可能性は低いと考えられる。またイネのプラント・オパールが検出されること、イネ科（40 ミクロン以上）花粉と同時にソバ属花粉が出現することから、近くで稲作が行われ、ソバがイネとの二毛作、あるいは休耕田や畝で栽培されていた可能性が指摘できる。これらのことは渡辺（2001）でも指摘され、下古志遺跡近辺一帯が水田地帯であった可能性が高い。一方で「雑草」の割合が高いことから、田の管理状態が悪かったか、休耕の時期が長かった可能性も指摘できる。

#### 4) 周辺地域の植生

花粉組成からⅢ帶は渡辺（2001）のⅡ帶に対比される。渡辺（2001）は前時期（W-Ⅲ帶）より続くマツ属（複維管束葉属）の卓越を、「遺跡の南から東に広がる中国山地縁辺の丘陵に、アカマツを要素とする二次林が分布していた。」、「クロマツ海岸林が広く分布していた。」のいずれかが原因であるとしている。明記していないものの、双方同時に存在した可能性を否定したわけではない

い。Ⅲ帯期の植生をW-Ⅲ帯からW-II帯への移行と同様に考えれば、アカマツ林の照葉樹林への遷移、および砂州の発達に伴うクロマツ海岸林の西進と肥沃化に伴う照葉樹林への遷移により、出雲平野南側の丘陵、西側の浜山砂丘に照葉樹林が広がったと考えられる。

## (2) II帯期（中世～近世）

### 1) No 1 地点の堆積環境

No 1 地点、No 3 地点両地点ではほぼ同時期に堆積した層を、若干の層相の違いから異なる層として記載している。両地点共に十分な量の珪藻化石が検出されたが、今回はNo 1 地点のみで珪藻化石の同定・計数を実施している。

花粉帯のII帯c、b亜帯が対応する試料No 8～6は、珪藻帯のD 1-II帯に相当する。ここでは酸性・底生種が卓越し、陸生種も検出されることから、時として乾燥を受ける水の淀んだ湿地環境下で堆積したと推定される。a亜帯が対応する試料No 5～3は、珪藻帯のD 1-I帯に相当する。陸生種がほとんど検出されなくなり、酸性種が減少する。さらにアルカリ種が若干増加するなど、湿地内が下上することはほとんど無く、水の流れも僅かに認められ、水質がやや好転したと推定される。

一方、No 3 地点ではNo 1 地点に比べ木本花粉化石の含有量が極めて少なく、炭状物質が多量に含まれることから、土壤化や紫外線による花粉化石の消滅が示唆される。花粉化石の出現傾向から考えると、No 1 地点とNo 3 地点での若干の層相の違いは、例えば乾田、湿田の違いに因るなどの可能性が指摘される。いずれにせよ、No 3 地点でも今後、珪藻分析を実施する必要性が指摘できる。

### 2) 遺跡近辺の植生

No 1 地点、No 3 地点では花粉組成の違いがほとんどなく、花粉組成の違いから堆積環境の違いを読みとることはできなかった。イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が高く、No 1 地点ではイネのプランツ・オパールが多量に検出されるなど、遺跡内で稲作が行われていた可能性が極めて高い。しかし、他の草本花粉の出現率もイネ科（40ミクロン以上）花粉以上に高率であり、現在行われているような集約的な稲作が行われていたとは考えにくい。珪藻分析結果と併せると、c、b亜帯期には休耕地が随所に見られた可能性もある。休耕地を利用して、セリやソバの栽培が行われていた可能性もある。一方、a亜帯期には調査地点が湿田であった可能性が高くなる。一方で休耕地は常時畑として利用され、商品価値の高いワタが栽培されるようになったと考えられる。ワタ属の花粉は同時期のAI区からも検出されており（渡辺、2001）、下古志遺跡内の多くの畑でワタが栽培されていた可能性がある。

### 3) 周辺地域の植生

花粉組成から、II帯は渡辺（2001）のW-I帯に相当する。マツ属（複雜管束亞属）が卓越し、アカマツ林（いわゆる「里山」、「薪炭林」）が広がったと考えられる。草本花粉の割合が高く、遺跡

近辺に森林が迫っていたとは考えにくいことから、アカマツ林はⅢ帯同様に遺跡南～東に広がる丘陵から中国山地縁辺部にかけて分布していたと考えられる。また、「園の松原」や、浜山丘陵にはクロマツ海岸林、島根半島にはアカマツ林が分布していた可能性が高い。

木本花粉でスギ属がやや高い出現率を示すが、この時期には平野部周辺に分布する木は有用材として伐採されていたと考えられる。したがって、中国山地の山間低地に成育していた可能性が高い。しかし出現率が高いことから、遺跡南～東に広がる丘陵部の谷筋に分布していた可能性もある。

### (3)Ⅲ帯期（現代）

#### 1) 周辺地域の植生

花粉組成からⅢ帯は、Ⅱ帯同様に渡辺（2001）のW-I帯に相当する。マツ属（複維管束亞属）花粉が卓越し、アカマツ林が広がったと考えられる。スギ属花粉がさほど高率にならないことから、スギ植林が盛んに行われるようになる近代以前の植生を示している可能性もある。

#### 2) 遺跡近辺の植生

草本花粉でイネ科（40ミクロン以上）花粉のみが突出して高率を示すことから、調査地周辺は現在見られるように一面の水田地帯であったと考えられる。

時期的にはW-I帯a亜帯期に相当するが、今回の結果ではアブラナ科花粉が検出されなかつた。アブラナ科花粉はナタネに由来する可能性がある（藤田ほか、1991）と考えられ、局所的に裏作で栽培されていたと考えられる。

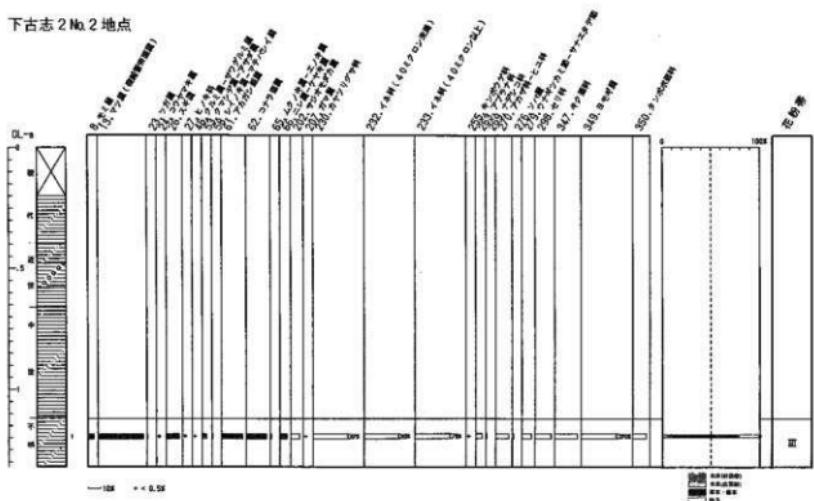
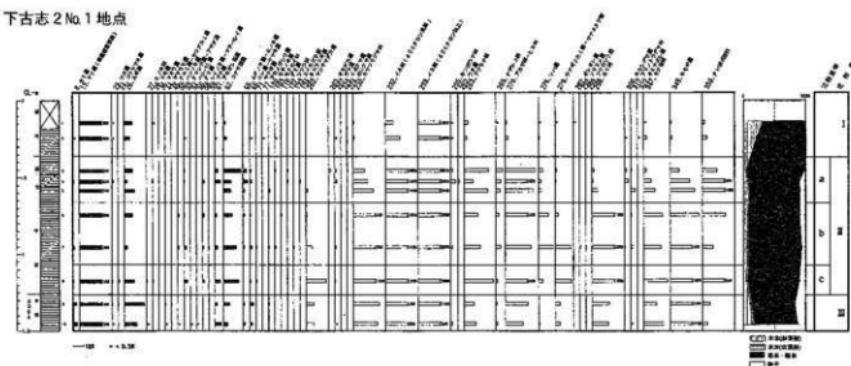
### まとめ

花粉分析、珪藻分析、プラント・オバール分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

- (1)花粉分析結果から、本地域の花粉化石群集をI、Ⅱ帯の2花粉帯に分帶し、Ⅱ帯をさらにa～c亜帯に細分した。
- (2)珪藻分析結果から、No 1 地点の珪藻化石群集をD 1-I、Ⅱ帯、No 2 地点の珪藻化石群集をD 2-I 帯に分けた。
- (3)古代頃？以降の遺跡周辺の古植生変遷を推定した。
- (4)渡辺（2001）では、弥生時代以降の下古志遺跡近辺での稲作を指摘していたが、今回の調査では、古代頃？以降での遺跡内の農耕の様子をより詳細に推定することができた。
- (5)No 1 地点と3地点の中世での堆積層の層相の違いが、乾田、溝田といった耕作形態の違いに由来する可能性を指摘した。今後、新たに珪藻分析を行う必要性がある。
- (6)SD 0.8は比較的浅い水域、あるいは湿地、No 2 地点9層は緩やかな流れのある湿地での堆積物であったと考えられる。

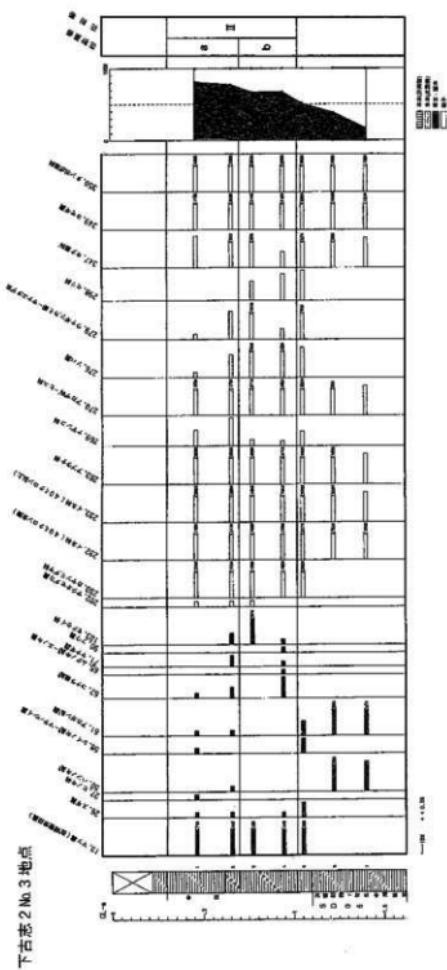
### 引用文献

- 藤田憲司・古谷正和・渡辺正巳（1991）大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について、日本文化財科学会第8回大会研究発表会要旨、33-34。
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪藻体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、p.15-29
- 渡辺正巳（1995a）花粉分析法、考古資料分析法、84、85、ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳（1995b）珪藻分析法、考古資料分析法、86、87、ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳（2001）下古志遺跡発掘調査に伴う花粉分析等調査、一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一本編一、472-485。



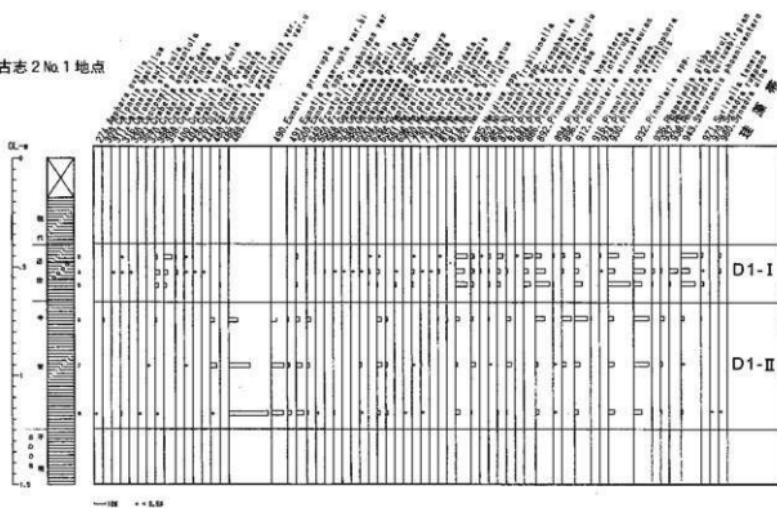
第49図 No. 1 地点・No. 2 地点の花粉ダイアグラム

第50図 No. 3地点の花粉ダイアグラム

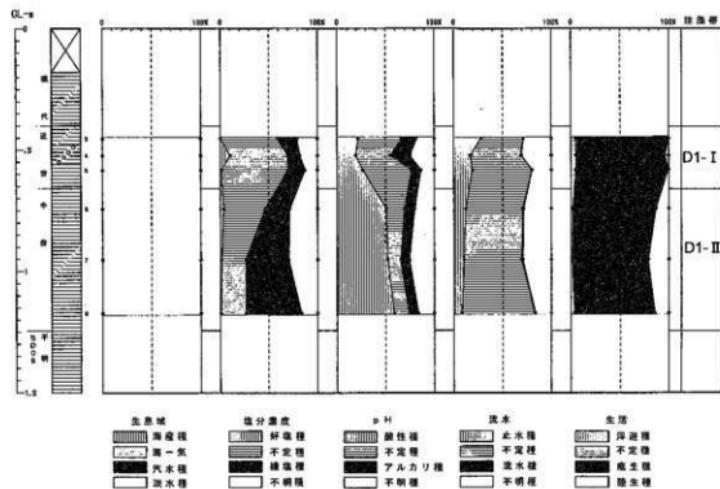


下古志2 No.3地点

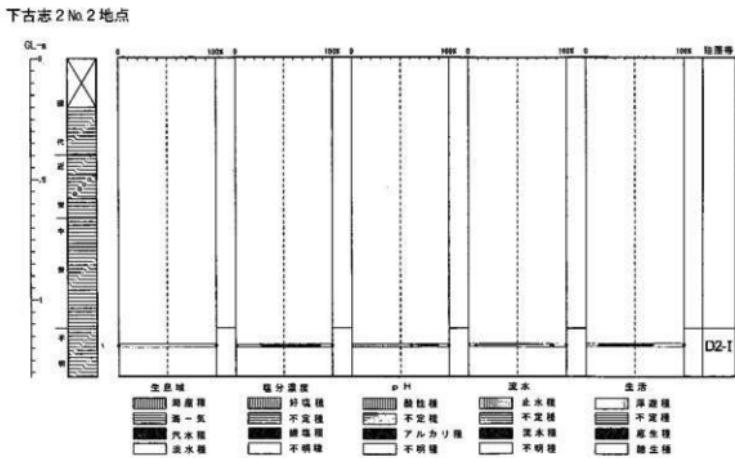
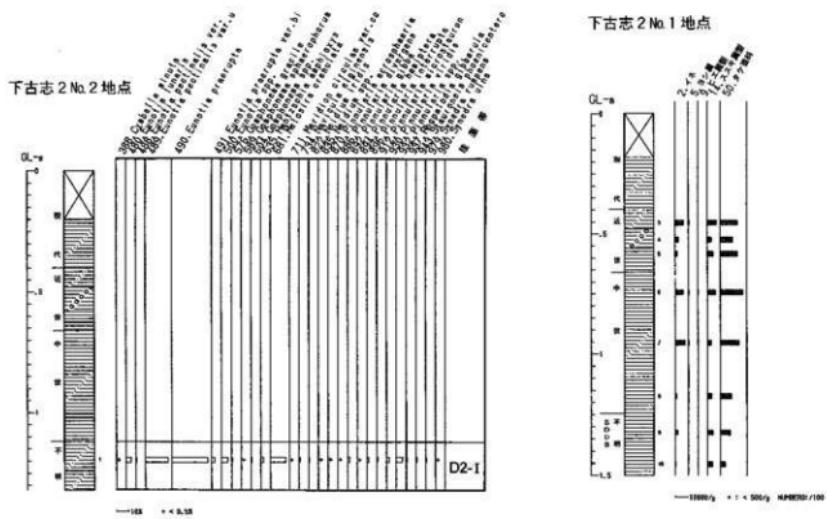
下古志2 No.1 地点



下古志No.1 地点



第51図 No. 1 地点の珪藻ダイアグラム・珪藻総合ダイアグラム



第52図 No. 2 地点の珪藻ダイアグラム・珪藻総合ダイアグラムとNo. 1 地点のプラント・オバールダイアグラム

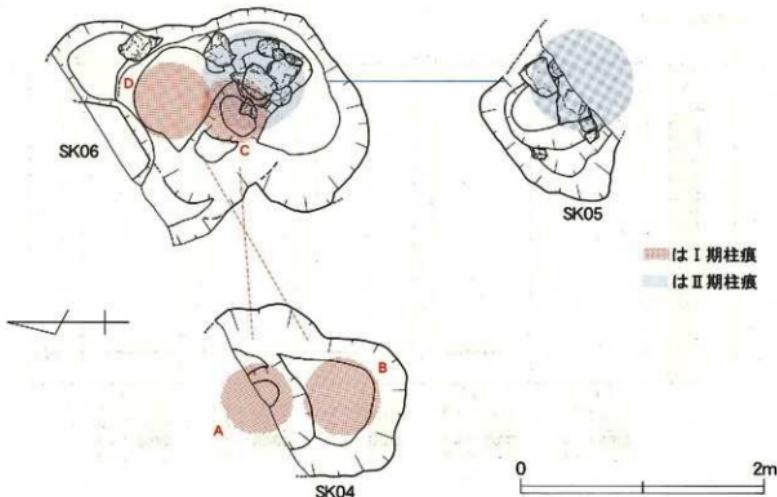
## 第6章 まとめ

### 第1節 古志本郷遺跡

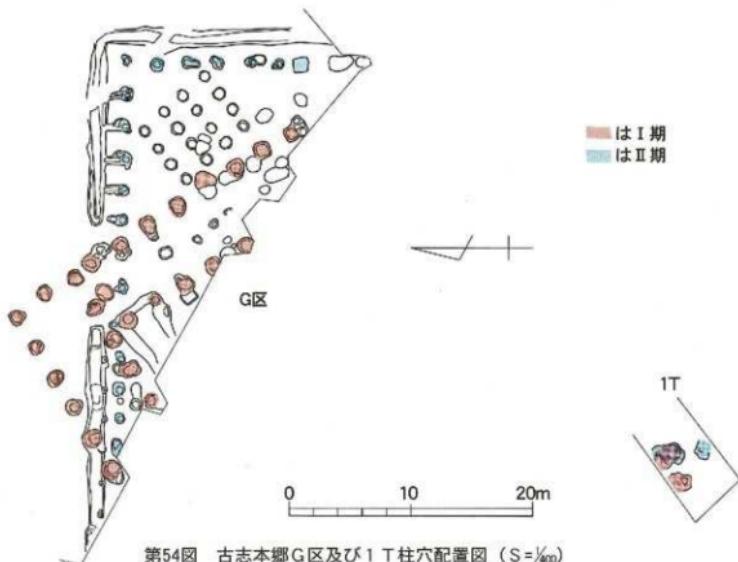
第3章で今回の調査を概要してきた。その結果、SK04とSK06-I期、SK05とSK06-II期がそれぞれ同一の建物を成す大型の柱穴跡と考えられた。新旧両柱穴跡とも遺物の出土量は少ないが、ともに朱塗りを施した土器器坏が出土しており、8~9世紀に対応するものと考えられる。以下、各建物跡はSK06の2時期に対応するので、それぞれI期、II期とする。

前年度島根県埋蔵文化財調査センターで調査されたG区<sup>①</sup>において郡庁と考えられる大型の柱穴跡が検出されている。G区検出II期の柱穴跡には、今回調査したII期の柱穴跡から根石が検出されているのと同じく、根石が検出されている。これら使用された礫は1T及びG区でも同じくほとんどが安山岩を使用している<sup>②</sup>。またG区検出I期の柱穴は素掘りであり、今回調査したI期の柱穴も同じく素掘りである。以上、各調査地におけるI期、II期は両調査地において共通のものと考えられる。

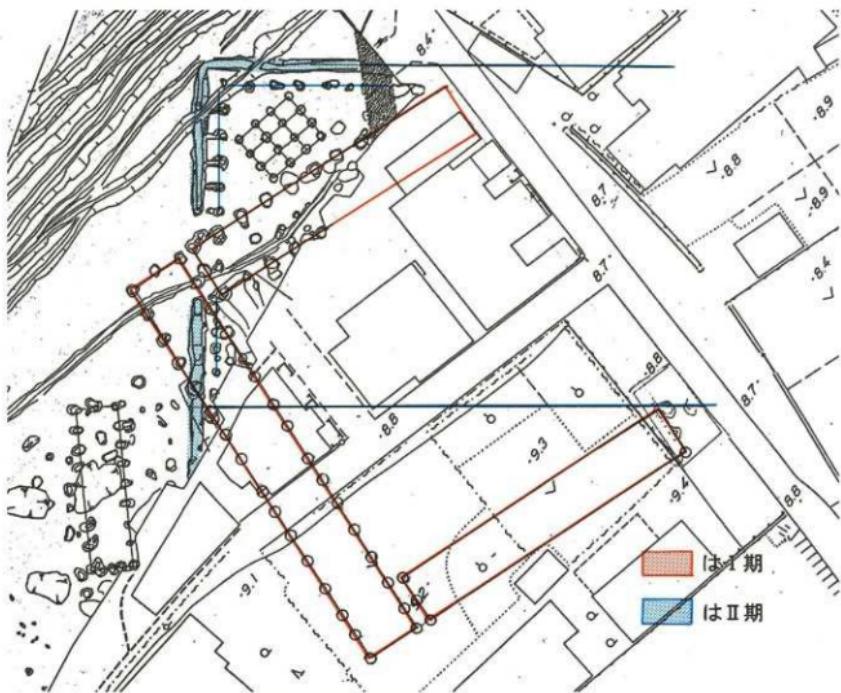
第53図は、今回調査したI期及びII期柱穴跡の配置状況を図化したものである。柱痕と考えられる位置にスクリントーンを貼付した。I期としたSK04・SK06は最深部及び一段上がったステップも柱痕位置であった可能性が考えられ、それぞれA柱痕～D柱痕とした<sup>③</sup>。II期としたSK06は若干動いている根石も考慮し範囲を決めた。SK05は調査区外へと延びているが、SK06及びG区で検出された柱穴内根石の規模から範囲を推定した。それぞれの中心より各柱間はI期がA-C案



第53図 古志本郷1T I期及びII期柱穴跡(柱痕)配置図 (S=%)



第54図 古志本郷G区及び1T柱穴配置図 ( $S = \frac{1}{400}$ )



第55図 郡庁建物復元図 ( $S = \frac{1}{500}$ ) (左が北)

で2.4m、B-D案で2.8m、II期が2.7mを測る。それぞれ結んだ角度は、I期A-C案でN-80°-E (N-10°-W)<sup>注4</sup>、B-D案でN-60°-E (N-30°-W)<sup>注5</sup>、II期は南北軸に乗る。G区で検出された柱間は9尺（約2.7m）とされ、I期のものはN-33°-W、II期のものは東西南北軸に沿って検出されている。今回の調査区で検出した柱間もほぼ同じ、I期B-D案及びII期のラインもほぼ同じ軸に乗るようである。

G区において検出された大型の柱穴跡及び今回調査した大型の柱穴跡の配置状況を第54図に、2時期の郡庁跡推定位置に今回の調査柱穴跡（I期はB-D案）を組み込ませたものを第55図に掲載した。

I期郡庁は、長い建物を「ロの字」または「コの字」形に配置した長舎開いの構造をとると推定されている<sup>注6</sup>。今回検出したI期の柱穴は、そのうち長舎建物の妻側柱列に相当する可能性がある。これらの柱列の調査区東側では関連するような柱穴を検出していないため、長舎開いの建物は「ロの字」形ではなく「コの字」形配置と考えられ、復元郡庁幅は約45mとなる。

今回調査したII期の柱穴列は、直接G区検出の郡庁構列とは繋がらない。ただし、柱間・軸方向は同じであり、同時期の建物とするならば、溝で囲まれた郡行政区画の外側に位置するか、または溝で囲まれたII期郡庁の範囲をより広く想定するならば、郡行政区画内の脇殿などに相当する可能性が考えられる。

郡家には郡庁を中心として多数の建物が付随することが知られている。古志本郷遺跡G区周辺を神門郡家とするならば、南側の微高地上には神門郡家関連建物が広がると考えられる。周辺では古志本郷遺跡J区<sup>注7</sup>、下古志遺跡A区、下古志遺跡1Tなどで全容は明らかにはなっていないが、同時期の建物跡や溝が確認され、神門郡家との関連を鑑みることができる。

注1 古志本郷遺跡G区に関しては、島根県埋蔵文化財調査センターより図面及び掲載許可を頂いた。また当時調査担当の勝部智明氏には現地にて平成10年度調査した柱穴に関連したご教授・ご指導を頂き、G区担当の松尾光晶氏にはG区及び1Tの考察をご教授・ご指導頂いた。

注2 中村唯史氏からご教授いただいた。

注3 I期の柱痕は推定であるため第53図には破線で記した。

注4 ( ) 内はA-C案に直角の角度

注5 注4と同じ

注6 島根県埋蔵文化財調査センター「季刊文化財 第91号」1999 島根県教育委員会

注7 勝部智明「古志本郷遺跡Ⅱ」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XⅠ』2001島根県教育委員会

## 第2節 下古志遺跡

下古志遺跡で調査した1T～3Tは、弥生時代から古墳時代初頭にかけての集落を囲繞すると考えられる大溝の追跡調査であった。これらの成果は後述するが、その他にも、古志本郷遺跡(第1節)で略記したが、神門都家に間わりをもつと考えられる遺構が1Tから検出された(SD01・03・04、SA01・02)。これらの遺構は東西南北方角に乗った配置を成すのが特徴である。また2Tでは表面では未確認であった中世期の窪地を確認することができた。そして下古志遺跡は、北寄りに奈良・平安時代の、南寄りに中世期の遺構が集中していることが今回も確認できた。

次に本題に戻り、各トレンチから検出された大溝についての検討を行う。第56図は今回調査した1T～3Tで検出した大溝、及びA・D～F区で検出した大溝の配置図である。これらを環濠と考えると、内濠をA区SD28とD区SD05、外濠をF区SD01、間帯濠をA区大溝、D区大溝、E区SD04・SD13と捉えることができる。1T-SD02はA区大溝またはA区SD28の、2T-大溝(SD04+SD05)と3T大溝はD区SD05またはD区大溝と繋がる可能性が考えられる。

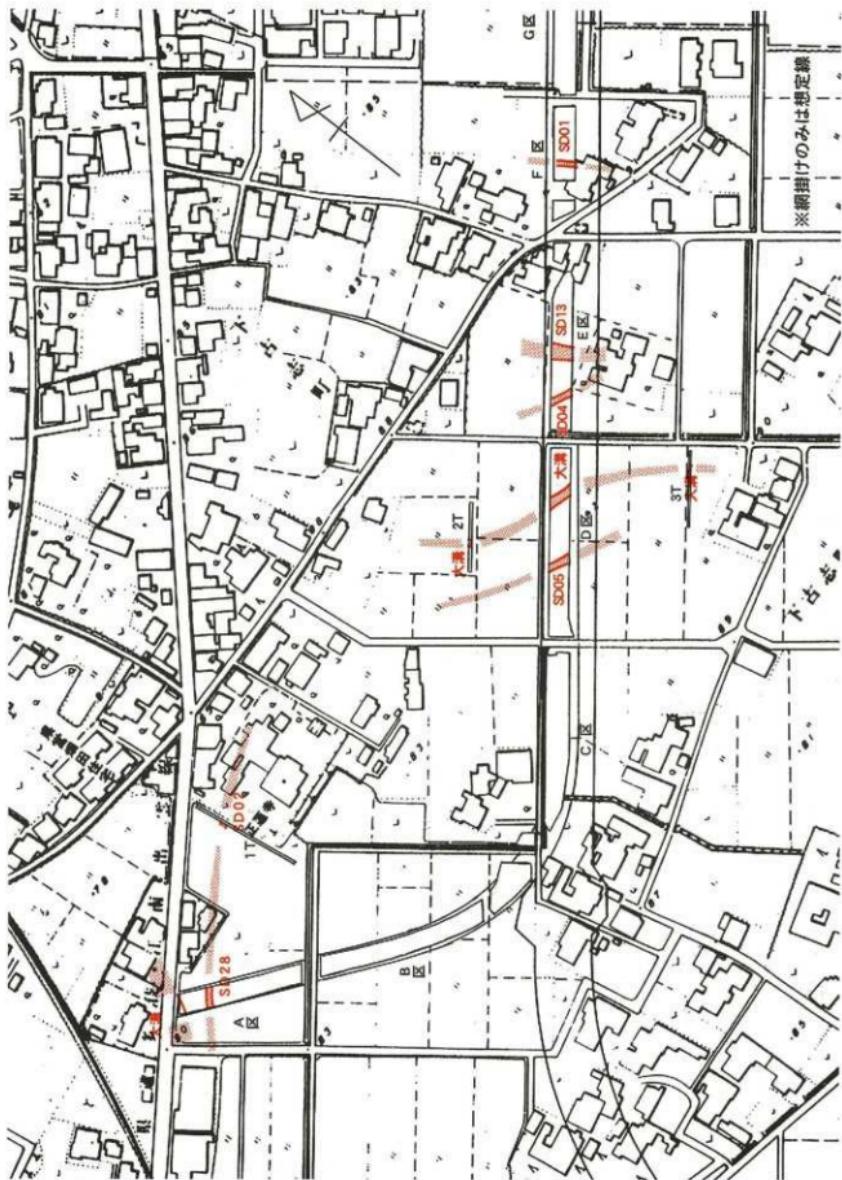
表1は、今回1T～3Tで検出した大溝とそれに関連する大溝の一覧表で、北位順に羅列してある。底面標高に着目すると北側(6m台後半)から南側(7m台前半)へと高くなっていく。また断面形態に注目すると大きくW字状とV字状に分類することができる。

断面V字状を呈し位置的にも近い、A区SD28と1T-SD02は、表1よりほぼ同規格で北東～東北東へと方角を同じくしている。A区SD28の「断面はV字状を呈し、立ち上がりは急傾斜である。」<sup>註1</sup>という記述と同じく1T-SD02も立ち上がりが急傾斜である。また出土遺物もほぼ同時

表1 下古志遺跡1T～3T検出大溝及び関連大溝一覧表

溝名	断面形態	検出幅	底面幅	底面標高	方角	備考
A区大溝	W字状	5.1m (間幅: 25~60cm)	N:0.6~1.3m S:0.25m	N:6.4m S:6.8m	北東	Nが新しく、Sが古い
A区SD28	V字状	2.5m	0.3~0.5m	6.7m	東北～東北東	
1T-SD02	V字状	2.75~3.0m	0.6m	6.95m	東北東	土器の一括発見
2T-大溝	W字状	3.7m (間幅: 40cm)	W:1.05m E:0.4m	W:7.3m E:7.45m	北西	W:SD05 E:SD04
D区SD05	V字状～逆台形	新:3.2m 古:2.5m	新:0.55m 古:0.3~0.8m	新:7.2m 古:7.45m	北西	
D区大溝	W字状	5.4m (間幅: 20~70cm)	W:0.6~0.7m E:0.3~0.6m	W:7.25m E:7.5m	西北西	
3T-大溝	逆台形	3.3m	1.5m	7.5m	西北西	

第56図 下古志道路大溝配置図 ( $S = 1/2500$ )



期の弥生時代中期末～古墳時代初頭のものであり、その中心的な遺物も弥生末から古墳初頭のものである。以上より1T-SD02はA区SD28と繋がると考えられる。A区SD28の底面標高は東が高く西が低くなることが判っている。東に位置する1T-SD02の底面標高はA区SD28より高い位置を占めており、これら検出範囲での大溝は西へ傾斜していることとなる。

次に、断面W字状を呈し位置的にも近い、2T-大溝(SD04(E)・SD05(W))とD区大溝は、表1より検出土幅はD区大溝の方が1.7mも大きいが、これは2T-大溝が後世の掘削により大きく上半部を削られたためであり、他はほぼ同規格で北西～西北西へとほぼ方角を同じくしている。底面標高を比較すると、西側が低く東側が高い標高を示している。また2T-大溝の覆土は橙褐色を呈し、D区大溝の覆土は橙褐灰色を呈しており、ともに地山砂と区分のしづらい人工的に埋め戻された可能性のある覆土で、よく似ている。出土遺物は、2T-大溝は少数ではあるが、ともに弥生中期後葉のものをを中心に、弥生終末～古墳初頭のものを若干含んでいる<sup>注2</sup>。以上より2T-大溝はD区大溝と繋がると考えられる。

3T-大溝は断面は逆台形を呈し、規格はD区SD05と似ている。しかし覆土がD区大溝、2T-大溝などと同様な橙褐灰色を呈する地山砂と区分のしづらい人工的に埋め戻された可能性のあるものである。断面W字状を呈した大規模なものではないが、若干規模を縮小し、その代わり底面幅を大きく造り逆台形とした大溝で、2T-大溝とD区大溝と連続するものではないかと考えられる。

またA区大溝は、内濠に隣接する間帯濠であり、2T-大溝などへ繋がる可能性が高いが、距離が離れ様相も今ひとつ違い、積極的に繋げるには資料不足である。

前記したように第56図から内濠と考えられるD区SD05とA区SD28、これに連続すると考えられる1T-SD02は、ともに断面V字状を呈し、連続する可能性を秘めている。ただし、D区SD05の古溝の出土遺物は弥生中期後葉のもの(1点のみ中期中葉)で、新溝の出土遺物は弥生中期後葉のものが中心で、一部弥生終末期のものが出土しており、新溝で比較しても遺物の出土状況に差がある。これは以前記述した<sup>注3</sup>ように2案を提示しており、それに委ねたい。ただし、周辺から検出された遺構を考慮すると、A区周辺では弥生後期から古墳初頭の遺構が集中し、D区周辺では弥生中期の遺構が集中している。このことから時期的住み分けが考えられ、その違いが、今回のA区及び1T付近とD区の大溝の出土遺物の相違であると考えられる。

以上より、内濠であるA区SD28、1T-SD02、D区SD05が繋がり、間帯濠のひとつである2T大溝、D区大溝、3T-大溝が繋がるという可能性を成果として得ることができた。

注1 A区SD28の詳細は、出雲市教育委員会『一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下古志遺跡』2001 P31～43

注2 D区大溝の出土遺物に対する時期考察は、注1同書 P238～248

注3 D区SD05の詳細は、注1同書 P211～223

# 写真図版

図版 1



古志本郷 1 T (西)  
プラン検出状況



古志本郷 1 T (東)  
プラン検出状況



下古志 1 T (c)  
中世期竪跡  
プラン検出状況



下古志1T(d・e)  
プラン検出状況



下古志1T(e・f)  
完掘状況



下古志1T(b・c)  
SD 0.2より  
下古志A区SD 2.8を望む

図版 3



下古志 1 T (b・c)  
SD02 A-A' 土層断面



下古志 1 T (b・c)  
SD02 B-B' 土層断面



下古志 2 T (c・d)  
プラン検出状況